

入楞伽經の思想史的研究

著者	菅沼 晃
学位授与大学	東洋大学
取得学位	博士
学位の分野	文学
報告番号	乙第25号
学位授与年月日	1974-12-11
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00004006/

入楞伽經の思想史的研究

第四冊



「三〇」二種の縁起と六つの因

そのとき、菩薩マハーマテはまた、世尊
につぎのよう^にに請うた。

―世尊よ、私に、一切諸法の因と縁の相
をお説きください。その因と縁の相を覺知す
るならば、私と他の諸菩薩摩訶薩は有、無
の邪見・妄分別をはなれ、すべての法は順次^て
に生起するとも同時に生起するとも分別しな
いでありましよう。

世尊はこたえた。

一 マハイマテイよ、一切諸法の縁起の相^③

には二種がある。すなわち、外的なものと内

的なものとである。

このうちで、マハイマテイよ、外的な縁起^③

とは、泥のかたまり・棒・轆轤・糸・水・人

間・労働などの諸縁によつて、つほがつくり

出されることである。たとえは、マハイマテ

いよ、泥のかたまりからつほが、諸の織維か

ら布が、うい、うナ草から穀きものが、種か

ら芽が、かきませるゝとなど、人間の骨作を
 ともなうゝとによゝて牛乳から新鮮なバター
 が、つくり出されるように、(思)マハイマテ
 うよ、まゝ、たく同じように、外的な縁起は前
 のものからつぎつぎに後のものが生ずること
 であると知るべきである。
 このうちで、内的な縁起とは、(思)マハイマテ
 うよ、すなわち、無明、渴愛、業などの諸法
 が、縁起といふ名称をうるのである、マハイ
 マハイよ、これら(の無明など)から生じた

蘊・界・處と名づけられる諸法が、縁起とい
 う名称をうるのひある。これらは無差別のモ
 のであるが、凡夫たちによつて、妄分別され
 てゐるのひある。^⑤
 このうちで、マハーマテヤよ、因には六種
 がある。すなわち、マハーマテヤよ、^(一) 当有
 因と、^(二) 相続因と、^(三) 相因と、^(四) 能作因と、
^(五) 顕示因と、^(六) 第六は相待因^⑥である。
 このうちで、マハーマテヤよ、^(一) 当有因と
 は内的、外的な諸法が生ずるとき、因のはた

らきをするといふことである。(二)相続因とは

また、マハーマテイよ、内的・外的な蘊・種

子などが生ずるとき、新縁のはたらきをする

といふことである。(三)相因とは、また、マハ

ーマテイよ、断絶することのない業の相の束

縛を生ずるといふことである。(四)能作因とは、

また、マハーマテイよ、転輪王のよりに、支

配するといふはたらきを行なうことである。

(五)顕了因とは、マハーマテイよ、妄分別が生

じて、あたかも灯火が色などへを照らすよ

うに、存在の相をあらわすはたらしをするこ
 とである。(六)相待因とは、また、マハーマテ
 うよ、滅時に(七)無分別が生ずるとき、相
 続を断ずる働きをするといふことである。
 マハーマテうよ、これらは凡夫、異生のも
 のたちの自らの妄分別によつて妄分別された
 ものである。順次に生ずるものでもなく、
 即時に生ずるものでもない。(八)どうしてであらう
 か。もし、また、マハーマテうよ、(九)それら
 が(一〇)即時に生ずるとするならば、果と因との

区別はなくなるであらう。因の相がえられな
 いからである。(世) また、(それらが) もし順次
 に生ずるとするならば、えられないものの相
 を自体とすることになるから、順次に生ずる
 こゝとはならないであらう。マハーマテ、よ
 いまだ子供が生れないのに父とよはれる(の
 は) 妥当しない。(よ) 順次に生ずることは
 妥当しない。
 マハーマテ、よ、分別論者は、因縁、所縁
 縁、等無間縁、増上縁などによつて所生と能

生があるからとするが、（それらは）順次に
 生ずるのではない。^② マハーマラーヤ、妄分別
 の自性に執着することと相とすることである
 から、（それらは）即時に生ずることではなく
 身体・資具は自心所現のものであるから、^③（ま
 た）自相・苦相をもつ外的な存在はないので
 あるから、マハーマラーヤ、（それらは）順
 次にもあるいは、即時にも生ずることとはな
 いのであり、ただ、自心所現の妄分別によつ
 て、^④識が生ずるのである。それゆえに、マハ

一マテ、よ、あなたは、因と縁とはたらく、の
 結合する相について順次に、あるいは即時に
 とする邪見をはなれるべきである。

このことについて偈が説かれる。

そこでは、いかなるものも、
 諸縁によつて

生ずることなく、滅する、ともない。
 諸

縁がまたに妄分別されて、生じ、滅するの

にあり。(一四〇)

(一四一) 諸縁に滅と生が結むついでいるとい

うことが否定されるのではなく、
 それを凡

夫たちが諸縁によつて妄分別するといふ

とか否定されるべきものである。(一四一)

諸縁において諸法は有としても無としても

生起しない。習氣によつて心がまどわされ

そのことによつて三有があらわれる

(22)

(一四二)

どのようなものであつてもかつて存在する

ことなくして諸縁によつて生じ、滅するとい

いうことはない。有為のものは有女の子、

空華のようである。と見るならは(一四三)

そのときには、能取と所取は迷誤である
 見て（それ）はなれ、生ずへきものな
 く、すでに生いたものもなく、
 く、いかなるものも、どこにも存するこ
 はなく、ただ世俗の言説のみが語られてい
 るのである。⁽²⁴⁾
 (一四四)

〔註〕

① 原文

ant attharāṇa - tevaṃ an 3 Tib. chira - no

thams - ca 1 2 sarva - tharāṇa tevaṃ an 3 する。

5. 一切性。W. T. 諸法。

② 縁之

pratyasaanutpāda - keta - lakṣaṇaṁ nava-

dharmāṁ 12 Til. śaśa śaśa-cad rāgi nten - cin -

kāśa - bar kīgyaṁ - sāli' mtoham - mid. 5' 1' 1'

法 = 種縁相。W. 一切諸法有於 = 種因縁集

相。T. 一切諸因縁生。1: 2, 1' 2' keta 2 除

- saanutpāda - lakṣaṇaṁ nava - 3 5 3。

③

tākyā - pratyasaanutpādaḥ, phiyāḥ nten - cin -

kāśa - pa - kīgyaṁ - ka. 3' 外縁者。W. 外法因

縁集相者。T. 外者。

④

pūṁstāroṭṭarāḥ, aia - ma las paṇi - ma paṇi - mar

hlymni. s. T. 外緣前後轉生。w. 從下上

上心知。

(3) a dhyā-truikāḥ pratyasaṃutpādaḥ, manigīntan-

cini - kṛand - tan - hlymni - ba. s. 內緣。w. 內

法國緣集相。T. 內者。

(3) pratyasaṃutpāda - saṃjñāṃ pratilakṣyaṇte, nten-

cini - kṛand - ba hlymni - ba akṣa - bya - tali' min akṣa

ba. s. 得緣名。w. 名內因緣集相。

(2) te ca avīṛṣṭāḥ saṃpṛāṇte ca tālāḥ, de - dag

mi saṃyad - pa med - va laḥ byi - pa nam byiḥ bṛāṇa

夫之 諸 夫 虛 分 別 各 見 別 相。 丁、 此 但 愚
 夫 之 所 分 別。 乃 亦、 二 乃 一 文 12 一 二 17

Sugruti Trans. p. 93, n. 1 參照。

(8)

1) Bhāṣiyad - bhāṣitū, 2) sambandha - bhāṣin, 3)

bhāṣana - bhāṣitū, 4) teāna - bhāṣitū, 5) vyāñjana -

bhāṣitū, 6) upetā - bhāṣitū, Til. 1) vyūh - bhāṣ

ti vyūh - bhāṣi vyūh, 2) bhāṣ - bhāṣi vyūh, 3) antaḥ -

bhāṣi vyūh, 4) bhāṣ - bhāṣi vyūh, 5) anā - bhāṣ

ti bhāṣi vyūh, 6) bhāṣ - bhāṣi vyūh. 12 一 有

(9)

heln - terty am tearnsty ädly ätna - tälly a - utp attan

de alma - nām, phayī nari gi chas - nuanu ateye -

talī phayī ngyu - talī tya - ta tyeed do (外・内

9 諸 法 が 生 ず か 故 に 因 9 効 ず 可 ず)

(因生 5 4 (10) 1) 5 1 作 因 已 内 外 法 生 0 W、

有 因 1) 相 続 因 1) 相 因 1) 作 因 5) 顯 示

因 6) 待 因 W 1) 当 因 1) 相 続 因 1) 相

因 10) 作 因 5) 了 因 6) 相 待 因 T 1) 当

有 因 1) 相 属 因 1) 相 因 1) 能 作 因 5) 顯

了 因 6) 觀 待 因 0

作因已能生内外法。
丁、
内外法作因生果。

10

ananta - keigā - latesana - uparibaddha, de-ma

thaa - du tyed - naki' atoham - n'ed d'ari k'ernal - ta

17	12	13	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
----	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

stayed do. 8.
17
無
間
相
相
統
生
。
w
、
能
生
相

續次才作事而不斷絕。丁、你無間相生相續。

果。

(=) vinanti - reāle prābandha - vinyā - vyavasthānti

nearby arthritis - interpretation, meaning - pain

dno na, mnam - pa - mi - nlog - pali' chies - no

tabhi phugir bha - ta ngum chad - par byed (Tib.

は

... phugir ngum gyi bha - ta mi - ri chad - par

byed とすか、原元に近。Vrtti 11 2 3) S.

滅時作相續断不妄想性生。W. 於滅時不見

虛妄生法、相續事断絶故。T. 滅時相續断

無妄想生。

(12)

na - vide alpa - realpita bāla - pita agtānair na

terama - nitya - na ngapāt prarantante, bhi - pa

so - dohi abye - so nams teyir (Vrtti. gyis) nari

gi sems teyir nams - par - slopa - par antag - ra ste,

漸生。不俱生。W、凡夫自心虛妄分別。大
慧。是諸法非次才生。非一時生。T、是愚心
夫自所分別。非漸次生也非頓生。

(13)

kaṅga - teā aṇa, tya - ta daṇi tyaed - ya. Vitti.

2. 17 rya daṇi tyaas - ta (因 2 果) 2 1. 10

2 2 1 3 (115. 5. 2) 。

apratilabdha - cetn - laktā aṇa tāt, ryaṇi mātān -

mid du ma - ved - rāṇi pṛyā. S. 不得因相故。

可得故。
以不見因果身相故。
下、求其因相、不

(5) ajāta - putra - pita - sat darat, tu-ma aheya - ya
 pa ahe ya - ya. ५ ४ ३ २ १ ० ३

如未有子不能言父。
丁、
如未生子云何名父。

[illegible]

ま
T2
生
れ
2
い
な
い
の
12
父
と
名
つ
け
る
こ
と

か
と
う
し
2
々
々
か
G°
(
deli-
offa
of the
min

no des bu - ma - shoyes - ka yaai phan tidogs - na yi -

Sta - the River, 116.1. 1)

(16)

taratānān ketā-ālanāna - nirantāra - adhipati-

patyaya - ādīkṣiṇ janya - jantakāraṇa māla-mate

śāraṇa - nityā na utpadyante, kṣo - pras - den - ko

nyaya dai de-ma - thag - pa dai adag - paṇi' atyeta

la - aap - paś atayed - pa - bya - ra dai atayed - paṇi'

phayir nim ayi bying - paś na ataye ate. 2. 漸次生

相續方便不然。但妄想耳。因攀緣次才緣增

上緣等。生所生故。W. 愚癡以夫自心觀察。

次才相續不相忘故。你如是言。因緣。次才

緣。所緣。增上緣等能生諸法。大慧。如

次	所	是
才	緣	次
生	々	才
看	無	諸
理	間	法
不	緣	不
得	增	生
成	上	。
。	緣	丁
	等	、
	、	諸
	所	計
	生	度
	能	人
	生	言
	互	、
	相	以
	繫	因
	屬	緣
	。	

一頁文

anacitta - chaya - dala - thoga - praripitānāthāt,

Til.
E
Ran
gi
nem - ran - bal
lus dan beris-nyed-

can you - make physics 2 1 . 5 . 自 1 心 現 受 用 故 。

有
心
見
資
等
故
、
と
し
る
い
る
の
に
し
た
か

心見身及資生政

(8) vacitta dhāra - vikalpa - vikalpita rūpā, nānī opī sams

mean - ⁷stat mean - par - stops - par mean - par - but ago -

prati phaya. 2. 自心現了竟妄想故。w、但虛

妄識生自心見故。丁、識起自分別見。

(19) 原文

sanishlela 12. 梵本ハ五ページ註 1 12 y

2 sanishlela (union, connection, contact with,

Macdonell, p. 226, a) 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

libal - ba (= asanishlela) 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40

(20)

na shanga - utpada - sanishlela pratyamanam nishyate,

adaye tijig nhegen la libal - ba ni nam - par - talyog -

par ma - tya ste. 5. 非遮滅復生、相續因

緣起。w. 為遮諸因緣、愚人虛妄取。T.

非遮諸緣會、如是滅復生。

(21) 原文

maccavatahi 12. Tikk. yad dani med lāo kēy an

S. 有無緣起法。T. 緣中法有無 1. 2. 2

rad - avatahi 3. 3.

(22) 原文

trivhāne 12. Tikk. and gūm dāy ni amari -

gāhi phayir. S. T. 從是 3 有現 1. 2. 2

tu - thavahi 3. 3.

(23) yavarakāra, dāy - tu arjod - pa. S. 斯皆是言說。

w. 為世間說有。T. 但隨世俗故。

「三一」不立文字について(二)――言葉の妄分

別性について

そのとき、菩薩、摩訶薩マハーマテは、

また世尊につきのようにいつた。

――世尊よ、私に、「言葉の妄分別の相の

核心」^②と名づけられる法門をお説きください。

世尊よ、その「言葉の妄分別の相の核心」を

よく知り、しつかりととらえるならば、私と

他の諸菩薩、摩訶薩は、能説と所説との二義

に通達し、

すみやかに無上の正等覺をえて、

すべての衆生に能説と所説との二義を明らかに

にするてありましよう。

世尊はくたえた。

— それならば、マハーマラーイよ、よく聞

きなさい。よく聞いて、くゝるにとめなさい。

(2) 私はあなたのために説くであらう。

— かしこまりました。世尊よ。

— いて、曷薩摩訶薩マームマラーイは、世

尊のいうことに耳をかたむけた。

世尊はつぎのうにこたえた。

— マハーマテ、よ、言葉の妄分別の相に

は四種ある。すなわち、(一) 相の言葉、(二) 夢の

言葉、(三) 邪悪な妄分別に執着する言葉、(四) 無

始よりの妄分別の言葉である。

このうちで、マハーマテ、よ、(一) 相の言葉

は、自らの妄分別の色の相に執着するところか

ら生ずる。また、マハーマテ、よ、(二) 夢の言

言葉は、前に経験した対象を記憶して、は

つきりした対象の存しないところから生ずる。

また、マハーマテイよ、(三) 邪悪な妄分別に執
 著する言葉は、敵が前に行なうた行爲を記憶
 していらくとかから生ずる。また、マハーマテ
 イよ、(四) 無始の時から妄分別の言葉は、無
 始の時よりの戲論に執著することによる邪悪
 な自らの種子の熏習より生ずる。(五) マハーマテ
 イよ、實に、これが四種の言葉の妄分別の相
 である。以上、私は、たずねられたことにこ
 たえた。

そのとき、菩薩・摩訶薩マハーマテイは、

また、世尊に、の同じく、とを問うた。

― 世尊よ、さらにまた、私に、言葉の妄

分別によつてあらわし出された領域をお説き

ください。人々の言葉によつて表示される妄

分別は、い、い、で、なにから、どのようにして

なによりつて生ずるのでしょうか。

世尊は、うたえた。

― マハイマテリよ、くとはは頭、胸、鼻、

のど、口蓋、唇、舌、齒の総合によつて生じ

ている。

マハーマラーはいった。

— また、世尊よ、(87)言葉は妄分別と

異なるのでしようか、あるいは同じものなの

でしようか。(88)

世尊はうたえた。

— マハーマラーよ、実に、言葉は妄分別

と異なるくともなく、また、同じでもない。

どうしてかというところ、マハーマラーよ、言葉

の妄分別は、それを因として生ずるくとも相

と生ずるくともなく、また、同じでもない。もし

またマハーマテヤよ、言葉が妄分別と異なる
 とすれば、無分別を因とするものとなるであ
 ろう。また、もし（言葉が妄分別と）同じで
 あるとすれば、言葉は意味をあらわすことを
 しないうであらう。⑩しかし、その（言葉は意味
 をあらわすことを）行なっているのである。
 それゆえに、（言葉は、妄分別と）異なるこ
 ともなく、同じでもない。

マハーマテヤは、さらにたずねた。

— また、世尊よ、言葉そのものが第一義

なのでしようか。あるいは、言葉によつて言
 いあらわされるものが、第一義なのでし
 いか。

世尊はうたえた。

——マハーマテ、よ、言葉は第一義ではな
 く、言葉によつていいあらわされたものも第
 一義ではない。どうしてであらうか。すなわ
 ち、第一義諦たる聖智を説くことによつて第
 一義に入るののであるから、言葉そのものは第
 一義ではないのである。①
 マハーマテ、よ、第

一義は、聖智を自内証するくによつて証得
 されるべきものであつて、言葉による妄分別
 の智の対象とするところではない。(12) それゆえ
 に、妄分別は第一義をあらわさないのである。
 また、マハーマラーよ、言葉は生い滅するも
 のひあり、不安定なものであり、相互に因と
 縁となつて生ずるものである。マハーマラー
 よ、相互に因と縁となつて生ずるものはすべ
 て、第一義をあらわさない。自と他との相が
 ないからである。マハーマラーよ、言葉は相

をもつものでありて、
 (第一義を) あらわす
 ことはないのである。

(2) また、マハーマテ、よ、自心所現の

みであることにしたが、い、種々さやがまな相

をもつ外的存在は存しないのであるから、言

葉の妄分別は第一義をあらわすとはない。

それゆゑに、マハーマテ、よ、あなたは種々

な言葉の妄分別をはなれるべきである。

このことについて、つぎのように説かれる。

すべての存在は自性をもたないものである。

言葉もまた同じように、実在的なものではない。⁽¹⁶⁾ 凡夫は空性と空性義を見ないで流転

する。

(一四五)

すべての存在は自性をもたないものである。⁽¹⁸⁾

諸衆生の言葉もまた、妄分別のものであつ

て、それもまた実在しない。⁽¹⁹⁾ 涅槃は夢とひ

としい。⁽²⁰⁾ (このように) 有を完全に知れば

輪廻するともなく、また涅槃に入るにと

もないであろう。

(一四六)

たとえは、王、あるいは長者が、すま
 な土でつくった動物で子供たちを誘い、あ
 そばせて、それから本当の動物を与えるよ
 うに、（一四七）

私もまた同様に（諸法の實際と）相似した
 さまざまな相によって、（一四八）子たちに自
 内証すべく諸法の實際を説くのである。²²

一四八（）

〔註〕

(1) *vij- nikaḥpa - lokaḥ arya - āndaya, taking of man-*

par - ntag - pañi' mātān - nīd' teyī' anīn - pe. 2' 1110
 父母相心經。 3' 分別言相心。 4' 分別相心。

(2) aṭṭi lāpa - aṭṭi lāpā - aṭṭa - dṛaya - gāṭim gāṭāṭi,

byōd' dan' byōd' du' ma' mādīs - pañi' dan' gūa' ntag -
 par' khor - du - chud. 2' 能通達言說所說 = 種種我

3' 能通達言說及義 = 種種之法。 4' 通達能

言說所說 = 義。

(3) 1) lāṭa' ana - vāc, 2) aṭṭapa - vāc, 3) dānīṭhulā -

aṭṭi' mīṇḍā - vāc, 4) anādi - nīkalāpa - vāc, 5) 1110

1) mltkan - nīd teyī tōlīg, 2) nmi - lam gpi' tōlīg,

3) gvas - nām len la mīen - par - ahen - paki' tōlīg,

4) tōg - ma med - paki' dus (= anādi - teāla) teyī

nam - par - nōg - paki' tōlīg. 5. (一) 相言說, (二)

言說, (三) 妄想言說, (四) 無始妄想言說

言說。 6. (一) 相言說, (二) 夢言說, (三) 亡女執言說

(四) 無始言說。 7. (一) 相言說, (二) 言說, (三)

計著言說, (四) 無始妄想言說。

(x) a va - vīkalpa - rūpa - mīmīta - adbhūta, nān gpi'

nam - par - nōg - paki' gvas la atakam - mar mīen - par -

ahen - pa las. S, 從自妄想色想色相計著。W,
 執著色等諸相。T, 執著自分別色相。

⑤ prātibuddha - vijaya - āhārāt, aty - pañi gūḥ
 med - pa las. S, 從覺已境界無性。W, 依境
 界覺已, 知依虛妄境不真。T, 依不真境。

⑥ anādi - kāla - prapañca - abhiniveśa - dāurhulya -
 avatya - vāsanātā, aty - ma med - pañi dū teḥ
 apras - pa la mion - pa - ahen - pañi gūḥ nian - len
 gūḥ nani gūḥ a - ben las. S, 無始虛偽計著過自
 種習氣。W, 從無始末執著戲論煩惱種子集

昭。丁、以無始戲論妄執習氣。

⑤ *vāg - vikalpa - abhinnyate - gaccha, talig ye manan -*

par - ntag - pa mion - rakhi apyod - yud. 妄言說妄

想現境界。丁、言語分別所行之相。

⑥ *anyatānanyā* 18 *Tā. kha - dad dam hōri - te*

gag gam. 妄為不異。丁、為異不

異。1. 2. *anya amanya* 3. 4. 。

⑦ *tad - abeta - utpatti - latsanātrāt, dehi nyar la*

kyari - baki mōtan - mid syi phugis. 彼因生相

故。妄、因彼虛妄法相。丁、分別為因。

Intti
□
姜
分
品り
を
因
々
あ
子
ニ
と
か
ら

(mam-

par-ntog-kaki nyu lar = vicalpa-ketofu) 1110 1111
17 生 子 。 果 の 白 性 の 故 に 。 2 (118.1.6-7)

10. 原文
artak - adri ingatit, to ad vāg na teungāt 17 Tid.

[illegible]

akti vyaktitvam vāg mā bhavāt २ १ २ ॥३॥ ह त्रि

12th. 7 10 5

paramāṇḍa - āṅga - mukha - abhilaṣa - praveśitāt

paramāṇthasya vacanam ma paramāṇthah

聖智內自正境。

(13)

na vāg - vikalpa - buddhi - gocarāḥ, tatvāḥ gīḥ nāma -

par nāg - rāḥi - śloṭi - apyā - yāḥ na yīḥ me.

非言說非智境界。W. 非言語法是智境界。

T. 非言語分別智境。

(14)

vāg lakṣaṇam na - uddhātayati, tatvāḥ mī - mātān -

and āyā - par mī - āyā. S. 言說相不顯示才一

義。W. 言說不能了才一義。T. 言語有相

不能顯示。

(15)

原文

na vikalpayati 3 Tā. 11 mī - nāg go 2

12
\$

Till. drives - no theme - cad. rain -

言者、
云云
~~無~~
体
相。
丁、
一
切
云云
~~無~~
性

と
し
て
読
む
の

10.000 - 10000

48. 2 Vaccinium

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

有
三
法
○
T
、

誤
の
に
の
部
分

と、南条博士は And on examination of man's speech,

when it does not exist (梵本ハハページ、註10)

と記され、泉氏ハ曰人の言説を觀するに而

とあることなし (五一ページ、註) とし

と、右の英訳にしむが、24ページの文を訳

し、26ページが、4ページの訳中の Antagop-ra は

この經典の訳例では nikaalpa - nikaalpa ita =

man - par - ntog - pa Antagop - ra ちといふに用

いられど、妄分別の意味に用いられる

こと多く、この意味に解すべき

2. あ 3 ; 2 考 之 ; 4 3 .

(26)

mir van am asapna - tulyam . Tib. sañi - po rnu - lam

apna kha - bar (実 . 夢 . 変化) 12 ✓

W . 猶如化夢等 . T . 諸有如夢化 .

(27)

laksanais citraih pratibimbairah , mahan - nid

ana - takop gung - baran gyis . W . 種種法自法

鏡像等 . T . 光說相似法 .

(28)

Vitti 以上 声義の同察 12 (apraia .

don apyad - ra drug - kaho) 3 4 3 .

（三二）自心所現について

そのとき、菩薩摩訶薩マハーマテイは、

また（さ）世尊につぎのようについた。

―世尊よ、私に、無、有、同・異・俱、

不俱、有なものでもなく無なものでもない、

と①・常・無常をはなれ、すべての外道の道

をもつては行ずることができず、自内証の聖

智によつてのみ証得され、^②虚妄分別の自相、

苦相をはなれて第一義の真実に入り、たえる

くとなく（菩薩の）地をつぎつぎとあがつて
 清浄を相として如來の地に入ることを相とし
 無功用である本願によつて、さまざまの形を
 （あらわす）マニ宝のように限りない対象に
 おいて働く、一切諸法の、自心所現の領域を
 特徴づける相をお説きください。私と他の菩
 薩・摩訶薩は、このようなくが（説かれま
 した）ならば、虚妄分別の自性である自相、
 其相をはなれた見をもつものとなり、すみや
 かに無上の正等覺をえ、すべての衆生にたい

して、すべての功徳を完成させることができ
るひありましよう。

世尊はうたえた。

— よろしい。よろしい。マハイマテ、よ、

よろしい。マハイマテ、よ。多くの人々の利

益のために、多くの人々の樂のために、世間

へのあわれみのために、^③ 大きな人々の群の利

益のために、諸天と人間の利益、樂のために、

あなたはいまここにあって、まさに問われ

るべきである。このことを考えている。それな

らば、マハーマテ、よく聞きなさい。よく
 聞いて、くらにとめなさい。私はあなた
 のために説くであらう。

——かしこまりました。世尊よ。

といって、菩薩・摩訶薩マハーマテは、世
 尊の説くことに耳をかたむけた。

世尊は（さ）くのことについて、つぎのよ
 うに語った。

——マハーマテ、よ、凡夫・異生のものた
 ちは、ただ自心所現のみであることを覺知し

ない⁽⁴⁾から、外的な種々の存在に執着し、有無
 一異・俱不俱・常無常を自性とする習気にも
 とづく妄分別によって執着し、虚妄分別する。
 たとえば、マハーマテ、よ、夏の暑さに苦し
 む人たちは、蜃気楼による水を（本当の）水
 と考え、飲もうとして（それを）追いかける
 けれども、（それが）自らの心にあられれた
 幻覚であることを知らないために、そこには
 （実際には）水は存しないということを知ら
 ないのとくである。マハーマテ、よ、まうた

く同じように、凡夫・異生のものたちは、無
 始の時から種種な戲論・妄分別によつて慧
 を熏習され、貪・瞋・癡の火によつてその慧
 を焼かれて、さまざまの形態の対象をよるこ
 び・生・住・滅があるとする邪見をいだい
 て内的・外的な存在は無であることを知らず
 一異・有無の執着におちいつているのである
 たとえば、マハーマテ「よ、無知のめ
 たちは、蜃気楼のなかに（本当の）都市で
 はないものを都市だと考へる」とくである。

この都市という想は、無始のときからの都市
 の種子の熏習に執著するところからあらわれる。
 したがって、この都市は都市ではないもので
 もなく、都市でもないのである。マハーマテ
 イよ、まゝたく同じように、(凡夫・異生の
 ものたちは)ただ自心所現のみであることを
 慧によつて確証できず、^⑤無始のときからの外
 道の戲論の熏習に執著し、一異論・有無論に
 執著しているのである。(三)たとえば、マ
 ハーマテイよ、一人の男があり、ねむって

て、夢のなかで、女・男・象・馬・車・住居・
 村・都市・小村落・牛・水牛・森・園・種々
 な山・河・湖で飾られた国の内官に入つてか
 ら目ざめ、目ざめてからかれはその国の内官
 をおもひ出すとすれば、マハーマラーよ、あ
 なたはどう思うだろうか。實在しない夢のな
 か、種々のくとからをおもひ出すこの男は、
 はたして賢者だろうか。
 （マハーマラーは）ゝたえた。
 ー
 い　い　え、世尊よ、かれはそうではあり

ません。

世尊はいった。

— マハイ マテイ よ、まったく同じように、

凡夫・異生のものたちは、悪見にとらえられ

て、^①外学の智慧をもち、自心所現の存在は夢と

ひとしいものであることを知らず、^②一異・有

無の邪見に執着してゐるのである。

たとえば、マハイ マテイ よ、画家のえがい

た画布には高低がないのに、凡夫たちによつ

て高低があると妄分別されるように、マハイ

マテ、よ、未来世において、外学者の邪見の
 熏習によるくころ。妄分別の増長したもののモ
 まったく同じようであらう。かれらは、一異
 論・俱不俱論に執着して、自らをも、また他
 のものをも破滅させ、有無の立場をはなれた
 不生を説くものを虚無論者であるというであ
 ろう。かれらは因果を否定するものであり、
 愛見によつて善と清浄の立場の因を根絶する
 もの^(B)であり、よりすぐれたものを求めるもの
 は、これらを、遠くはなれねばならない、と

説かれる。また、かれらは、その心が自・他
 両者の邪見におちいて、いるものであり、無
 (と) 有を妄分別して建立し、誹謗し、惡見に
 おちいて、たゞ、ろをもつて地獄にゆくであろ
 う。

たとえば、マハーマテ、よ、眼に翳りのあ
 るものが、幻影を見て、「これはすばらしい。こ
 れはすばらしい。」「らんない。」「ああ、尊い
 方々よ。」「と互にいいあうが、しかし、その
 幻影は、(そのようなものとして) 見られ、ま

に、見られないものであるから、⁽¹⁴⁾ ひきよう
 して実在するものでもなく、実在しないもの
 でもないごとくである。マハーマテイよ、ま
 ったく同じように、外学者の邪見の妄分別の
 くらゐに執着し、有と無・一と異・俱と不俱
 を説くことに執着して正法を誹謗するものた
 ちは、⁽¹⁵⁾ 自分自身と他のものたちを破滅させる
 であらう。

たとえば、マハーマテイよ、凡夫たちは

眞実の輪ではないたいまつでえがいた輪を

(眞実の) 輪であると妄分別するが、諸賢者は
 そうではないごくである。まゝたく同じ
 ように、マハーマテ、よ、そのくくろが外学
 者の要見にあちいつているものたちは、すべ
 ての存在の生起について、一異・俱不俱を虚
 妄分別するであらう。
 たとえば、マハーマテ、よ、天より雨がふ
 るとき、水泡は水晶の玉のように見える。そ
 れで、凡夫たちは、それを水晶の玉として執
 着し、追い求めるが、マハーマテ、よ、それ

らの水泡は、（そのようなものとして）とら
 えられ、また、とらえられないものであるか
 ら、玉でもなく、玉でもないものでもないとい
 くである。まったく同じように、マハーマテ
 ィよ、外学の邪見による妄分別心の習気に熏
 習されたものたちは、無なるものより（諸存
 在が）生起し、そして諸縁によって有なるも
 のより消滅すると説くであらう。⁽¹⁹⁾
 また、マハーマテ、よ、かれらは、三つの
 量と「五つの」支分⁽²⁰⁾を設定し、（23）聖智⁽²¹⁾の

自内証によつて証得すべき二つの自性をはな
 れた實在が自性として存在する、と妄分別す
 るであらう。しかし、マハーマテ、心・
 意・意識の所依を⁽²²⁾轉じ、⁽²³⁾自心所現の所取と能
 取の妄分別をすて、⁽²³⁾如來地において自内証の
 聖智をえた⁽²³⁾修行者たちには、有・無の想は存
 しないのである。

また、マハーマテ、もし、くのような
 境地を對象とする修行者たちには、有・無の執著、
 があるとするれば、かれらには、その同じ我に

に、いする執著・養育者にたいする執著・プル
 シヤにたいする執著・ブドガラにたいする執
 著があるであろう。また、マハーマラヤ、
 くのようにな存在の自性と自相、苦相の教説は、
 すべて、マハーマラヤよ、変化の仏による教
 説であつて、法性の仏による教説ではない。⁽²⁵⁾
 また、マハーマラヤよ、（このような）教説
 は凡夫のくくろのうちにある見によつて生ず
 るものであつて、⁽²⁶⁾ 聖智を自内に証得し、三昧
 の樂に住するくともあらわすのではない。⁽²⁷⁾

とえば、マハーマテ、よ、水に木の影がうつ
 っ、ているとき、それは、木の形でもあり、ま
 た、木の形ではないものでもあるから、^③それ
 は影でもなく、影でもないものでない、^③とく
 である。ま、た、く、同、じ、よ、う、に、マ、ハ、ー、マ、テ、
 よ、外学者の邪見の習氣に熏習されて妄分別
 するものたちは、慧によつて自心所現のみで
 あることを確証する、^③となく、一異・俱不俱
 無有を妄分別するであらう。

た、と、え、ば、マ、ハ、ー、マ、テ、よ、鏡のなかに映

ったすべての色像が、縁にしたがつてあらわ
 し出される。(ヤ)が、それらは自らの妄分
 別であるから、色像でもなく、また色像では
 ないものでもない。それらは、色像としても
 見られ、また、色像ではないものとしても見
 られるからである。そこでマハーマテ、よ、
 凡夫たちにとって、自心所現の妄分別が、
 それらの色像のかたちをとつてあらわれ、い
 るのである。まったく同じように、マハーマ
 テ、よ、自心の影像が、一異・俱不俱のすが

たをもつてあらわれているのである。

たとえば、マハーマテイよ、くだまは、人

河・風の結合からうまれて聞かれるのである

が、それは音声として聞かれ、また音声では

ないものとして聞かれるのであるから、実在

するものでもなく、実在しないものでもない

ごくである。まったく同じように、マハー

マテイよ、無有・一異・俱不俱の見は自心の

習気による妄分別である。

たとえは、マハーマテイよ、草も灌木もつ

る草も森もない土地に太陽がかかわることに
 よつて、蜃気楼が波のようによれうごくが、
 それらは、貧着されるものでもあり、また、
 貧着されないものでもあるから、^③ 実在するも
 のでもなく、実在しないものでもないごく
 である。まったく同じように、マハイマテ
 よ、凡夫たち、無始のときからの戯論の邪
 悪な習気によつて熏習された妄分別の識は、
 生と住と滅・一と異・俱と不俱・無と有・聖
 なる自内証智という実事の門として、^③ 蜃
 気楼

のようによれうごくのである。

たとえば、マハーマテ^イよ、屍と魔法であ

らわし出された人間は、生命をもったもので

はないけれど⁽³²⁾、ピシ^イー^イ4^イがかわるくとは

によつてうごく出するのであるが、凡夫たちは

それが前進する、あるいは前進しないとして

その実在しないものを妄分別し、執着するこ

とくである。まったく同じように、マハーマ

テ^イよ、(95) 凡夫・異生のものたちは邪悪

な外学者の意向にあちいつて、一異論に執着

する。しかし、その（主張）は實在していな
いのを虚妄に建立してゐるのである。⁽³³⁾

それゆゑに、マハーマテ、よ、あなたは、
聖なる自内証の實事を証得するため、生と
住と滅・一と異・俱と不俱・無と有の妄分別
をはなれるべきである。⁽³⁴⁾

このことに関して、つぎのように説かれる
識を第五とする（五）蘊は、水のなかの木
の影に似て、仮設として幻・夢のようにな
らわれてゐる。⁽³⁵⁾（これを）妄分別してはな

らない。(一四九)

この三有は、幻影・夢・幻のひとくであり、

蜃気楼のなかの水のように立ちさわいでい

る。³⁸ (一)のよう三有を) 観察すれば、ひ

とは解脱をうるであらう。³⁹ (一五〇)

たとえば、夏季に、くくろをまどわせる蜃気

楼が³⁸生じて、獣たちは(くれを)水である

とおもうけれども、それには実体がないよ

うに、(一五一)

識の種子が見の対象において展開すると。³⁹

凡夫たちは、あたかも眼に翳のあるものが
 翳を（感ずる）ように、それが生じている
 と執着する。^(五)

無始からの輪廻の道なかで、有にたいす
 る執着におおわれている凡夫を、あたかも
 くさびにたいしてくさびを（用いる）よう
 に、貪著させて、（それより）はなれさせ
 る。^(五)（一五二）

世間はつねに、幻・魔法に動かされている
 もののごとくであり、夢・閃光・雲のごとく

くである(96)見るならば、ひとは三つ
 の相続をたち切つて解脱するであらう。(

一五四)

あたかも空中の陽炎のように、そのうちに

はまつたうかなる仮設もない⁽⁹²⁾と、そのよ

うに諸法を知れば、もはやいかなるものを

も知ることはない。(一五五)

この仮設はただ名称のみといううであ

て、相をもつて存するのではない。

(五) 蘊は幻影に相似するものであるが、

それにたいして妄分別がなされる。(一五六)

画・^(F3) 幻影・幻・夢・カンダルワア(の都市

たのまつでえがいた火・^(F4) 辰気楼は実在しな

いのであるが、人々には(実在するものの

ように)あらわれる。(一五七)

凡夫たちは無始よりの過誤に束縛され、ま

よわされて、常無常・一(異)・俱不俱を

妄分別する。(一五八)

鏡・水・眼・かめ・マニ宝のなかには映像

が見られる。しかし、それらのもののなか

には、どうにも、映像が実在しているのではない。(一五九)

たとえば空中の蜃気楼のように、存在は種々にあらわれていて、種々の形で見られて
 いるのであるが、それはあたかも夢のなか
 の石女の子のようなものである。(一六〇)

【註】

①

na-eva-ati-nanata, mchis-ra hrai ma lags ma-
 mchis-ra hrai ma lags-ra. S. W. 非有非無。T.

非有無。

(2)

arya - p r a t y ā t m a - m ā n a - g a t i g a m y a , t i p t a g y a - p a d i
 a s - n o n a n g i g e - k e s t e y i s m e d h y e n - p a . s a - 自意聖
 智所行。w . 聖智自証意所行故。T . 自証
 聖智所行境界。

(3)

l o k e a - a n u k a m p ā y a i , t i g i g - n t a n l a a n i - a s t a e - t a .
 哀愍一切諸天世人。w . 為哀愍一切天人。
 T . 哀愍世間。

(4)

a s a c i t t a - d i s t a - m ā t r a - a n a r a t o d h a , n a n g i n e n s
 a n a n - t a - t a m d u m a - c h u d - y a . s . T . 不知心
 量。w . 不能覺知唯自心見。

(5) aracitta - dhuti - thanānti - anasatthā, nāi yi aem

tegi lta - tas mor - ta tthoi - du ma - chud - pa .

(6) ādhyātmika - kāhya - thāra - athāra - atthāla

3 Tel. 12 phyi nāi gi dhias - po la mi - mthas - pa

1 2 athāra 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

T 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

(7) anādi - kāla - magala - tija - vāna - atthimēst ,

thog - ma - med - pati duo māi pōi - thyer gyi ka - ten

gyi tog - chaps la māon - pa - thon - pati phyi . 3

無始 著 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

種子熏習。T. 無始時來執著域種立習熏故。

(8) *anacitta - dhya - mātra - anaradhānīya - matayak,*

nai gi aems anai - ta - taam du telori - du ma - chud -

pañi ste - can. S. 不能了知自心現量。W. 不

覺知唯是自心虛妄見。T. 不能了達自心的

現。

(9) 原文

ten disti - distas 12 Tā. ste - ta nam - ba giin -

pa. S. T. 惡見所噬 11 4. 2 ten disti -

distas 3 to 3.

(10)

asapna - tulayāt anacitta - dhya - ste āram na pañi -

vijānantaḥ, naṇi gi som - smari - tāhi - dīśa - po naṇi -
 lam lta - tur tskori - du ma - chud - pa nams. S. 不
 知如夢自心現量。W. 不能覺知諸法夢睡自
 心見故。T. 不了唯心。

(11) tathā - dhṛti - vāṇana - āyaya - prativikāḥ - puṭaḥ,
 mu - dṛga - can gyi lta - ba nian - paḥi - bṛg - chaḥ ṣṣi
 kaam - pa nam - pa - rā - dṛg - pa śin - tu - ṣṣa - pa.
 S. 未來外道惡見習氣充滿。W. 諸外道邪
 見心熏習。T. 惡見熏習妄心增長。

(12) nāstika, med - pa - po. S. T. 無。W. 不正見

者。

(13)

dun dani ana - un mülita - keta - teubala - kuteba - yakei al,

dye - ta dkar - keta' phayoga reyi ngyu lla - ta nian -

pas nta - ta mas phayui - ta yia.

S' 技書根壤清

淨因。W' 因邪見故技諸一切書根白法清淨

之因。T' 技書根本。

(14)

dani ana - adani anataki, mthori - ta dani ma -

mthori - tahi' phayin. S' T' 見不見故。W'

有見不見故。

(15) 原文

uthaya - anutpam ataya na dkar na

atā arāḥ 10 Til. vin-tu yct-pāḥari ma yin te mod-

paḥari ma yin no. 5. 畢竟非性。 3.

本無自体。

1. 非有非無。 2

atā arā-

amutp am ataya 3 除。 1. atyantam na dhāro

na atā arāḥ 3 5.

16) sad dhārma - aparāḍakāḥ, dam-paḥi chas la

dharm - ta manas. 5. 1. 非正法。

17) alata - cakera, magal - meli. tithon - lo. 5. 1.

火輪。

18) deve pravasiati, Til. chan-ta tithat - paḥi the

(雨が降るときに) W. 天雨。

(19)

asatā ca utpādam vāṇaṅgīṅanti pratyayāḥ

asatā ca vināśam. nāgen mams teḥś med-ya las

stege - ba dari yod-ya las teḥśi kyig - par amra -

ban kgyur no. (諸縁に ↓ 1 2 無より生起

かあり、また、有より消滅かありと説く。

あり) S. 於無所有説有生縁有者言滅。

W. 説非有法依因縁生復、有説言実有法滅。

T. 説非有爲生壞於縁有。 ∴ ∴ ∴ は Vāts.

ニヤーヤ学識をいは、無より果が生じ、

有とまた全図

(dhyāy - pa, 4. 220. p. 914. 8)

と

と、縁に、と、断、と、切、と、れ、と、考、と、れ、と

と、諸、存在、は、夢、の、と、う、に、不生、と、あり

生、と、あり、と、説、く、と、あり、う、に、(120. l. 1-2)

に、よ、る、。

(20)

pramāṇa - kṛyā - asayava - pratyavasthāna, tadad-

ma gacchati gatiḥ yam - lag na - na gacchati - pa. 5. 3

三種、量、五、分、論、。T. 三、種、量、。

(21) 原、之

citta - mano - manovijñāna - citta - vācānīty -

adhyāna - 6. 5. 二、(目、6. citta は、Tid.

aens dai yid dai yid teji' nam - par - hee - pali' gras
 sin - tu gyur - pa. W. 離心意識 轉身。T.
 轉心意識。1. 1. 1. 1. 2 除く。5 は心意識
 識身心 轉 2 2 杯に本現形 12 同い。

(2) avacitta di'ya - grāhya - grāhata - vitālya -

prakṣa, nani gi aens nani - tali' gyuri - da dai
 k'adain - pali' nam - par - nōg - pa nat - tu - a'raia -

pa. S. 自心現相所攝諸妄相心斷。W. 離自

心見能取可取虛妄境界。T. 離能所取。

(23) tathāgata - bhūmi - pratyātmā - āyāyāna - gata,

de - bodhi - gāy - paḥi' a tīphāy - pa so - so nani
 gāi nig - paḥi' ye - 'es thoṭ - pa. S. 如來地自覺
 聖智。W. 入如來地自覺進趣聖智。

(24) eṣā mairiṃ anīṭa - buddha - deśanā na dharmatā -

buddha - deśanā, tidi mi' apud - paḥi' aṇis - nṇas

teyis satan - pa ate, chas - ind teyis aṇis - nṇas

teyis satan - pa ma nṇas no. S. 是化仙所說。

非法仙說。W. 是名化仙說非法仙說。T.

是化仙說非法仙說。

(25) tāla - āṇaya - gata - dīṇi - pravṛtta, byis - paḥi'

laam - pa la yod - pa ki lta - ba byun - ta. 5. 由
 愚夫希望見生。W. 隨順愚癡凡夫見心。T.
 但順愚夫所起之見。

26) ニのコンパウンドの前 *pratyavasthana - gati -*

avasthanta - dhama, nam - pan - bying - pa ki nam -

rabhi gyi chos は理解困難である。5は、51

建立趣自性法として原文のコンパウンドの

語順のままに記語を置い、いるのみであり、

W は建立如実修行として、T は、この即今を

欠い、2いる。ニニニニはTにし、たか、た。な

お、言、は、直、接、の、部、分、に、し、水、2、い、た、い、。

(27)

utpala - anumthāna - asamsthānataḥ, hini gi

abhyinis dan abhyinis med - pali' physis. S, 非、樹、形、

非、非、樹、形、。W, 有、樹、則、無、樹、則、無、政、。T, 非、

樹、形、非、非、樹、形、。

(28)

avacitta abhaya - mātra - anavadhārita - matayahi,

rahi gi nemi anari - ta - taam du tshori - du - ma -

chud - pali' slo - can dag. S, 不、能、自、心、現、量、。

W, 不、覺、知、唯、自、心、覺、。T, 不、了、自、心、。

(29)

binba - astitayahi, garga sta - kur. S, T,

作像想。

(30) lotiya - aloting atak, chig - pa dai mi - chig -

paiki phigir. S, 貪無貪故。W, 令象生歡喜

不歡喜故。T, 以倒想非想。

(31) arya - pratyātma - jñāna - vāta - muthena, kphlapp -

pa no - so nai gi ye - aet teyi dries - pofu tahul du
yari. S, 緣自性事門。W, 聖人內身証智門

中。T, 聖智自証法性門中。

(32) vetāla - yantira - puruṣaṁ mīśratraṁ, no - lais dai

phedraul - phedra ygi mi mi sem - cam med teyari.

S、有人呪術機究、以非生歟。W、有人依呪術力起於死尸。T、木人及以起屍。

(33)

aa ca aad-thita - samānopah, yai - day - ra ma
yai - ran ayo - hita - ra. S、不妄建立。W、

虚妄建立。T、虚妄言說。

(34)

原文

utpāda - vācīti - bhāṣa - vācīti - anyatva -

utpāda - anutpāda - māyā - vācīti - anyatva -

utpāda - adbhūta - vācīti - vācīti - vācīti -

anyatva - pratyātma - vācīti - adbhūta - vācīti -

S、欲得自覺聖智事、當離生住滅一異俱不

但有無非有非無常無常無常見妄想ニヨる。

Tib. stge - ra dai mi stge - ra (utpāda -

anutpāda) byig - ra dai gnas - ra dai gcig -

ra dai tha - dad - ra dai gnis - ra dai gnis - ra

ma yin - ra dai yod - ra dai med - ra dai byang -

ra so - so rai gi dias - ro tshoi - du - chud - ra - tsa -

tsali nam - ra - stog - ra dai anal - ra - tsa . m .

遠離生住滅一異俱不俱有無非有非無常無常

故。自身內証聖智分別故。T. 當於聖智所

証法中、離生住滅一異有無俱不俱等一切分

別。

(35)

māyā - vāp na - vāpā - dīṅyā (read dīṅyā for
dīā, according to p. 95, m. 5) vīṇāpṭyā, anā - ta
agyu - ma nmi - lam dīa. nam - par nig - pas. M

如幻夢所見，莫依意識取。T. 所見如幻夢。

(36)

manīcy - udaka - vīṭhā mat, amig - agyu chu bālin.
ma - ta. M 如焰水迷惑心。T. 如陽焰幻夢。

及毛輪。

(37)

vīṭhā nento vīṇācyāte, nam - par - agyu na

nam - par - pōto. M 若能如是觀，修得解。

脱。 T. 若解如是觀。 究竟得解脫。

(38) *migasthina* *citta* - *mohani*, *samo* - *cam* (*ratna*)

phu - *stahi* *amig* - *ayya* - *ta*. S. 如鹿渴想。 動轉

速。 亂心。 W. 獸。 會。 水。 搖動。 迷。 惑心。 T. 焰。 動

轉。 迷心。

(39) *upandate* *dhuti* - *gorare*, *lta* - *stahi* *nyul* *la* *nat* -

tu - *gyo*. S. T. 動。 轉。 見。 境界。 W. 境界。 動

生。 見。

(40) *gihanti* *giyanta*, *abhe* - *tar* *ti* *dan*. S. 妄

想。 生。 W. 取。 為。 妄。 T. 生。 執。 著。

(41)

原之中

Salak 12

upa guhitam 2

格

E

2

3

2

2

Salam 3

le

yalla

alam

palestina

vinsantaget 12

Til.

j. lta

ger

la

ger

kabin-

du, fido in - pa

tyed

de

mam - pa -

glog 12

1

2

2

讀

12

5

如

逆

捐

捨

離

w

如

因

捐

誑

凡

夫

入

法

出

離

如

因

捐

出

捐

(42)

na

ky

atra

tea

acid

vignapin,

adi

la

mam - pa -

rig

gar -

yan

med.

s

於

彼

無

有

有

諸

識

知

T

此

中

無

所

43
原文

citam 12

Ti-da. ni-mo.

\$

W

T

अथवा

12
2

city am

६
क
३

48 原 文

al at am

Til. mag - me tilber - le =

alata - cabra

に
し
て
か
う
で
す

\$
.
w
.
T
.

✓

車人

45
原文

citt am 17

Tid. 20m

T

15

言戲

٤

५

3

か

100

ニ
ニ
2
は
文
所

上

citram

٤

L

2

11/15

h

TL

〔三三〕

如來の法説について

また、マハーマテイよ、諸如來の法の教説は四つのものをはなれている。すなわち、一異・俱不俱の立場をはなれ、有無を建立し、誹謗するところをはなれるところである。マハーマテイよ、諸如來の法の教説は、(四)諦・縁起・滅への道・解脱にもとずくものである。マハーマテイよ、諸如來の法の教説は、(五)パラクリティ・イー・イー・シエウ・アラ・無因・欲主

極微・時・自性に結びついたものではないのである。

また、マハイマテイよ、（諸如来は）煩惱と所知の二つの障を淨めるために、隊商の頭のように、順次に一〇八の無相の論題と、諸乗と（菩薩）地の支分を明確にする相に（衆生を）導くのである。

〔註〕

①) *madriccha, idod - ngyal.*

丁・宿 17。

「三四」四種の禪について

また、マハーマテ、よ、四種の禪がある。

四種とは何か。すなわち、(一)凡夫の行なう禪

と、(二)義を觀察する禪と、(三)真如を所縁とす

る禪と、(四)第四は如来の禪である。

くのうちで、マハーマテ、よ、(一)凡夫の行

なう禪とは何か。すなわち、声聞・縁覺の修

行を行なうものは、人無我(を)知り、存在は自

相と共相をもつものであること、身体は骨鎖

よりなり、無常・苦・不浄を相とするもので
 あることに執着して、くれは、このような相を
 もつものであつて、他のようではないと見、
 順次に上位にのぼつて、無想定（にいたる）
 のであるから、愚夫の行なう（禅）である。
 また、マハーマテ、くのうちで、（二）義
 を観察する禅とはなにか。すなわち、人無我
 （を知らず）自相と共相・外的（存在）外学者
 による自と他と両者は無であるとし、法無我
 と菩薩地の相の義を観察する、ことにもとづく

ものが、義を觀察する禪である。

マハイマテイよ、くのうちで、(三)真如を所

縁とする禪とはなにか。すなわち、虚妄別

れた二無我は妄分別である。(と知り) 如実

に住するならば⁽³⁾ 妄分別は生じないから、

れを我は真如を所縁とする(禪)というので

ある。

(二) また、マハイマテイよ、(四) 如来の禪

とは何か。すなわち、如来地の相に入り、⁽³⁾ 自

内証の聖智の三相の樂に住して不可思議な事

を衆生のために行なう^⑤から、如來の禪と私は説くのである。

このことに關して、つぎのように説かれる。

義を觀察する禪と、凡夫の行なう禪と、眞如を所縁とする禪と、清淨な如來の禪とがある。 (一六一)

修行者は、修行を行なうとき^⑤、太陽・月の

形に似たもの^⑤、蓮華・パール^⑤に似たもの、

の、空中の火・畫に似たものを見る。(一

六一)

これらの種種の相は、（衆生を）外学者の
道に尊き、声聞と縁覺の領域におとしけれ
る。（一六三）

これらのすべてを滅して、無相となるとき、
すべての仏国より集つてきた仏手の光は、
利益するひとの頭をなで、真如にしたがう
相に（入らせるの）である。^⑧（一六四）

【註】

①) āśā - upacārikam āgyānam, 2) attha -

pravicāyam āgyānam, 3) tattata - ālambanam āgyānam

- 4) *tiṭṭhā'gāma dhyānam*. Tib. 1) *bya-ra rāe-tar*
apayed-paḥi' laam-gtan, 2) *don rāe-tu dhyed-paḥi'*
laam-gtan, 3) *de-bodini-nid dmiyo-paḥi' laam-*
gtan, 4) *de-bodini-gyego-paḥi' laam-gtan*. 12.
 愚夫所行禪、(一) 觀察我禪、(三) 攀緣如禪、(四)
 如來禪。13. (一) 愚癡凡夫所行禪、(二) 觀察我
 禪、(三) 念真如禪、(四) 諸仙如來禪。14. 愚夫
 所行禪、(一) 觀察我禪、(三) 攀緣真如禪、(四)
 如來禪。

三原之

samde ala

は

梵

本

九

七

へ

ー

じ

註

5

に

よ

2 聲 讀 玉 . S . W . T . 骨 鎖 .

(3) parikalpita - naināmya - dṛṣya - vikalpa - yathābhūta -
 avasthānāt, teṣaṁ - antaḥ - pa - śdag - med - pa gñis teḥ
 mam - pa - śdag - pa la gñis - dag - pa ji - kṣānti du gñis -
 paś . 妄 想 = 無 我 妄 想 , 如 妄 處 不 生 妄 想 心 .

W . 觀 察 虛 妄 分 別 因 緣 . 如 妄 知 = 種 無 我 ,
 如 妄 分 別 一 切 諸 法 無 妄 体 相 . T . 若 分 別 無

我 有 = 是 虛 妄 念 . 若 如 妄 知 彼 念 彼 念 不 起 .

(4) tathāgata - bhū - my - ā - de - āra - praveśam , de - kṣānti -
 gñis - pati - sakti - mam - pa la tṛyāṅ - pa . S . W . X

如來地。T. 入仙地。

(5)

pratyātma - āṅgāpīnā - lokaṇa - bhāga -
vīṭāna - acintya - ātma - bhūta - bhāvanatāya ,

śiphrāga - pa - ro - ro nān gi ye - āro bhūta - mīd

gāma ggi bde - ā la gva - pa noma - can ggi don

laam - ggi mi - bhūta - pa bhūta - pāli phūta .

行自覺聖智相三種樂住成并象主不思議事。

W. 入內身聖智相三種樂行故能成并

象生所作不可思議。T. 住自記聖智三種樂

為諸象生作不思議事。

⑥ 原之

pung'at は Til. Antoon - byas ma. T. 在定

" 4 1 2

pung'ant

3 1 2

読む。

鈴木博士

article in his exercise (p. 86)

読

1 2

おられる。

⑦ 原之

Noma - shi-ō kara - namo thānam は Til. ni-

ma sha - baiki dhyāna titha

" より意味

⑧

padma - pātāla 3 Til. は bod dai pad - mo - pādā-

padma

3

5

2

0

2

2

T

1

鉢頭摩嶺。

W

1

鉢頭摩海相。

⑨

nimittam tatātā - anugam, yaai - day ryes - an

figo - baiki' ltaas. 5

随順

入

如

相。

W

1

入

真

如

無

相

丁

欠

〔三五〕涅槃について

そのとき、菩薩・摩訶薩マハーマテは、
また、世尊につきのようにいつた。

―世尊よ、（經典のなかに）涅槃、涅槃
と説かれておりますが、世尊よ、いかなるも
のを涅槃というのですか。

世尊はくたえた。

―すべての識の自性の習気とアーラヤ（

識）・意・意識の見の習気とを転捨する」と

が涅槃であり、涅槃の領域は自性空である実
 事の境界である。私と一切諸仏は説く。

(29) また、マハーマテ、よ、涅槃は、自

内証の聖智の境界であり、常と断・有と無の

妄分別をはなれたものである。どうして常で

はないのであろうか。すなわち、それは自相

共相の妄分別をすてたものであるから、常で

はないのである。このうちで、断ではないと

は、すなわち、過去・未来・現在のすべて

聖者が自内証をうるものであるから、断ではない

いのである。

また、マハイマテイよ、大般涅槃とは消滅

するこゝとでもなく、死ぬこゝとでもない^③。もし

マハイマテイよ、大般涅槃が死ぬこゝとである

とすれば、それは生に拘束されたものとなる

であらう。また、もし消滅するこゝとである

すれば、それは有為の相に墮したものとなる

であらう。それゆゑに、この理由によつて、

マハイマテイよ、大般涅槃は消滅するこゝとで

もなく、死ぬこゝとでもなく、
 修行者たちは（

この死をはなれた依所^⑤にいたるのである。

また、マハーマテ、よ、大般涅槃はすて去

るものでもなく、うるものでもなく、断絶す

るものでもなく、常住なものである、一義

のものでもなく異義のものである、涅槃

槃といわれるのである。

また、マハーマテ、よ、声聞・縁覺たちの

涅槃は、自相と共相を覺知し、世間的なつな

がりをなくし、^⑤対象にたいする顛倒をもたな

い、こゝとによつて、妄分別がはたらかない。そ

れゆえに、かれら（声聞・縁覺衆にあるひと
 と）には、そのなかに、涅槃の覺が生ずる
 のである。

〔三三〕

(1) *ma nana - gati - vutthāva - vīṇata - vada - gacāma, aya - maṇ*
laśāda - paṭi - tthāva nani - lobhi - dā - vā - dā tehi dāsa - pāṭi
apya - yul te. な、涅槃、自性、法境界。マ、涅槃、
 法境界、空事故。丁、即是諸法、自性境界。

(2) *āyapaṇāna - paṭyāṭṭa - gati - gacāma, āyapaṇāna - ā - ā*
naṇ - gā - nā - paṭi - ye - ā - tehi apya - yul. な、耶智自

實境界。W、內身聖智修行境界。T、自証聖智所行境界。

(3) makāhan'ira vā am na nāto na maraṇam, yonī - an
mya - nān las tīdas - ka ni tīgī - ka ma yin no. tīkhi - ba
ma yin no. S、涅槃不死。W、般涅槃者
非死非滅。T、大般涅槃不死。

(4) cyuti - vigatam saṇaṇam, vi - kīḷo dan āra - tāli ayaḷlo.
(5) aśamaṇga, tīda - tīdhi med - ka. S、不習近境界。
W、不樂慣聞。T、捨離慣聞。

〔三六〕二種の自性の相について

また、マハーマテ^イよ、二種の自性の相^②が

ある。(一八)二種とはなにか。すなわち、言

葉の自性に執着すること^③と、ものの自性に執

着すること^③である。このうちで、マハーマテ

よ、言葉の自性に執着することとは、無始

のときからの言葉による戯論の習気に執着す

ること^②から生ずる。また、マハーマテ^イよ、

このうちで、ものの自性に執着することとは

自心所現のみであることを覺知しないとか
 う生ずる。

〔註〕

(1) avatāra - lokaana, nai - bhūti gr̥iṣ. teji
 mātman - vid. T. 自性相。W. 法体相。

(2) abhīlāpa - avatāra - abhīmūḍa, arjita - bhūti
 nai - bhūti la mūḍa - par - abhī - ya. W. 自
 性相計著。W. 執著言説体相。T. 執著言
 説自性相。

(3) vāta - avatāra - abhīmūḍa, dhī - ya. nai - bhūti

la m nion - nar - aken - ra . s , 事自性相計
 著 。 w , 執著世事体相 。 T , 執著諸法自性
 相 。

(4) anādi - kāla - nāte - prapañca - vāsanā - abhinivṛta ,
 thog - ma med - pati' du teyi' taking tu apres - pati' tag -
 chag la mion - kar - aken - pa . s , 無如言說虛偽
 習氣計著 。 w , 無如來執著言說戲論熏習 。
 T , 無如戲論執著言說習氣 。

(5) sva citta - dīpa - māla - anasabodha , nani gr amu
 nani - ba taam du tshoni - du ma - chud - pa . s , 不覺

自心現分音。w、不如妄知唯是自心見外境
界。丁、不覺自心所現。

〔三七〕二種の威神力について

また、マハーマテイよ、二つの威神力によ

って加持されて、諸菩薩は、諸如来・阿羅漢

正等覺者の両足にひれ伏して問うた。二つの

威神力によって加持されるとはどういうこと

であらうか。するわち、三昧にひとしく入る

威神力とすべての身と口と手によつて灌頂す

る威神力とである。

このうちで、マハーマテイよ、諸菩薩、摩

訶薩は、初地において仏陀の威神力によつて
 加持され、大衆のかかやきと名づけられる菩
 薩の三昧に入る。そして、かれら諸菩薩・摩
 訶薩がただちに大衆のかかやきという菩薩の
 三昧に入ると、十方の世界に住する諸如来・
 阿羅漢・正等覺者は、その面前にあらわれて
 すべこの身と口と言葉をあらわして加持する
 のである。たとえば、マハーマテ、よ、ウア
 シエラガルバ菩薩・摩訶薩と他のかれと同じ
 相と功德をもつ（一〇）諸菩薩・摩訶薩と同様

に、マハーマテ、よ、諸菩薩、摩訶薩は初地
 において、三昧にひとしく入る威神力をうる。
 かれらは、百千劫のあいだ集積した善根によ
 って、順次に（菩薩）地へのほって対治
 と対治の相に通達し、菩薩の法雲地に（い
 たる。そこで）は菩薩、摩訶薩が、大きな蓮
 華の宮殿のなかに住し、かれと同じすがたを
 した諸菩薩、摩訶薩にかゝまれ、すべての宝
 物でかざりつけた王冠をもっている。十方の
 世界より来た、黄金色のチャンパカの花・月

の光・蓮華と似た諸仏の光は、その蓮華の宮
 殿に住する菩薩・摩訶薩の頭を、轉輪自在で
 あるインド王のように、すべての身と口手
 で灌頂する。そこで、この菩薩と、かの諸菩
 薩が、手によつて灌頂する威神力に加持され
 たものといわれるのである。マハーマテイよ、
 これが、諸菩薩・摩訶薩の二つの威神力であ
 り、この二つの威神力によつて加持されて、
 諸菩薩・摩訶薩はすべての仏をいまそこに見
 る。これ以外には、諸如来・阿羅漢・正等覺

者を見ることはできない。

また、マハーマテイよ、諸菩薩・摩訶薩の

(102) 三昧・神通・教説のたぐいによつてあ

らわされるものは何であつても、それはすべ

て一切諸仏の二つの威神力に加持されたもの

である。

もし、また、マハーマテイよ、諸菩薩・摩

訶薩が（諸仏の）威神力なくして説法すると

すれば、マハーマテイよ、凡夫異生たちもま

た説法することになるであろう。何故である

うか・すなわち、威神力によつて加持されな
 いのであるからである。マハイマテイヤ、草
 かん木・木・山も、種種の樂器・かめも、都
 市・住居・家・宮殿の住人も、如來の威神力
 が加わることによつて、（そのようなもの）と
 いわれるのである。マハイマテイヤ、まして
 こころをもつものは、なおさらである。マハ
 イマテイヤよ、おし・めくら・つんぼのものも
 自らの欠陥から解き放たれる。このようにし
 て、マハイマテイヤよ、如來の威神力は、大

なすぐれた功徳をもつているのである。

また、マハイマテイはいった。

― 世尊よ、どうして諸如来・阿羅漢・正

等覺者は、諸菩薩・摩訶薩が三昧にひとしく

入っているとき、およびすぐれた地^に入っ

ているとき、灌頂になる加持をおこなうの

でしうか。

世尊はくたえた。

― それは、魔の業と煩惱をはなれるため、

声聞の禪定の地におちいらせず、如来地を自

ぬ証するこゝによつて、証得した法を増大

させるためである。マハーマテ、よ、これ

らの理由によつて、諸如来・阿羅漢・正等覺

者は諸菩薩・摩訶薩を威神力によつて加持す

るのである。しかしながら、マハーマテ、よ

もし、（諸如来によつて）加持されないなら

ば、（103）諸菩薩・摩訶薩は、外學・声聞・

魔のこゝろにおち入つて、無上の正等覺をう

ることはないであらう。それゆゑに、この理

由によつて、諸菩薩・摩訶薩は、諸如来・阿

持、持諸菩薩。

(2)

am adhi - am apatty - adhi thāna, tin - ne - adhi

la thoms - par - riyig - pali' syin gyis nals. s' =

味正受。w、依三昧三摩跢提住持力。T、

令入三昧。

(3)

amra - teya - muktā - paing - adhi eka - adhi thāna,

phrag thoms - cad teyis dāni - skan - pali' syin gyis

nals (すべこの手によ、2灌頂する威神力)

s、為現一切身面言說神力及手灌頂神力。

w、通身得樂謂仏如来手摩其頂受位住持力。

各課とも相違する。

(2) sarva - buddha - muktāny avasthāyati, sarva -
 rāgaśrama - caścā teṣāṃ śāśvata. S. 面見諸
 仙如來。W. 能觀察一切諸如來身。T. 能
 親見一切諸仙。

(8) 原文 - adbhūtaṃ 12 adbhūtaṃ 3 了。

(9) vīśa - bhūman, bhagad - parāyaṇa. S. 勝造
 地灌頂時。W. 入諸地時。T. 殊勝地中。

(10) tattvāṅga - bhūmi - pratyāhva - adbhūtaṃ, de - bhūmi -
 gāyā - bhūmi - caścā teṣāṃ śāśvata. S. 為得如來自覺地故。W. 為內身
 為得如來自覺地故。W. 為內身

3

「三八」縁起について

そのとき、菩薩・摩訶薩マハーマテイは、
また、世尊につぎのようについた。

― 世尊は縁起を説かれましたが、それは

因を説くことによつてのみなされ、自らの教

えの本源を確立する説ではありませ^ん。世尊

よ、外学者たちもまた、因より（存在が）生

ずる、すなわち、ブラタ・ナ・イー・シユウ・ア

ラ・ポルシヤ・時・極微の諸因より^③諸存在が

生ずると説いております。また、世尊は縁に
 ついての他の同義語によつて諸存在の生ずる
 くとをお説きになりましたが、それはすぐれ
 た定説ではありません。なせならば、世尊よ
 外学者たちともまた、有と無から諸存在が生
 り、そして生じおわつて縁によつて滅すると
 説いてゐるからです。世尊は、無明を縁とし
 て諸行があり、ないし、生死があると説かれ
 ましたが、これは世尊によつて無因論が説か
 れてゐるやであつて、有因論ではありません。

世尊よ、これがああるからかれがああるといわれ
 る。このことは、同時に成り立つているもの
 にとつては妄当するけれども、順次に生ずる
 うとに依存して成り立つものにとつては（妄
 当）しません。^⑤ また、（104）世尊よ、外学者
 の説はすぐれていて、あなたの説はそうでは
 ありません。どうしてでしょうか。どうして
 かというところ、世尊よ、外学者たちの因は、縁
 起によらないで果を生ずるから^⑥です。しか
 世尊よ、あなたにとつては、因は果に依存し、

果もまた因に依存するのであって、因と縁とが混乱し、このようにして相互の（依存を必要とする）無窮の過失となるであらう。世尊よ、もし、これがあるからかれがあるというならば、世間は無因のものとなるでしよう。

世尊はくたえた。

——マハーマテヤよ、新の（立場）は、無

因論ではなく、したがつて、因と縁とが混乱するところにもならない。なぜなら、これがあ

るからかれがあるというときには、所取と能
 取は存せず、ただ自心所現のみであるところを
 覚知するからである。しかし、マハーマティ
 よ、もし所取と能取とに執著し、外的な対象
 の有無によつて、^も自心所現であるところを覚知
 しないものかあれば、マハーマティよ、その
 ものにこそ、この過失がおくつてくるのであ
 りて、私の縁起説を説くなら、^②このよ
 うな過失となることはないのである。

【註】

(1) svanava - poverty - avasthāna - wealth, nani gyi tabul
 gyis alar - gnan - paki' gnam. 自體起。
 說自說。T. 自體起。

(2) 原文 - am - pratyagethyal 12 Til. agyu las filgyini -
 ka 1. 4. 2 - am - tsarameethyal 3 to 3. 3.
 因。

(3) pratyaya - paryāya - antareya, nkyen gyi' mnam -
 grans gnan gyis. T. 但以異名。

(4) na vidhānta - vidhāntaram, gnat - paki' mthaali'
 taye - brag - tu dbye - ta mi' mchis so. 有問心

檀、
無間悉檀。
W、
不說有自建立法。
T、

非我 有 別

⑤ 原文

முடிபட முன்கூறிதான் ஥ாசான் எது

tharali/ aamrati idam tharati iti na parama-

[illegible]

ト	
言尺	
に	
し	
ん	
か	
フ	
二	
.	
中	
に	
は	
す	
ま	
れ	
ん	
ク	
ニ	
ク	

Tib.
acorn - Adam

ti das, ti di god na ti di yos do shes byn - ta ti di

me sig-dan gnaa-pa means la nui gi, nui gpi

tiyuni - sa la etas - pa gna - pa nams la ni ma laq

20. 世
建
立
作
如
是
說
此
有
故
彼
有

非建之禪生。
W
一時無前後生。
以因此語

生此法。世尊自說、因虛妄因法生。此法非

次
才
生
故。
丁、
世
尊
說
言
此
有
故
彼
有。
若
一

時建之非次相待者、其義不成。

(c) operating as an unincorporated firm and

nen - cia - rituel - tar - phyxi - ta ma - lap - pati

negus - the emperor - 皇帝

2
 の
 2
 17
 2
 1
 回
 に
 よ
 つ
 2
 果
 2
 生
 ず
 3
 5
 5

不從緣生而有所生。W、因無因緣能生果。

ト、因不從緣生而有所生。

(2) *grāhya - grāhaka - ābhārāt avasthābhāgā mātā-*

avasthābhāgāt, grāhi - ta dāvi bhāgā - va ned - ya dāvi

rahi gi samsa anāi - ta taam du tēhōi - du chud - yāhi

phayir. S. 攝所攝非性、覺自心現量。W.

以無能取可取故。大慧、外道不知自心見

故。ト、我了諸法唯心所現無能取所取。な

か泉記ニハ「能取所取ありか故に。唯自心

所現なり」と知るは政に。六。

ペ 1 じ へ と 2 い 3 。

(8) 草之 kabya - nanshiyaga - shura - althantama 王

4 へ 5 ト 読 は 3 の ま ま

phyi - not phyi nam phyi

phul phyi dices - no med - par 3 6 3 か 1 1 1 2 は

主 2 1 2 5 外 境 界 性 別 性 1 下 執 著 外

境 若 有 若 無 に よ 2 読 ん だ 〇 W 見 有 無 物。

(9) 1 の 一 節 は 鈴木博士か 2 の 部 分 2 英 訳

す 2 に あ 2 2 〃 This is according to the Chinese

translation; in the Sanskrit text there is apparently

an omission 〃 (p. 90, n. 1) 3 註 記 1 2 か 5 4 3

2 1 1 1 解 読 困 難 な 部 分 2 2 あ る 〇 三 つ の 漢

訳も一同博士は、丁が最も可い水と

し、おられませんか？ 不完全である。なお、泉

訳のこの部分（六〇ページ）四行目が、最後

まいは、安当しき点が多い。

「三九」言葉と存在 — 不立文字 (三)

また、マハイマテイはいった。

— 世尊よ、言葉が実在するから、すべて

の存在があるのではないでしようか。また、

世尊よ、もし諸存在が存しないとしたら、言

葉も存在しないでしよう。それゆえに、言葉

が実在するからすべての存在があるのではない

いでしうか。

世尊は、たえた。

マハイマテ、よ、たとえ諸存在が存在
 しなくても、言葉はある。^③ するわち、鬼の角
 亀の毛・石女の子などは、(105) 世間におい
 て経験されえないものであるが、(そのよう
 な) 言葉はある。そして、マハイマテ、よ、
 それらは存在するものでもなく、存在しない
 ものでもなく、しかも言葉であらわされる。^③
 それゆえに、マハイマテ、よ、言葉が実在す
 るからすべての存在がある、と語ったあなた
 の説はすてられるのである。また、マハイマ

テ、よ、すべての仏国において、極成した言
 葉は存しない。マハイマテ、言葉は作ら
 れたものである。マハイマテ、仏国にお
 いては、まばたきしない眼によつて、或る身
 ぶりによつて、眉をあげることによつて、目
 を動かすことによつて、口によつて、あくび
 をすることによつて、せきをする声によつて、
 国土を記憶することによつて、法が説かれる。
 たとえば、マハイマテ、またたくものの
 ない（世界）・妙香の世界・如来・阿羅漢・正

等覺者であるサマンタバトラの仏国において
 は、^①諸菩薩・摩訶薩は、またたくものない

眼によつて見られながら無生法忍とその他の
 すぐれた三昧をうるののである。それゆえに、
 マハーマラーよ、この理由によつて、言葉が
 実在するから、すべての存在が存在するので
 はない。また、マハーマラーよ、この世界に
 おいても、虫やはえなどの特殊な生物は、た
 とえ言葉がなくとも、自らの行いをしている
 のである。

このことに関して、つぎのように説かれる。
 空のなかの鬼の角と石女の子は、実在しな
 いけれども、言葉であらわされる。諸存在
 についても同じように妄分別される。(一

六六)

因と縁とが組合するとき、凡夫たちは(存

在が)生ずると妄分別する。(106)かれら

は、この教えを知らないから、三有の領域

にさまよっているのである。(一六七)

【註】

(1) *abhi-lāpa - addhānāt santi samsa - bhāṣā* 24

バット誤は *byād - ka ma - mchis - pa la na dhas -*

yo thams - cad tyan mchis mod (言葉が存在しな

いゝと云ふ諸存在は存在する。)

非言説有性有一切性耶。W、有言説^{（言）}必有諸

法。T、有言説故必有諸法。

(2)

asatam api mahāmata bhāṣānam abhi-lāpaḥ kīṛyate,

alo - gres - chen - po, dhas - po med - pa dag tyan byād -

pa tya - ba - na yod. S、無性而作言説。W、有

無言法而說言説。T、雖無諸法亦有言説。

③ *abhi-lāpante, ājied teyari ājied. s' 但言說耳。*
W' 說言說。 T' 有言說耳。

④ *na ca mahāmate sarva-buddha - tejjatthan pra-*
siddha - abhi-lāpanti, ājied - pa mi saris - teyya teyyi
āhīn thams - cad du gacisa - pa ma gga. s' 非一切
刹土有言說。 W' 非一切仙國土言說法。 T
非一切仙土皆有言說。

⑤ *teṭṭaka, byasa - pa. s' 是你相耳。 W' 惟是人*
心分別說。 T' 便安立耳。

⑥ *ānāmiṭṭhāyāni gandha - rūpaṇḍarāyāni ca*
 原文

leka - dhātan samantatthadraya tathāgataya -
 arhataḥ samyaksambuddhaya buddhato ete

Til. は de - Bokin - gēg - ra dya - tcom - ra yari -

dag - par rdaog - pali' saris - Ryaas teun - du - bgan -

pali' saris - Ryaas tey' alin - mi - bidams apas - du -

alin abes - bga - talin' kyig - nten pyi phams na (

如來・阿^四目漢・正蒙夏者サマニタバトラの

仏国のまたたきのちの妙香と名づける世

界においでと読んているか、こゝにハ漢

記語本にしなかつて意味ととつて、S、如

瞻視及香積世界、普賢如來国土。W、如無
 瞬世界、及象香世界、於普賢如來正遍知。
 T、如不彊世界、及妙香世界、及普賢如來
 国土之中。

② Kai-thara-alaya, and qam qam. S、三有宅。

W、T、三有。

③ 4 ハ リ ト 記 は ニ ニ ま り 才 四 品 と す 。

4

〔四〇〕 迷誤について

そのとき、菩薩・摩訶薩マハーマテは、

また、世尊につきのようにいつた。

— また、世尊よ、世尊はどのようなものの

について、常住の言葉を説かれたのですか。

世尊はこたえた。

— マハーマテよ、それは迷誤について

である。この迷誤は、顛倒をはなれている、

とによって、諸聖者にもまたあらわれるから

である。たとえば、マハーマテイよ、世間に
 おいて、無知のものたちは、廢氣楼・たいまつ
 の火でえがいた輪・幻影・ガンタルウアの都
 市・夢・影・眼のなかの人を（^⑤）実在するもの
 である。）顛倒して見るが、智者はそうでは
 ない。しかも、それらの廢氣楼などが、智
 者たちに（^⑤）あらわれないのである。
 また、マハーマテイよ、かの迷誤はさまじま
 な種類のものをしてあらわれるのであるから、
 迷誤が無常であるといふことはならない。^⑤

どうしてであろうか。すなわち、それは有と
 無をはなれたものだからである。また、マハ
 ー・マラー・よ、どうして迷誤は有と無をはなれ
 ているのであろうか。すなわち、たとえは、
 海の波・ガンジス河の水は、（ひとには）見
 えるが、餓鬼たちには見えないように、それ
 はすべての凡夫が種種の対象とするものだが
 らである。^⑤それゆえに、この理由によつて、
 マハー・マラー・よ、迷誤の存在はない。しかし
 その水は（餓鬼）以外のものたちにはあらわ

れるのであるから、存在しないものでもない。
 このようにして、諸聖者にとつては、迷誤は
 顛倒・不顛倒をばなれてゐるのである。それ
 ゆゑに、マハーマテ^イよ、この理由によつて、
 迷誤は常住である。すなわち、その相は異な
 らないものだからである。マハーマテ^イよ、
 迷誤は、種種さまざまな相を七女分別するこ
 によつて妄分別されて（三）、區別されるの
 ではない。それゆゑに、マハーマテ^イよ、こ
 の理由によつて、迷誤は常住である。

また、マハーマテ、よ、どうして迷誤は実
 在するもの^⑤なのであろうか。マハーマテ、よ
 諸聖者には、この迷誤にたいする顛倒の覺も
 なく、不顛倒の覺もないからである。そうで
 はなくて、もし諸聖者にこの迷誤にたいする
 なにかしかの想があるとするれば、それは聖智
 の實事にたいする想ではない^⑥。なにかしかの
 (想)があるというならば、マハーマテ、よ、
 それは凡夫の説であつて、聖者の説ではない。
 また、かの迷誤は、顛倒と不顛倒(の見)に

よつて妄分別されるとき、二つの種性、すな
 わち、聖者の種性と凡夫異生の種性⁽¹⁰⁾とを生ず
 る。さらにまたマハーマテイよ、聖者の種性
 は三種となる。すなわち、声聞と縁覺と仙の
 區別から（三種となるの）である。また、マ
 ハーマテイよ、このうち、どのようにして、
 迷誤は凡夫たちに妄分別されて声聞乗の種性
 を生ずるのであるうか。すなわち、マハーマ
 テイよ、自相・共相にたいして、執著すると
 き、声聞乗の種性を生ずる。このようにして、

マハーマテ、よ、かの迷誤は声聞衆の種性を
 生ずるのである。このうちで、マハーマテ、
 よ、どのようにして、その同じ迷誤が妄分別
 されて縁覚衆の種性を生ずるのであるうか。
 すなわち、マハーマテ、よ、その同じ迷誤の
 自相・共相に執著し、世間的なまじわりをは
 なれることによつて、^(三)縁覚衆の種性を生
 ずるのである。このうちで、マハーマテ、よ、
 どのようにして、この同じ迷誤が賢者たちに
 よつて妄分別されて仏衆の種性が生ずるので

あろうか。すなわち、マハーマテイよ、ただ
 自心所現のみであることを覺知することによ
 っ、外的な（対象）の有・無の妄分別に妄
 分別されることがないとき、仏衆の種性が生
 ずるのである。それゆゑに、マハーマテイよ、
 これが種性であり、種性の意味である。⁽¹²⁾
 また、マハーマテイよ、迷誤は凡夫たちに
 よつて、さまざまなもの自性として⁽¹³⁾つこれ
 はこのようであつて、他のようではないと
 妄分別されるとき、輪廻衆の種性を⁽¹⁴⁾生ずる。

それゆえに、マハイマテ、よ、この理由によ
 って、迷誤は凡夫たちによつて、さまざまな
 実事として妄分別されるのである。しかし、
 その（迷誤）は、実事でもないし、実事では
 ないものでもない。マハイマテ、よ、この同
 い迷誤が、諸聖者にとつては妄分別されるこ
 となく、心・意・意識の邪悪な習気を自性と
 する法を転依したものであるから、諸聖者に
 とつては、（この）迷誤が（そのまま）真如
 といわれるのである。それゆえに、マハイマ

ティよ、真如もまた心をはなれているレと
 説かれたのであり、マハイマティよ、この同
 じ立場を説き示すために、私は「諸分別をは
 なれる」とは、すべての妄分別をはなれると
 とである⁽¹⁵⁾と説いたのである。

マハイマティはいった。

| 世尊よ、迷誤は存在する⁽¹⁶⁾のでし
 ようか、

存在しないのでし
 ようか。

世尊はくたえた。

| マハイマティよ、たとえは幻の
 ように

相に執著するから迷誤が存在するといふので
 はない。また、マハーマテイよ、もし相に執
 著するくによつて、迷誤が存在するとすれ
 ば、(109) マハーマテイよ、存在にたいする
 執著はまゝたく転捨されないくとなるであ
 るう。マハーマテイよ、(その場合には)縁
 起は外学者の因より生起する(説)のようにな
 がつてしまふのであるう。
 マハーマテイがいった。
 一 世尊よ、もし迷誤が幻に似ているとす

れば、それは他の迷誤の原因となるでしょう。
 世尊は、たえた。
 — マハーマテ、よ、幻は迷誤の原因とは
 ならない。それは邪悪な過誤を生ずるもので
 はないからである。マハーマテ、よ、幻はま
 ったく邪悪な過誤を生ずることはない。また
 マハーマテ、よ、幻は妄分別されることはな
 く、他のひとの明見から生ずるのであって、
 自らの妄分別の邪悪な習気のカから（生ずる
 の）ではない。そこで、それは過誤を生ずる

ものではないのである。マハイマテイよ、
 れは凡夫たちの、ただ心の混乱した見による
 ものであり、なにもものかいたいする執着があ
 るからである。しかし、諸聖者はそうではな
 い。

このことに關してつぎのように説かれる。

聖者は⁽¹⁹⁾迷誤を見ない。その中間にもまた真

実はない。もしその中間に眞実があるなら、

迷誤そのものが眞実だということになるで

あろう。(一六八)

もし、すべての迷誤をはなれて、相が生ず
 るとすれば、それはまさにそのものの迷誤
 であらう。たとえば、眼の翳は清浄ではな
 いといふのである。(一六九)

〔註〕

① 4 ベット 記 accom - lla - tida teyis による

thagurata もおなじう。

② mitya - sadha, ntag - rahi apra. S. T. 常声。

W. 常 三三〇 法。

③ bhara-lau, man - ta. S. 為或に乱。W. 依迷成に

法。T. 依主法說。

2) *atvā - putra* 12 *Til. mig - yor atvā - tū* 3 4 3 2

3 *atvā - putra* (cf. *Maṅgalyapatti*, 2815) 6 = 3

21 あり。漢訳は、*おかし* 誤出、2 11 2 11。

3) *na bhānta avāntatām tevante, na - ta la mi -*

ntag - par yai mi - byed do. 5 非惑 4 非無常。

W. 不生主心。T. 然非無常。

6) *naṇa - tāla - vicitra - gotaravāt, byi - ra thams -*

cad apyod - yul na - talogs byi - phyin no. 5 一

切愚夫種種境界故。W. 諸愚癡凡夫見有種種

種境界。T. 一切愚夫種種解故。

(7) nimitta - lates ana - aṅgaḍaṭṭaṭ, mātān - māḍi mātān
 mid kha - dād - pa ma nḍin - paḍ. S. 相相不壞故。
 W. 以想差別故。T. 相不異故。

(8) tattva, nḍa - pa nḍin. S. T. 真實。W. 實。

(9) na, āṅga - jñāna - mātā - nāṅṇi māḍi, kḍḍaṅṇa - paḍi
 nḍe - nḍe seṅṇi dḍiṇḍa - pa kḍiḍa - nḍe - pa ma nḍin. S. 非
 聖智事想。W. 不生聖智事想。T. 非聖智。

(10) āṅga - ḡṭṭa, kḍiḍa pa kḍaṅṇi - ḡṭṭa, kḍiḍaṅṇa - paḍi nḍiḡṇṇa
 kḍiḡṇ - pa nḍe - nḍiḡṇ aḡṇṇa - paḍi nḍiḡṇ. S. T. 聖種性

及愚夫種性。W、能生凡夫性、能生聖人性。

(11) *śāntar arāṃāṅga - lāṣaṇa - adhimukha -*

asamagataḥ, nā - ta de nīd nāi dai apyiki

ntān - nīd la mīn - pa - aṅ - pa dai tīd - nīdān

med - paḥi pyi. S、即彼惑亂自相共相不觀計

著。W、執著彼迷惑法自相同相。T、計著

自相共相。

(12)

gāṭhā sa gāṭhā - aṅgā, ādī mī nīp te, nīp

teyī dān. S、是各種性義。W、如是名為性義。

(13)

vicitra - vātulena 12 *Til. dīś - pa na - tāḥy*

tegi nari - kashin du. 1: 2, 2 vicitra - vata -

2 vata arena 3, 2 讀 2. 5, 種 種 事 性。w.

種 種 事。T. 種 種 事 物。

(14) samara - yana - gotha, tishar - tain' theg - pati nigi.

S. 愚 夫 種 性。w. 世 間 所 有 衆 性。T. 生

死 衆。

(15) tealpans ca vivaryitani nara - tealpans - vivatitani,

ntog - pa namo tegi tegari nam - pa - aparis - pa,

ntog - pa thams - cad dari soal - talo. w. 真 如 法

體 離 分 別 法。彼 真 如 中 無 彼 虛 妄 分 別 法 故。

T

字同
分
呂

者、

朱心

高生

—
tp

著者

17
11

敬。

16

ridyale, mchis.

§

.

W

100

T

注

十

付

行 稟 文

pratiṭṭhāsamutpādayat tūthakāra - kāraṇa -

utpādanat etat aṅgāt, tidi tida sten - cini - hūnel - tar -

libyari - sa dani, mu - stog - byed teji nyu laa stye -

for admission - du figurar no 12 直言すに - 乞ふは 12

縁起
の
外
字
者
の
因
よ
り
の
生
起
の
よ

う
に
な
る
2-
あ
る
う
L
と
な
る
か
、
=
=
2-
は
漢

三ノ
 九
 理
 解
 九
 七
 カ
 七
 二
 二
 七
 七
 カ
 一
 七
 〇
 五
 五
 縁
 七

如外道說因緣生法。

縁、有縁因生不從因生。ト、則諸縁起、
如外道說作者生。

Sugrhi: the chain of origination

would be understood in the sense of creation as held by

the philosophers. (p. 24)

(18) ridya - adbhithana, niga - aniga teji mthun. W.
度。W. 呪術。T. 明呪。

(19) napi tattvam, tad - antare, yan - dag - pa yan atkals
der min. S. W. 中間亦無二美。T. 中間亦
非美。

〔四一〕 諸存在の如幻性について

また、マハーマテイよ、幻は存在しないの
でもない。相似してあらわれるからである。

諸存在には幻に似た性格がある。

マハーマテイはいつた。

また、世尊よ、種種の幻に執着する相

によつて、一切諸法には幻に似た性格が（一〇）

あるのでしようか。あるいは、不眞実に執着

する相によつてでしようか。世尊よ、もし、

種種の幻に執著する相によつて一切諸法に
 は幻に似た性格があるとするれば、おお世尊よ、
 諸存在は幻のようなものではなくなつてしま
 うでしよう。とうしてかといふと、色は種種
 の相を因としていふくとか見られるからで
 す。世尊よ、それによつて色が、あたかも幻
 のように、種種なたくいの相としてあらわさ
 れるようになんらかの因があるのではない
 のです。それゆえに、世尊よ、この理由によ
 つて、種種の幻の相に執著するくくに相似し

て
い
る
の
で
あ
る
か
ら、
諸
存
在
は
幻
に
似
た
も
の
で
あ
り
ま
す。

世尊はこたえた。

— マハーマテ、よ、種種の幻の相に執著

するくとに相似して、いるから、一切諸法は幻

に似て、いるのではなく、マハーマテ、よ、不

真實・つかの間の閃光に相似して、いることに

よつて、一切諸法は幻に似て、いるのである。

たとえは、マハーマテ、よ、凡夫たちには、

閃光が瞬間的に滅し、見え、消滅するさまが

あらわれよう、マハーマテ、よ、すべて
 の存在もまた、妄分別による自性・共相も
 つものとしてあらわれる。なせなら、色の相
 に執着するからである。
 このことに關してつぎのように説かれる。
 幻は存しないのではない。(それはなにも
 のかに)相似しているからである。諸存在
 の実在性も(同様に)説かれ、不真実・一
 かの間の閃光に似ており、したがって、幻
 に似ていると考へられる。(一七〇)

[言]

1) māya - upamāśa, āgama - mā - śa - tu. S. T.
 W. 如幻。

2) rūpāṅga - vicita - lakṣaṇa - abhū - dāśānāt, gṛha
 tyaṁ mātṛaṇ - nīd ana - tāhaya āgama - med - ka mātṛaṇ -
 tāṁ śad du ste. S. 色種種相非因。W. 色
 有種種因相見故。T. 見種種色相不無因故。

3) vīṭāṭhā - ān - vidyut - ādāśa - āśāṁgama, log - ka
 myaṁ - tāṁ glog dāi tāṁ - saśāśā - tāṁ
 S. 不妄一切法。速滅如電。W. 顛倒速滅。

如電故。T. 如電光見已即滅。V. 如電光見已即滅。

實 9 故 12 (log-pain' phayir = vitiatinga ngai) 幻 2 相

似 5 3 2 如 空 性 5 9 2 如 7 法 無 我 9 証

量 2 1 有 3 0 一 如 9 問 9 問 光 2 相 似 5 3 2

加 刹 那 的 (ahead sig - ma = teanitea) 3 1 1 2

と 2 有 7 人 5 我 6 2 3 2 有 3 0 9 (122.4.

6-7)

8) 原文 bala nam' talyang ate 2 Tila. 11 byis - pa namas

la an' anan ate = na bala nam' talyang ate 3 3 0

5 非 愚 夫 現 0 W 12 夫 不 見 0 12 1 9 二 記

は 4 ペ ー ト 誤 る 一 致 し 、 丁 、 世 間 乃 愚 惑 皆
現 見 は 梵 文 と 同 い 。

③ 原 文 *evam eva mahāmate, samsa - dhārā avasthāna -*

sa mānaya - lakṣaṇāḥ pravīcaya - aśvāsan na talyāyate

nupa - lakṣaṇa - abhinivṛtataḥ の 語 々 は 文 句 と

と す べ く 相 違 へ て お り 、 い ず れ 理 解 し か

ら ぬ 。

7th. de - kṣin - du llo - gres - chen - po dīna - po

thams - cad tseyi nari gi nman - par - nteg - paḥi apyid mtoḥan -

ñid la rab - tu - nman - par tṣyed - ka med - pa dani gnyag

tseyi mtoḥan - ñid la mion - par - chag - pa sman - no .

S、如是一切性自妄想自共相、觀察無性、
 非現色相計著。W、一切諸法亦復如是。以
 一切法自心分別同異相、以不能觀察故不如
 實見。T、一切諸法依自分別自共相現亦復
 如是。以不能觀察無所有故。而妄計著種種
 色相。鈴木博士は、¹²⁰ Tに從つて英
 訳L2から水子か、ニニ²¹は、各訳とも意心
 味不明である
pravicaya - atthavān na 正者ナ、
 Tを参照し、² 訳した。

〔四二〕不生について(=)

またさらに、マハイマテイはいった。

― 世尊はまた「諸存在は不生であり。」(三)

幻に似たものである」とお説きになりました。

が、世尊よ、このようにいう場合には、あな

たの前説とのちの説とは矛盾することにな

るのではないうか。諸存在は幻に似て

いるというようによって不生であるとい説かれ

るのですから。

世尊はいたえた。

— マハーマテイよ、諸存在は幻に似てい

るといふことによつて不生であると言ふとき

にも、私の前の説とのちの説と矛盾するにと

はない。どうしてであらうか。すなわち、生

と不生はただ自心所現のみのものであると覺

知し、有としても無としても外的存在は存せ

ず、不生であることを見ることによつて、マ

ハーマテイよ、前の説とのちの説とは矛盾し

ないものである。しかし、マハーマテイよ、外

学者の因によつて（存在が）生ずるといふ立
 場をはなれさせるために、諸存在は、あたか
 も幻のやうに不生であると言ふのである。マ
 ハーラーによ、愚癡である外学者の群は、自
 らの立分別によつて種種なものに執着するこ
 とを縁とすることからではなく、有と無から諸存
 在が生起すると主張する。しかし、マハーマ
 テーによ、私には有・無はない。⑤それゆゑに、
 マハーマテーによ、この理由によつて、不生と
 いふことばが説かれるのである。

また、マハーマティよ、存在が（あると）
 説かれるのは、生死を完全に把握し、^⑤無であ
 るとする断（見）を否定し、^⑤私の弟子たちに
 種類の業によつて生れる場所を完全に把握さ
 せるためであり、（この）「存在が（ある）
 といふ」とばを完全に把握するにとよつて
 生死が完全に把握されるのである。マハーマ
 ティよ、幻のような存在の自性と相を説き示
 すのは、存在の自性と相を否定するためであ
 る。（二二）すなわち、悪見の相におちいた

性・相をもつものである。と説くのである。
 これらの意見の相に執着したところをもつた
 凡夫・異生たちは、一切諸法の不如実の知を
 見るにとよつて、自分自身とも他のものと
 も矛盾するであらう。このうちで、マハーマ
 テイよ、一切諸法の如実の知を見るにとよつては、

すなわち、ただ自心所現のみである。①
 る。②

このように説かれる。

不生のものには因もない。存在があるとき、

生死が総攝される。③
 (一切諸法は)幻など

に相似しているところならば、そのものは

相を妄分別しないであろう。(一七一)

註

①

anupamāḥ sarva-bhāvā māyā - upamāḥ, dvā-

pa bhāva-cad ai ma - abhāva - pa dāni agyu - ma

sta - tu. s. 一切性無生及如幻。w. 諸法
不生。復言如幻。T. 一切諸法皆悉無生。
又言如幻。

(2) pūṇa - uttara - vacana - vyākṛāta - doṣaḥ prasaṅgāt,
bhūyān nīlā - rāga - rāga - mūḍha - rāga - bhūyān.
s. w. 前後所說自相違。T. 所說前後相
違。

(3) amuṭpādāni bhāvanāni māyā - upamātena astilopatāḥ,
dhīḥ - ye mānasa āśaye - ta med - ya la agny - ma sta -
but bhūyān ma. s. 諸無生性如幻。w. 以如來

無有生。w、我說諸法有亦不生無亦不生。

丁、我說諸法非有無生、とす。ニホムに

1、2、ニニニ原之中の samtrānam 3 san-

maad と 2 読む。

(2)

samāsa - paṇigraha - attham, tikkha - ta yasa - na -

gyana - ta. 5. 丁、授受生死。w、攝取諸

世間故。

(2)

māty - uchcheda - nirvāṇa - attham, med do abes

śrad - ra aploṭ - ra. 5、壞無見斷見。w、為護

諸斷見故。丁、遮其無有斷滅見故。

(8) mac-chiṅgānam vicitra-śarīra-upapatty-āyatana-
 paṇḍita-śāstra, nāḍi śloka-maṃsaśāstra-
 tāḍyaśyāśāstra-tāḍiśāstra-gaṇa-śāstra-
 pāṇiśāstra. 5. 為我弟子撰定種種業受生處故。

W. 以依業故有種種身撰定六道生。T. 為
 令弟子知依諸業撰定生死。

(9) śhāra-śāstra-paṇḍitaśāstra, śhāra-śāstra-śāstra-
 śāstra. 5. 以性聲。W. 言有諸法。

(10) śhāstra-śāstra-śāstra-śāstra-śāstra, śhāstra-
 śāstra-śāstra-śāstra-śāstra-śāstra.

śhāstra-śāstra-śāstra-śāstra-śāstra. 5. 不知

自心現量。W、不能知但是自心虛妄見。T、不知諸法唯心所現。

(11)

yaśāśrūta - avasthāna - dāśānam malāmate
sarva - bhāvanānam yad uta sarvātta - śrīṅga - mātā-

atātāra, śāśāna - cad rāgi yān - dāg - ra gū-

pa ji - lta - sa śāśāna - du mātāni - sa ni śāśā lta

ate, rāni ji śāśāna - sa śāśāna la śāśā - rāśā.

śāśāna 如妄見一切法者、謂起自心現量。W、

三何住如妄見。謂入自心見諸法故。T、見

一切法如妄見者、謂能了達唯心所現。

(12)

amṛtāde śāraṇa - athān bhāve saṁāna -
 saṁgrāha, abhaya - sa meḍa saṁgrāha meḍa, dīpa -
 pro tithān - sa saṁ - kṛdus - de. 生 作 非
 性、有性、生、死。W. 我、說、有、生、法、受、諸
 世、間。T. 無、作、故、無、生、有、法、生、死。

〔四三〕 名称・文章・文字の集りについて

― 不立文字（四） ―

また、マハーマテイよ、名称・文章・文字

の身の相^①を、われわれは説く。その名称・

文章・文字の身をよく理解すれば、諸菩薩・

摩訶薩は、意味・文章・文字をよく知り、す

みやかに無上の正等覺をえ、まゝたく同じよ

うにすべての衆生を正覺させるであらう。

のうちで、マハーマテイよ、名称の身とは、

すなわち、それに依存して名称がえられるもの。
 の、とであり、^③その身がすなわち、（この）
 ものである。身とは、他の意味では、本体（
substance）である。マハーマテイよ、これが名称
 の身である。また、マハーマテイよ、文章の
 身とは、すなわち、文章の意味の真実の集り^④
 決定である。他の意味では、それをおしすす
 めて感知することである。^⑤マハーマテイよ、
 これを私は文章の身と説いたのである。また
 マハーマテイよ、文字の身とは、（心）、すなわ

ち、それによつて、名称と文章があらわれ
 るものが文字である。それは証相であり、相
 であり、威知であり、他の意味では仮設であ
 る。

また、マハイマライよ、文章の身とは、す
 なわち、文章の完成したものである。また、

マハイマライよ、名称とは、すなわち、aの

字からhaの字にいたるすべての文字の、それ

それの自体の名称である。このうちで、また

マハイマライよ、文字の身とは、すなわち、

短・長・高下、の文字である。⑧
 このうちで、ま
 た、マハーマテイよ、文章の身とは、象・馬
 人間・野獸・家畜・牛・水牛・牝山羊・羊な
 どの、道 (parade) を通るものの足跡から文章
 (parade) の身という觀念 (想) をうるのである。⑨
 また、マハーマテイよ、名称と文字とは、四
 つの無色の蘊に属するものであつて、名称に
 よつてあらわされるから名称であり、文字の
 相によつてあらわされるから文字なのである。
 マハーマテイよ、これが、名称・文章・文字

の身の、名称・文章をあらわす相であり、
 または、このことについて観察すべきである。

このことに際してつぎのように説かれる。

文字と文章の身と名称とについて區別する

ことによつて、愚かな凡夫たちは、あたか

も深いぬかるみにはまつた象のようにな、

それらに執著する。(一七二)

〔註〕

い) nāma - pada - vyāṅgīma - kāyānāma lāṣa anāma, mīmā

dan tsking dan yi - ge tskogs tseyi mtshan - mid. w.

名。身。相。 W. 名。字。身。相。 T. 名。句。文。

身。相。

(2) gad vatr ānitya nāma saṁgate, dvīś - no gam

la gma te mīn du gdaḥ - rāho. S. 依。事。立。名。

W. 依。何。等。何。等。法。作。名。名。身。事。物。名。異。義。一。

(3) pada - attha - tēya - raddhāna, tathā gi don man - ro

eden - ra. S. 有。義。身。自。性。 W. 能。了。知。自。身。

相。 T. 能。顯。義。

(4) mīṭhā - upalabdhā, tūṅ - ka dāni dāniḥ (空。見。)

感。知。 S. T. 空。見。 W. 畢。見。

⑤ prajñapti, kṛtsya - pa.

⑥ pada - kṛtsya - mīthā 11 Tīl. taking thing - pallo

1: 2, 2 pada - mīthā 3 11 12 0

⑦ māna - avasthā - śhedaḥ, nani gi nani thā - dad -

pa. W. 諸字從名差別。T. 諸字各各差別。

⑧ māna - dīgha - pluta - vyāyāna, thāni - du

kṛtsya - pa dani nini - du kṛtsya - pa dani nī - ge

kṛtsya ge. S. T. 長短高下。W. 聲長短音

韻高下。

⑨ 1: 1, 2, 12 pada (文章) か pada (道) 2 問

連

ナ

セ

エ

証

明

ナ

レ

エ

イ

ミ

。

〔四四〕無記について

(ニタ) また、マハイマテイよ、未来におい

て、道理にもとづく智慧を欠くことによつて

誤つた推論を行なう邪智のもめたちがあつて

一異・俱不俱の邪見の相をはなれた二種の辺

際を問う智者によつて、一色などと無常性と

は異なるものであらうか、異ならないのである

うかしと問われ、これは問ではない。これは

まったく正しくないし、たとへるであらう。

同じようにして、諸行と涅槃、相と所相、功
 徳と功徳をもつもの、大種と大種によつてつ
 くられるもの、見られるものと見るもの、地
 と極微、智と修行者などのものは（異なるの
 であらうか）異ならぬのである（うか）と、
 つぎからつぎへと順次に相の規則によつて記
 別されないので問われたものは、一世尊は
 答えて記さなかつたといふであらう。しか
 し、これらの迷つてゐる人々はそのように知
 らないであらう。（それらを）聞くひとびと

の智慧が欠けているからである。諸如来・阿
 羅漢・正等覺者は、諸衆生にたいしてその恐
 怖の狀態をばなれさせるために授記しないの
 であつて、マハーマテ、よ、諸如来は外學者
 の誤つた説を否定するために無記を説くので
 はない。なぜならば、マハーマテ、よ、外學
 者たちは「生命は身体である。生命と身体は
 別のものである。」などというとき、無記を語
 っ
 て
 い
 る
 か
 ら
 で
 あ
 る
 。
 マ
 ハ
 ー
 マ
 テ
 ！
 よ、
 創
 造
 因
 と
 い
 う
 こ
 と
 に
 ま
 と
 わ
 さ
 れ
 た
 外
 學
 者
 た
 ち

には無記があるか、私の説においてはない。
 マハーマテ、よ、私の説は所取と能取とをば
 なれているのであるから、そこに妄分別は生
 じないのである。(三) それらにどうして捨
 置^③があるうか。しかし、マハーマテ、よ、所
 取と能取に執著して、慧によつて自身所現の
 みであることを確証しないもの^④のたちにたいし
 ては、捨置する。マハーマテ、よ、諸如来・
 阿羅漢・正等覺者は、四種の問いと答^⑤えによ
 っ^⑥て諸衆生のために法を説くのである。マハ

マテ、捨置とは、これはその根が未熟
 であるものたちに私が行なうた特別な機会の
 教説であり、根の成熟したものである。捨置
 するとはないのである。

【註】

(一) *athāpamīyam bhagavato, anyadeitam, tasmā - kām-*
ādaś tasya tvaī - ma - sadam te. 此は説き無記
の事。三、此記置。一、説此止記置。

(二) *antrāśa - pada - vīrangana - artham, aśmā - can-*
maṁsāgrag - pati' gvaś aśmā - pati' phayir. 此

令彼離恐怖句故。T. 令其離驚怖處。

(3) *atlapayam*, *gghag-pa*. S. T. 止。

(4) *avacitta - dvaya - mātra - anantadharita - mati, nani*

gi nemu anani - ta taam du mi - heo - paki' elo - can.

S. 不知自心現量故。W. 不知但是自心見

法。T. 不知唯是自心所見。

(5) *caturvidha - pada - prajña - vyākaraṇa, taking dvai -*

pa la lvi - katan - pa nam - ka doli. S. T.

四種記論。W. 四種問法。四種とは、二二

二 11. (一) 總說授記 (*etāṇā - vyākaraṇa*) .

(二) 分別授記 (vitha aya - vyakaraṇa) . (三) 不問

授記 (pari pi cchā vyakaraṇa) . (四) 捨置記 (

adāpa nīga - vyakaraṇa) 已意味了了見了れ

3 .

(2) kīla - antara - dāna , du ghaṇa - du tūla -

pa . 5 . 時時說 . 7 . 為待時故說如是法 .

T . 別時說 .

〔四五〕一切諸法の本質——無自性・不生

常・無常等——について

また、マハーマテイよ、所作と能作者とを

はなれた一切諸法は不生である。能作者がな

いのであるから、それゆえに、一切諸法は不

生である。また、マハーマテイよ、すべての

存在は無自性である。なぜであらうか。マハ

マテイよ、自らの智慧によつて観察すれば

自相・共相のあるくとは認められないから、

それゆゑに、一切諸法は無自性であるといわ
 れるのである。また、マハーマテ、よ、この
 うちで、一切諸法は、取るゝとなく捨て
 との、ないものである。なぜであるうか。マハ
 ーマテ、よ、自相・共相は取つても取られず、
 捨てても捨てられないからである。それゆゑ
 に、マハーマテ、よ、この理由によつて、一
 切諸法は取るゝとなく捨てられ、
 るのである。また、マハーマテ、よ、一切諸
 法は不滅である。なぜであるうか。すなわち、

存在の自性と相とは存しないのであるから。
 一切諸法は不可得である。それゆえに一切諸
 法は不滅であるといわれる。また、マハーマ
 テイ、このうちで、一切諸法は無常である。
 なぜ（そのように）説かれるのであろうか。
 （二）すなわち、相の生起は無常であるから、
 それゆえに、一切諸法は無常であるといわれ
 るのである。また、マハーマテイ、一切諸
 法は常住である。どうしてであらうか。すな

わち、相の生起は不生であり、無なのである
 から、無常であるといふことによつて、常住
 なのである。それゆゑに、マハイマテ、よ、
 一切諸法は常住であるといわれるのである。
 このことに関してつぎのようにな説かれる。
 四種の授記がある。一向記と反詰記と分別
 記と捨置記である。(これらによつて)外
 学者の主張が否定される。(一七三)
 サートンクヤ学派・ウパイシユーシカ学派の
 ものたちは、有と無とより(諸存在が)生

起する。考える。かれらによつて明らか

されたすべのものは、無記である。(一)

七四)

智慧によつて觀察すれば、自性は認められ

ない。それゆゑに、それら(一切諸法)は

不可説であり、無自性である。と説かれる。

(一七五)

【註】

↑
anupamāṇī rāsa - dharmāṇi, chas thams - cad

ni ma āyā - ra. s. T. 一切法不生。w.

諸法不生。

② *niravasthānta*, no-*ts*-*niel med-*pa**. *sa* 離自性。

W. 無有体相。 *T*. 無自性。

③ 原文 *nicayamānam* は *Til. nam-*pa dpyad na**

S. 觀時 1. *T*, 2 *nicayamānā* 3 *ts* 3.

④ *anāyāsa - aniyāsa*, *elvi dar dar-*ts med-*pa***

S. 不可持來。不可持去。 *W*. 無取相...

無捨相。 *T*. 無去來。 原注に因りては

cf. Edgerton. p. 23. a.

⑤ *stāna - avasthāna - laksana - avasthāt, dīpa - pāṇi*

no-to-mel dari mtham-mich med-pel na. 性
 自性相無故。W、觀一切法自相同相無
 故。T、一切法無性相故。

③
 dra mlam paupiclam with agyam thapamigam,
 mgo-gsig dari mi dri-dra dari mam-par-doged
 dari gahag-ra mams. S、一向及詰問分別及

止論。W、直答反質答分別答置答。T、一

向及返問分別及置答。

④
 以上の一七三、四の二偈は、すきの二四

二論いられた所説に關するものあり。

(8)
 子
 の
 個
 は
 一
 四
 五
 口
 の
 所
 説
 に
 門
 可
 子
 と
 の
 二
 あ

子

〔四六〕 四向四果の相について

そのとき、菩薩・摩訶薩マハ・マテイは、

また、つぎのように世尊にいった。

— 世尊よ、私に、諸の預流の、預流の領

域を特徴づける相をお説きください。その預

流の領域を特徴づける相によつて、私と他の

諸菩薩・摩訶薩は、諸の預流の、預流の領域

を特徴づける相に通達し、さらにすすんで一

来・不還・阿羅漢の方便の相の法規を知り、

諸衆生のために法を説くであります。そして、二無我の相を（知り）、二つの障を淨め、（三）諸地において地の相に通達して超え、如来の不可思議な境界に達し、さまざまのな色をもつマニ宝のように、すべての衆生を利益するものとなり、一切諸法の対象・領域・身体・享受すべきものをささえるであります。よう。

世尊はうたえた。

マハーマティ、よ、それならばよく聞か

なさい。よく聞いて、くくろにとめなさい。

私はあなたに説くであらう。

——かしこまりました。世尊よ。

というて、菩薩・摩訶薩マハーマテイは、世

尊の説くことに耳をかたむけた。世尊はつぎ

のようになされた。

——マハーマテイよ、これら諸の預流の預

流果には三つの区別がある。三つとはなにか。

すなわち、(一)省つているものの、(二)中間のもの、

(三)すぐれたたもの^③で、ある、このうちで、マハー

マテイよ、劣つたものとは七たび生れかわつ
 てその生存がつきるものである。中間のもの
 とは、マハイマテイよ、三あるいは五たび生
 れかわつて涅槃に入るものである。また、マ
 ハイマテイよ、もつともすぐれたものは、
 の生のうちに般涅槃するものである。しかし、
 マハイマテイよ、これらの（下・中・上の）
 三種のものには、三つの結（三） | 弱いもの・中
 間のもの・強いもの | がある。マハイマテ
 イよ、このうちで、三つの結（三）とはなにか。す

なわち、(一)有身見と、(二)疑と、(三)戒禁取であ
 る。マハーマテイよ、これらの三つの結が次
 第により高いすべれたところへとすすんで
 阿羅漢の果をうるのである。

マハーマテイよ、このうちで、有身見には
 二種がある。すなわち、(一)俱に生ずるものと

(二)妄分別されたものである。それは、依他と

虚妄分別の自性のごとくである。(118)たと

えば、マハーマテイよ、依他の自性に依存す

ることによつてさまざなな虚妄分別の自性に

たゞする執着が生ずるが、しかし、それは、
 くくでは有でもなく、無でもなく、有であつ
 て無なるものでもない。不実の分別を相とす
 るものであるからである。しかし、あたかも
 獸たちが蜃気楼を（実物である）と妄分別する
 ように、凡夫たちはさまざまな自性の相に執
 着して、これを妄分別する。マハーマテ、よ、
 これが預流の虚妄に分別された有身見であり、
 無知のゆゑに長い間執着することによつて集
 められたものである。そして、それは、その

人我のとらわれがなくなるるときに、すてられ
る。

また、マハイマテイよ、預流の、ともに生

ずる有身見は、（つぎのようにしてすてられ

る。すなわち）自己と他のものの身は平等で

あるというこゝとによつて、四蘊には色の相が

なく、色は大種と大種より成るものによつて

生じ、諸大種は相互に因となることを相とす

るものであるから、色の集起はなくならし

預流のものは、有・無の主張は邪見であるとし

見ることによつて、有身見はすてられる。それゆゑに、このようにして、有身見をすてたものには、貪はあらない。マハーマテ、これが有身見の相である。また、マハーマテ、疑の相は、どのようにしてすてられるか。すなわち、うべま法の証得を見ることを相とし、前の二つの有身見の妄分別をすてることによつて、諸法にたいする疑は生かない。また、他の師の見もない。淨と不淨（の區別がある）からである。

マハーマテイよ、これが、預流の疑の相であ
る。

(119) また、マハーマテイよ、どうして預

流のものは戒を取らないのであるうか。すな

わち、かれは生れる処の苦の相をよく見るか

ら(戒を)取らないのひある。また、マハー

マテイよ、取るにととは、すなわち、凡夫・

異生のものたちは、戒・捨言・苦行を定めるこ

とによつて、苦樂を求め、(三)有に生ずる

ことをねがつている。そこで(戒を)取らな

いのである。このようにして、自内に証得す
 るすべかられた状態に、くくをめぐらし、^①無分別
 無漏の法を相とすることによつて諸戒支を修
 するものである。マハーマテ、よ、これが、預
 流のもの戒禁取の相である。そして、マハ
 ーマテ、よ、三つの結をすてた預流のものに
 は、貪・瞋・癡は生かない。
 マハーマテは言つた。
 ーまた、世尊は「貪には多くの種類があ
 る」とお説きになりました。そのうちで、ど

の ような 貧が すて られ る べき な の で し ょ う か。

世尊 は した え た。

— それは、愛欲の根の対象、すなわち、

あ ち う つ こ と ・ 手 で う つ こ と ・ 暗 示 す る こ と

接 吻 す る こ と ・ 抱 く こ と ・ に お い を か ぐ こ と

横 から 見 る こ と ・ 見 つ め る こ と に よ っ て、女

性 と 交 り た い と あ も う 貧 欲 で あ り、た だ い ま

の 快 楽 で は あ る が、未 来 に 苦 を 生 ず る 因 と な

る も の で あ る、マ ハー マ テー よ、か の (預 流

の も の) に は、(そ の よ う な) 貧 は な い。ど

うしてかというところ、かれは三昧の樂に住する
 ことを求めてゐるからである。それゆゑに、
 この（貪）がすてられるのであつて、涅槃を
 証得しようとする欲望が（すてられるの）で
 はない。
 （二〇）また、マハーマテ、よ、一果とは
 なにか。すなわち、色の相としてあらわれる
 妄分別が一度だけ生ずることである。（かれ
 には）所相・能相としての相についての見は
 ないからである。一果のものは（禪定の領

域の相をよく見るこゝとによつて、一度たりこの世界にもどつて来、苦をのぞくために般涅槃する。そこでは、一來といわれるのである。

マハーマティよ、このうちで、不還とはどのようなこゝとか。すなわち、過去・未来・現

在の色の相の有・無が生いても、邪見・過誤・隨眼・妄分別は生いないのであるから、また

諸結は（再び）もどつて来ないようにすてられるのであるから、^(B)不還といわれるのである。

また、マハーマティよ、阿羅漢とは、禪定

を修するくと、三昧・解脱・力・神通（を完

成し）⁽¹⁴⁾

煩惱・苦・妄分別がないことによつて、

阿羅漢といわれるのである。

マハーマテ、はいつた。

— また、世尊は「三種の阿羅漢がある」

とお説きになりました。世尊よ、この阿羅漢

という言葉は、そのうちのどれにあたるので

すか。世尊よ、（一）一向に寂滅の道をうるもの、

（二）菩提の願を修して善根を積むもの、（三）変化

によつて化作されたもののうち、いずれで

しょうか。

世尊はいった。

— マハーマテ、よ、（うゝては）一個に

寂滅をうるものたる声聞のゝとをいうのであ

った、その他のものではな。また、マハー

マテ、よ、他のものは、菩薩の行を行じ、仏

陀の変化によつて化作された（身体をもち）

善巧な方便と本願にもとづくゝによつて、

（二） 仏陀の衆会を清浄にするために、衆会

のなかにその身をあらわす。マハーマテ、よ、

妄分別のおこなわれるところにありて種種の
 ものが説かれる。⁽¹⁶⁾すなわち、マハーマテ、よ
 果を証得すること・禅・禅を修するもの・禅
 定によつて修されるものをいふはなれ、(一の一
 切は)自心所現であることと証得することによつ
 て、果を得ることの相が示されるのである。
 また、マハーマテ、よ、もし、預流のものが
 つこれらが(三)結である、私はこれら(の
 結)と結ひつかない、と知るならば、二重
 の過誤となつて、我見にあり、結をすて

ない、とになるであろう。

また、マハーマテ、よ、禅・無量・無色の

界をこえるために、自心所現の相をはなれる

べきである。⁽¹⁸⁾ マハーマテ、よ、想受を滅した

三昧は自心所現の領域をこえる、とと相獲し

ない。ただ心の⁽¹⁹⁾みだからである。

この、とに關してつぎのようにな説かれる。

諸禪と無量と無色と三昧と想滅(定)は、

すべて唯心であつて實在しない。⁽²⁰⁾ (一七六)

預流果と、また一來(果)と不還果と阿羅

漢とは、心のよい⁽²⁾である。(一七七)

禅を修するものも、禅定も、禅定において

修されるものも、すてさるゝとも、真実を

見るゝとも、これらはただ妄分別のみであ

る。⁽²⁾とこのように知るものは解脱する。(

一七八)

【註】

1) aśa-āpamaññam aśa-patti-gati-paṭheca-maya-

lobhinam, nyanu-ta āraṇya-paṇi-ṇigro-ta nat-ta

dege-saḍi-saḍi-saḍi-ggā-māraṇa-mid. 2) 諸須陀

相	須
。T、	須陀洹
諸	趣
須陀洹	差別通
須陀洹	相。
須陀洹	W、
果	須陀洹
行差別相。	等行差別

(2) $\text{a} \bar{\text{a}} \text{g} \bar{\text{a}} \text{m} \bar{\text{y}} - \text{a} \bar{\text{a}} \text{g} \bar{\text{a}} \text{m} \bar{\text{y}} - \text{a} \bar{\text{a}} \text{a} \text{t} \text{t} \text{r} \text{a} - \text{m} \bar{\text{p}} \bar{\text{a}} \text{y} \text{a} - \text{l} \text{a} \text{k} \text{s} \text{i} \text{c} \text{i} \text{n} \text{a} -$

vidli - p^hāh, sig - p^hayir - h^hori - sa clari p^hayir - m^h -

hōnī-tā dān dān-tōm-nā-hōm-nā thāl's tōy

mitahan - mid tays' mean-par (ridla, instead of ridli')

5. 斯陀含阿那含阿羅漢方便相。
w.
如寔。

知須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢等。
一、

陀
須
斯
陀
含
阿
那
含
阿
四、
羅漢
方
便
相

(m) hu-ma-madha-vi¹ta, tha-ma dai¹-ba¹-ma dai¹

muchog. 5. W. T. 下中上。

(4) tay - jamma - kavinirāyāsi, tate - da - mid las yon-

an - nya - nian las idak - tar - kiyar - ta. 5. 即彼

生而般理。 W. 一生入於涅槃。 T. 於此

生而入涅槃。

(5) Kiri saṃyotānāmi mīda - maddha - abhiṃātāmi,

teṃ - na - abhō - ta gaurāte, chen - no dan tar -

na dan chiri - du yin no. 5. 三 結 下中上。

W. 有三種結 下中上。

(6) aha - jā ca paritappitā ca, chaṃ - ciy attho - ja

alan
moris - m - antag - ra . s
俱生及妄想。

一者俱生
二者虛妄分別而生。

生及分別

(c) vicina - aradrāna - ludjana, ana-tahodj tej vari-

kalim qay' mthaban - mid.

(8) ara - kara - hay a - am aṭā, day dāi gāham gyi lus
mam - ka - mid. 2. 自他身等。W. 自身他身

俱見。
丁、
普觀
察自
他之
身。

⑨
原文

saturniske andha - nipa - lades anstätt, = Till.

pku -*ni* *gahi'* *gaug* -*med* *-kahi'* *mota'an* *-nid.*

四陰無色相故。W、彼 = 四陰、無色色陰生
 時。T、受等四蘊色相故によ、2、
 anipa 1 と 2 読む。

⑩ 原文 sad asat - padeva - danti - dāśamāt 3 Tll. は

agod - ka daiv med - pali' phugya au lta - ta ma author -
 pali' phugya (有と無の主張における邪見と見
 ないために) とするが、意味は変らない。

S、観有無見。W、能離有無邪見。T、明
 見有無。

⑪ anapratyātma - adligama - vāśa - gāmitāyām

parināmananti, tadag gñ so-so nani gñ nig - nali
 taly ad - par du. Rgyo - tar yoni - nu - ado ste. 5' 回
 向自覺勝。W. 取自身內証迴向進趣勝處。
 T. 惟求所証最勝。

(12) aśerd rūpa - labdāna - athāna - niralpāś
 pravartate, gnyas tgyi mtshan - mid du smari - baś
 atog - pa kan - sig rkyun - ba. 5' 頓照相安想
 生。W. 一住見色相現前生心。T. 不了色
 相起分別。

(13) an āgāmi - rūpa - prahīnatvā ca saṃyogīmanān,
 1

teem naa abgar - ta maana sparao - pas na. 及 結
 斷故。W. 諸結不生。T. 永捨諸結更不還
 來。

⑭ T. 諸神三昧解脫力通悉已成就。
 かしなう。

⑮ sama - ekeāyana - mārga - pratilambhikaṅga - uta
 bodhi - prapīḍhāna - abhigata - veśāla - mūla -
 samimūḍhaṅga - uta nirvāṇa - nairvāṇikaṅga, abhi-
 ta phayoṅga gacī gī lam nat-ta thoṭ - pa tiāna,
 de ate tyaṇi - chub tu amon - lam goma - pa age -

śāśi nta - sa la nśio - ra kām, kām - te śipśul -
ya laṅg. S, 為得寂靜一樂道。為菩薩摩訶

薩方便示現阿維漢。為仙化仙。w, 為說得

決定寂滅^{四維}漢。為發菩薩願善根悉善根^{四維}漢。

為化心化^{四維}漢。T, 一向趣寂。退菩薩提願。

仙所變化。

(16) śīśaṅga - gāśi - aśiśāna - śiśā - upadeśaśi,

mām - par - nteṅ - ra śiṅg - śāśi gāśi gāśan am -

śāśaśi śāśan - ra. S, 於妄想處種種說法。T,

於虛妄處說種種法。

(17) *ava citta - dhiṅga - upagamat, navi gi sams anavi -*
san sekha - lan - pas. ㄣ' 得自心現量。 ㄣ' 以
 見自心為見所見。 ㄥ' 自心所見。

(18) *ava citta - dhiṅga - lokaḥ aṇa - vyāvitikā karaṇiṅga,*
navi gi sams anavi - bali' mātān - and lva llog - par -
ḥga. ㄣ' 當離自心現量相。 ㄣ' 當遠離自心
 見相。 ㄥ' 心離自心所見諸相。

(19) *citta - mātānā, sams - taam - pa.* ㄣ' 有心量。
 ㄣ' 惟心。 ㄥ' 不離心。

(20) *citta - mātānā vidyate, sams - taam la nī*

god - ka anin は、心量彼無有。T. 惟

心不可得。とす。よ。じ。12. 一唯心に。お。つ。2

9. 2. あ。2. 1. 美。在。し。な。い。L. し。た。か。つ。2.

梵文 = 一。1. じ。註。11. 12. 記。1. 4. 2. 1. 3. citta-

mātram na vidyate の意味に解す。ふ。す。2. ある。

m. 一切の中に。

(2) citta - mithama, nena rīkharul - pa. S. 心惑乱。

m. 心迷没。T. 心に。有。

(23) realpama - mātram, nitya - ka taam - pa. S. 妄想。

量。m. 惟是虚妄心。T. 是妄想。

This image shows a full page of blank graph paper. The grid consists of small squares formed by dashed horizontal and vertical lines. There are approximately 20 columns and 30 rows of squares. A solid black border runs along the left edge of the page. On the right side, there is a small, dark rectangular mark near the top edge.

「四七」二種の智について

(122) また、マハーマテイよ、智には二種

がある。すなわち、(法を) 観察する智と妄分

別の相を取り執着するにとよつて建立をお

こなう(智)である。

このうちで、マハーマテイよ、観察する智

とは、すなわち、その智によつて存在の自性

を觀察すれば、それは四辺をはなれたもので

あつて、不可得である。それが觀察する智で

ある。このうちで、マハーマテ、よ、四辺（
 をはなれた）とは、すなわち、一、異と俱。
 不俱と有、無と常、不常との四辺をはなれた
 ものであると、私は説く。マハーマテ、よ、
 一切諸法はこれらの四辺をはなれているとい
 われる。マハーマテ、よ、一切諸法を觀察し
 て、この四辺（をはなれる」と）を言ふべき
 である。
 このうちで、マハーマテ、よ、妄分別の相
 を取り執著する」とによつて建立をおこなう

智とはなにか。すなわち、マハーマテイよ、
 その心が妄分別の相を取り執着するくによ
 って、暖かさ・流動性・運動・個形性という
 虚妄な^③分別を相とする諸大種を、宗・因・相
 喩に執着するくにより、虚妄の建立として
 建立する^②。これが、妄分別の相を取り執着す
 るくによつて建立をおこなう智である。
 マハーマテイよ、これが二つの智の相であ
 り、この二つの智の相を具出して、諸菩薩は
 法と人の無我の相に通達し、
 (123) 無相の智

を觀察し行ずる地をよく知り、初地にいた
 て百の三昧に入る。そしてすぐれた三昧をう
 る。こゝによつて百の仏と菩薩を見、過去と未
 來との百劫のこゝとがらを完全に知り、^⑤百の国
 土をかかやかせ、百の国土をかかかせてか
 ら、順次に上の地の相をよく知り、すぐれた
 願によつて遊戲し、法雲（地）において灌頂
 されて如來の自内証の地を証得し、^⑥十の完全
 な句とよく結びついた法をもち、自内証の領
 域、^⑦衆にいとしく入つて、いるのであるが、^⑧衆

生を成就せしめるために、すまたな変化の光をもつて、かやくのてある。

【註】

(1) pravara - saddhi, rat-tu mam-par rityed - rahi' etc. 観念。W. T. 観察智。Vitti. は

chos rat-tu mam-par rityed - rahi' etc (126. 1. 5)

(2) viraḥpa - latesana - grāha - adhi mīrda - prasthāpita

(- saddhi), mam-par rity - rahi' mīdhan - mid adhi-

pa la mīr - par - chaps - rat rat-tu - rity - rahi' etc.

相住智。T. 取相分別執著建立智。Sugruberi:

the intellect which functions in connection with the attachment to ideas of discrimination. (p. 105)

③ 原文 - *keathina - amuthita - parikalpa -* 12 *Til. ma -*

dan yin - dag - pa ma yin - pa yoris - ru - ntag - pa...

S. 不妄相心...。W. T. 虛妄分別...。12

to 2' - *keathina - abhūta - parikalpa* 3 to 2°

④ *asad - bhūta - namānopara namānopayanti, yin -*

dag - pa ma yin - par agyo - idags - pas agyo - idags

ste. s, 不完建立而建立。w, 建立非完法
以為完。T, 而妄建立。

(5) rāḥya - 'at am ca pūrva - anta - aparā - antato, nu =
pravānti, lokā - pa saṅgāḥ yaṁ tasya - mānī
mūlāni dāni, tsa - mānī mūlāni iṅg. s, T, 知
前後際各百劫事。w, 過去未來各百劫事。

(6) tathāgata - pratyātma - śūnamīna addhigamya, de -
hāni - ggeḥ - kahi' ro - ro rari ge' tathā mā. s, 得
如自覺地。w, 証如來內身究竟
法身智慧地。
T, 入於仙地。

(7) dāa - miṭṭha - pada, miṭṭha - thung - paṭi sūrasaṇṇa
 S. + 無盡句。W. + 無量善根願。T. +
 無盡願。

(8) paṭyāṭṭha - gati - anuṭṭha - samāntarā, so - so naṇṇa
 nig - paṭi kade - dāa mādā - pa - gāṇa sū. S. 得
 自覺聖樂三昧正受。W. 得自身修行証智三
 昧樂。T. 恒安住自覺境界三昧勝樂。

「四八」

大種と大種所造についで

また、マハーマラー、よ、菩薩・摩訶薩は大

種と大種所造^①についでよく知るべきである。

マハーマラー、よ、このようにして菩薩・摩訶

薩は大種と大種所造についでよく知るもの

となるのである。このようについで、マ

ハーマラー、よ、菩薩・摩訶薩は眞實を学ぶ。

すなわち、よ、諸大種は生ずることもなく、

また、マハーマラー、よ、これらの大種は不生

である。観察するののである。このように観察
 すれば、（すべへは）名とたゞ妄分別のみで
 ある。自心所現のみである。ことを覓知すれば、
 外的な存在はないのであるから、この（すべ
 て）は名と（自）心所現の妄分別のみである。
 すなわち、三界は大種と大種所造をはなれ、
 （妄）四辺を清浄とし、我・我所をはなれ、
 如実に自相を確立して、不生である。自相を完
 成する。ことを見るのである。^②
 このうちで、マハーマテ、よ、諸大種にあ

いて、どのようにして大種所造が生ずるの
 ありうか。すなわち、マハーマテ、よ、
 として妄分別される大種は、^③内と外との水界
 を完成する。マハーマテ、よ、強さとして妄
 分別される大種は、^④内と外との火界を完成す
 る。また、マハーマテ、よ、運動として妄分
 別される大種は、^⑤内と外との風界を完成する
 マハーマテ、よ、色の可分性として妄分別さ
 れる大種は、^⑥内と外との虚空をともし、
 界と生じさせる。邪悪な真実に執著するこ
 と

に よつて、五蘊の集りである大種と大種所造
 が生ずるのである。

また、マハーマテイよ、識はさまざまな言

葉と対象に執着し欲するゝとを因とするゝと

に よつて、他の世界の相続のなかに生ずる。

マハーマテイよ、地（などの）大種と大種所

造は諸大種を因としてゐるが、諸大種はさう

ではな^い。なぜかという^③と、マハーマテイよ、

存在・証相・相・取るゝと・形・働きをもつ

てゐるものに、作用と結合した生起があるの

であつて、（それは）証相をもたないものに
 はないからである。それゆゑに、マハーマテ
 によつてこの大種と大種所造の相は、外学者た
 ちに、よつて妄分別されるものであつて、私に
 よつてではない。

〔註〕

① mala-śrūta - śāntika, ābhyañi - ta chet - po dani
 ābhyañi - ta las āgama - pa. ② 四大造色。③

四大及四塵相。

④ 大種造色。

⑤ この部分の4ページに誤りがある。その構成通りに誤

出す水は、つづつあり、
 観察す水は、自心所現
 あり、
 外なる存在はないの
 ち、
 三界は大種と大種所造
 あり、
 名と妄分別あり、
 名と妄分別あり、
 我と我所なく、
 自相と完成するにと
 見る。

3) mela - vikalpa - malakṣita, gha - ta nam - ka -

mela - ya vikalpa - ta ken - ka. 津門と相心大種

W. 妄相心分別柔動涅槃。T. 虛妄分別津潤
大種。

(4) uta āla - vīśalpa - malāśrūta, tala - tar mam - par -
ntog - ka bhyuni - ta cān - ko. S. 堪能妄相心大種。
W. 妄相心分別煖增長力。T. 炎盛大種。

(5) aśmudhama - vīśalpa - malāśrūta, gyo - tar mam - par - ntog
pa bhyuni - ta cān - ko. S. 飄動妄相心大種。W.
妄相心分別輕轉動相。T. 飄動大種。

(6) nupa - pañchada - vīśalpa - malāśrūta, gnyo - bye -
lray - bhyed - pa mam - par - ntog - kañ' bhyuni - ta cān -

no. 5. 斷截色妄想大種。w. 妄想分別所

有聖相。T. 色分段大種。

(2) pñthivī - bhūta - bhautikā nāṃ mūlā mātē bhāvanam

asti māśūṭāṇāṃ na tu māśūṭāṇām, kālī ābhini-

śa dāni ābhini - śa las pyar - ra mamsa la mi pyar

ābhini - śa śam - po mamsa yod rēgi, ābhini - śa śam -

po mamsa ni med do. 5. 地等四大造色等、

有四大緣、非彼四大緣。w. 四大有四大、謂

色香味觸。大慧四大無因。T. 地等造色有

大種因。非因。非四大種為大種因。

〔四九〕 五蘊について

また、マハーマテイよ、諸蘊について蘊の

自性と相を^①私に説く。このうちで、マハー

マテイよ、五蘊とはなにか。すなわち、色・

（受）受・想・行・識である。このうちで、

マハーマテイよ、無色の四つの蘊とは、受と

想と行と識である。マハーマテイよ、色は四

つの大種所造と（四つの）大種であり、相互

に異なつた相をもつてゐる。しかし、マハー

マテ、よ、無色のものに四つの数があるの
 はない。たとえは、虚空のいくとくである。た
 とえは、マハーマテ、よ、虚空は数の相をこ
 えたものであられるけれども、虚空妄である
 別されるように、マハーマテ、よ、同じよう
 に、諸蘊は数の相と計量するごとくをこえ、有
 無をはなれ、また、四辺をはなれたものであ
 るが、凡夫たちによつて、数と計量で説示さ
 れうるものとして、示される。しかし、諸聖
 者によつてではない。

また、マハーマテイよ、（それらの諸蘊は）
 諸聖者によつて、幻のなかの種種の影像のよ
 うに、夢や影像の人のように、異・不異をは
 なれたものとして仮設される。マハーマテイ
 よ、所依を異にするところがなく、聖智の境界
 にたいして妄想をいだくにとによつて、蘊の
 妄分別が^③あらわれるのである。マハーマテイ
 よ、これが諸蘊の蘊の自性と相である。そし
 て、あなたは、この妄分別をはなれるべきで
 あり、はなれてから寂靜の法を説くべきであ

る。そして、マハーマテイよ、（あなたに）
 すべてのお仏国土のなかで、外学者の邪見を除
 きたために、寂靜の法を説き、無我の教えを清
 淨とし、遠行地に入る。遠行という大地に入
 り、多くの三昧による力をもつものとなり、
 （二六） 竟生身をうるくによつて、幻に相似
 する三昧をえ、（一十） 力と（一六） 神通と（一十）
 自在を獲得して、あたかも大地のようになす
 べの衆生を保持するものとなるのである。
 たとえば、マハーマテイよ、大地がすべての

衆生を支えるものである。マハーマテ
 イ、菩薩・摩訶薩はすべての衆生を保持す
 るのである。

〔註〕

① *skan dā nam* *skan dā - nāthā - vā - lāṣṭhānam*, *phuri -*
po *nam* *tegi* *phuri - po* *na - nā - ṣṭhā - dā - nā -*
phuri - *na -* *phuri -* *na -* *phuri -* *na -* *phuri -*
 五陰相。五陰相。五陰相。五陰相。五陰相。

② *catvāri* *skan dā -* *skan dā -* *skan dā -* *skan dā -*
skan dā - *skan dā -* *skan dā -* *skan dā -* *skan dā -*
skan dā - *skan dā -* *skan dā -* *skan dā -* *skan dā -*
 四陰相。四陰相。四陰相。四陰相。四陰相。

色相。 T. 空等非色。

3) *ate andha - nirakha, puni-ro nam - kar - tag - ka.* 5

陰妄想。 W. 五陰虛妄。 T. 諸經分別。

「五〇」

涅槃論(二)

および、意識・ア・ラ

意識論

また、マハーマテ、よ、涅槃には四種があ

る。四種とはなにか。すなわち、(一)存在の自

性は存しないとする、(二)による涅槃、(三)種

の相の存在はないとする、(四)による涅槃、(五)

自相の存在はないと覚知する、(六)による涅槃、

(四)諸蘊の自相・共相の相続をたち切る、(七)に

よる涅槃である。マハーマテ、よ、この四種

は外學者たちの涅槃であつて、私の教えのな
 かにあるものではない。また、マハーマテ
 よ、私の教えにおいて、妄分別の意識を滅
 する^③ことが涅槃といわれるのである。
 マハーマテ、はいつた。
 — 世尊は八つの識を設定されたてはあり
 ませんか。
 世尊はいたえた。
 — マハーマテ、よ、（私は八つの識を）
 設定した。

マハーマテイはいった。

―世尊よ、もし（八つの識を）設定され

たのであったら、とうして、ただ意識のみが

滅があるとして、（その他の）七つの識の（

滅につりてお説きになら）ないのですか。

世尊は、いたえた。

―マハーマテイよ、七つの識はそれを因

とし、所縁とする、くによつて生ずる。また、

マハーマテイよ、意識は対象を了別して執著

する、くによつて活動しつゝ、諸習氣によつ

てアーヤ識を(忘)養い育てる。意は我。
 我所を取って執著し、思量する。いとをとな
 って生ずる。それは、自体と相を區別せず、
 アーヤ識を因とし所縁とするものであり、
 自心所現の対象に執著する。ことから相互に因
 となる心のあつまりが生ずる。マハーマテ
 ーよ、たとえは海の波のように、自心所現の
 対象の風に吹き動かされて、(すべての存在
 が)生じ、そして滅する。それゆえに、マハ
 マテーよ、この意識を滅する。いとによつて、

(他の)七つの識は滅するのである。

このことに關してつぎのようにな説かれる。

私は有によつても、作用によつても、また

相によつても、涅槃に入ることはない。私は

は、^え實に、妄分別を因とする識が滅したと

きに、滅に入るものである。(一七九)

それを因とし所縁として、意の領域の所依

がある。識は心に因を身え、(それの)所

依となる。(一八〇)

たとへば、大きな流れがつぎれば波は生れ

同じように、(意識が滅すれ

ば) 種種な識は滅しておらない。(一八

一)

【註】

(一) 1) *thāra - vathāra - athāra - nirvāṇam*, 2) *lāṣaṇa -*

vicitra - thāra - athāra - nirvāṇam, 3) *vathalaṣaṇa -*

thāra - athāra - vathalaṣaṇa - nirvāṇam, 4) *skandhānām*

avasthānāṃ - lāṣaṇa - śantati - prasthāna - vyutthoda -

nirvāṇam. Til. 1) *dīśa - pūṣi - nāi - lāṣaṇa -*

pūṣi - nāi - lāṣaṇa - pūṣi - nāi - lāṣaṇa -

ana-takcay tsyi chios-ya med-pali' mya-nian las

tidar-ya, 3) nari gi mtokan - mid tsyi chios-ya med-

par ntag-pali' mya-nian las tidar-ya. 4) phum-ya

manu tsyi nari dan apyili mtokan - mid tsyi

nyud tsyi nyum chad-pali' mya-nian las tidar-ya.

5. (一) 性 自性 非性 理 樂。 (二) 種 種 相 性 非性 理

般。 (三) 自 相 自性 非性 覺 理 樂。 (四) 諸 陰 自 共 相

相 結 流 注 斷 治 般。 (一) 自 體 相 理 般。 (二) 種

種 相 有 無 理 般。 (三) 自 覺 體 有 理 般。 (四) 諸 陰 自

相 同 相 斷 相 結 體 理 般。 (一) 諸 諸 自 性 無 性

性理。 (一) 種種相性無性理。 (二) 竟自相性無性理。 (三) 斷諸蘊自共相流注理。 (四) 性理。

(2) *vikalpaṅga mano-vijñānāṅga vyavasthā, man-*

par-rtog-ka dan tsa-ka' nyid tseṅ. man-par-ke-
ka byed-ka. s. 妄想識滅。 w. 虛妄境界
 分別識滅。 T. 分別爾妄識滅。

(3) *-dad dbeṅ - ālam-tan-āstāt, deḥ. rgyu dan dring-*

paḥ. pyin. s. 彼因及彼攀緣故。 w. 以依

彼念觀有故。 T. 以彼為因及所緣故。

(4) *rtāna-ka' ālayavijñānaṁ papapaṭi, tag-*

chaggs tepis teem - ghai - man - par - 'aas - ka sin - tu
 n gya - par tyed. 5. 習氣長養藏識。w. 種種
 熏習增長阿耨耶識。T. 生諸習氣長養藏識。

(5) avacitta - dhanga - viaya - abhinivāc citta - kalāpā
 pravartate 'nyogya - kutubad, pari gi som man - tala'

yul la mion - par - chags - pas gis gi nyun gis
 gyan - kadi' som - pa kiyun ste. 2. 自心現境

界計著心聚生、展轉相因。w. 觀自心見境

妄想執著生種種心。T. 執著自心所現境界

心聚生起展轉為因。

② avacitta - dāyga - karana - iritak, ngya - ntalo gyi

nlalo lta - bu nani gi' ams nani - talu' yul gyi' nlani gi'

ksayod - pas. 5. 自心現境界風吹。W. 1. 自

心見境界風吹。T. 自心所現境界風吹。

(c) vikalpa - hetu - jñāne nirvīte, 3 Tib. 12 mam -

ntog mam - pa - kes - pa las kaglog - pas. 3 1 2 hetu

3 2 1. 5. 妄想爾矣識。此滅。W.

轉滅妄心。T. 分別境識滅。

「五一」三性論(一) — とくに妄分別自性に

ついて

また、マハーマティよ、妄分別の自性の種

々なみちの相を、^①私は説く。この妄分別の

自性の種種な相をよく理解し了知すれば、あ

なたと他の諸菩薩・摩訶薩は妄分別と分別を

はなれ、自内証の聖(智)をみずからの境界

とし、^②その智によつて外学者の教えの領域を

見きわめて(128)所取と能取の妄分別をすて、

依他の種種さまざな相をも、妄分別の自性

と同じように妄分別しないであろう。マハー

マテイよ、このうちで、妄分別の自性の種種

な相とはなにか。すなわち、(一)言葉について

の妄分別、(二)いいあらわされることについて

の妄分別、(三)相について、(四)財産に

ついての妄分別、(五)自性について、(六)因につ

いての妄分別、(七)見について、(八)道

理について、(九)生について

の妄分別、(一〇)不生について、(二)結合

についで、妄分別、(三)束縛と解脱についで、
 妄分別である。マハーマテイよ、これが妄分
 別の自性の種種の相である。
 このうちで、マハーマテイよ、(一)言葉につ
 いての妄分別とはなにか。すなわち、さまざま
 まな甘い音声や歌に執着するところである。マ
 ハーマテイよ、これが言葉についで、妄分別
 である。
 このうちで、マハーマテイよ、(二)い
 いあら

すなわち、なにかいゝあらわされるべき事物
 は自性をもつものであり、聖智になる通達する
 ものであつて、それに依存して言葉が生ずる
 と妄分別するゝとである。
 うのうちで、マハーマテリよ、(三)相につい
 ての妄分別とはなにか。すなわち、かの虚気
 楼のようないゝあらわされるものについて、
 さまざまな相に執着するゝと、すなわち、一
 切諸法は暖かさ・湿気・運動・固性といふ
 相をもつものであると妄分別するゝとである。

くのうちで、マハーマテイよ、
 (四) 財産につ
 いての妄分別とはなにか。すなわち、金・銀
 種種の宝物(など)の財産を対象とする欲望
 である。

くのうちで、マハーマテイよ、
 (五) 自性につ
 いての妄分別とはなにか。すなわち、存在は

自性をもっているものであり、これは、のよ

うであつて (129) 他のようではないと、外学

者の妄分別の見によつて妄分別するごとくであ
 る。

のうちで、マハーマテイよ、(六)因につ
 ての妄分別とはなにか。すなわち、その因と
 縁によつて、有と無とが因の相より生ずるこ
 とから區別されるもの、それが因についての
 妄分別である。(七)
 のうちで、マハーマテイよ、(七)見につ
 ての妄分別とはなにか。すなわち、有、無、
 一、異、俱、不俱(など)の外学者の妄分別
 に執着することである。
 のうちで、マハーマテイよ、(八)道理につ

いての妄分別とはなにか。すなわち、我・我
 所の相の道理について討論を説くことである。
 このうちで、マハーマラーよ、(九)生につ
 ての妄分別とはなにか。すなわち、諸縁によ
 って有と無との存在が生ずると執着すること
 がある。
 このうちで、マハーマラーよ、(一〇)不生につ
 いての妄分別とはなにか。すなわち、すべ
 の存在は無因を体とするものであり、もとよ
 り不生であって、存在するくなくして、諸

縁

に よつて 生ずる、と
する、と である。

このうちで、マハーマテ、よ、
(二) 結合につ

いての 妾 分別とは なにか。
すなわち、金と糸

との ように、と もに 結ぶ
つくしと である。

このうちで、マハーマテ、よ、
(三) 束縛と 解

脱と についで、の 妾 分別とは
なにか。すなわち、

それは、縛る 因と 縛られ
るものに 執着する、

とく である。たとえは、
人が なわと 結ぶ、

く にと よつて、なわの 結ぶ
目が 作られ、また

解かれ
る、とく
である。

マハーマテイよ、くのようなものが、妄分
 別の自性の種種な相であり、すべての凡夫・
 異生のものは、この妄分別の自性の種種な相
 に執著する。マハーマテイよ、かれらは有と
 無とによつて依他に執著し、種種の妄分別の
 自性に執著する。たとえは、幻に依つて種種
 のものがあらわれ出されてゐるが、凡夫たち
 はそれを幻とは異なるものがある。あらわれてゐる
 と考へて妄分別する。いふところである。(三〇)マ
 ハーマテイよ、幻はさまたぎをなものと別のも

のでもないし、同じものでもない。
 ものであるとすれば、種種のもの
 するものではない、
 種種なものと同じものである
 ば、幻と種種のものは区別がな
 るであらう。しかし、その区別は
 のであるから、（幻と種種なもの
 ものであるかないか、同じもの
 ものであるかないか、同じもの
 それゆえに、マハーマラーヤ
 って、あなたと他の諸菩薩、摩訶薩は、
 幻に

つ い て 無 し て も 有 し て も 執 著 す べ き べ し

つ い 。

【 註 】

(1) kavikalpita - anasthāna - pratheda - maya - lakṣaṇa ,

svam - antaḥ - pari' nam bhūmī nat - tu dāya - trāṇi'

kalau api antaḥ - nid . s' , 妄 想 自 性 分 別 通 相 。 w ,

虚 妄 分 別 法 体 是 別 相 。 T , 妄 計 自 性 是 別 相 。

(2) pratyātma - āya - anagati , vipraya - pa dāya gi' so -

so nam gi nig - pa . s' , 自 覺 聖 。 w , 知 自 身 内

修 行 法 。 T , 証 聖 智 境 。

(3) karatantara - viridha - vicitra - lakṣaṇa, ghaṇa gṛi
 abhāṇi gṛi atthāṇa - pīḍa sūra - tthegā mām - pa ttha - dād.
 5. 緣起種種相妄想自性行。w. 種種虛妄
 分別因緣法体相。T. 依他起種種相中。

(4) (1) abhīlāpa - vikalpa, (2) abhīdhaya - vikalpa,

(3) lakṣaṇa - vikalpa, (4) andha - vikalpa, (5) aratthāṇa -
 vikalpa, (6) hetu - vikalpa, (7) dhātī - vikalpa, (8) yugāpī -

vikalpa, (9) utpāda - vikalpa, (10) anutpāda - vikalpa,

(11) sambandha - vikalpa, (12) bandha - abandha - vikalpa,

Tib. (1) bājod - pa la mām - pa - ttheg - pa, (2) amā -

bar - bya la mnam - par - nlog - pa, (3) mtohoia - mid la

mnam - par - nlog - pa, (4) aor la mnam - par - nlog - pa, (5) vari - adhin

la mnam - par - nlog - pa, (6) nyga la mnam - par - nlog - pa, (7)

lta - ba la mnam - par - nlog - pa, (8) nig - pa la mnam - par -

nlog - pa, (9) akye - ba la mnam - par - nlog - pa, (10) akye -

ba med - pa la mnam - par - nlog - pa, (11) filael - po la

mnam - par - nlog - pa, (12) & cino - pa dui a - & cino - pa la

mnam - par - nlog - pa. (一) 言說妄相心 (二) 所說事

妄相心 (三) 相妄相心 (四) 利妄相心 (五) 自性妄相心

(六) 因妄相心 (七) 見妄相心 (八) 成妄相心 (九) 生妄相心

③ 原文 abhi. vāpaya 3 Tib. は rnyed - pa. T. 有言說

解分別。

(九) 生分別、
(一〇) 不生分別、
(二) 相續分別、
(三) 縛

自性分別、
(六) 因分別、
(七) 見分別、
(八) 理分別、

別、
(一) 所說分別、
(二) 相分別、
(四) 既分別、
(五)

(二) 和合分別、
(三) 縛不縛分別、
T. 一、
言說分

別、
(八) 建立分別、
(九) 生分別、
(一〇) 不生分別、

(四) 義分別、
(五) 自体分別、
(六) 因分別、
(七) 見分

W. 一、
言語分別、
(二) 可知分別、
(三) 相分別、

(一〇) 不生妄想、
(二) 相續妄想、
(三) 縛不縛妄想心。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

(5)

gad yena hetupratyagena sadastar vithajate hetu -
 katasana - utpattitak sa hetu - vithajate, ngyu dai ngyen
 gari gis ngyami' mtham - mid las ngye - ta ngye - ka
 dai med - kar nian - tar byed - ta de ni ngyu la nam -
 ran - ngye - ngye. 5 若因若緣有 無分別因相生

是名因妄想。W 何等何等因 何等何等緣
 有 無了別因相生了別相。T 於因緣分別
 有 無 以此因相而能生故。是名因分別。

Vetti. guri gis akes-bya-ta mi nggu dani ngeyen gis te,
 Nani-kakini guri gis antakana-mas gis-te dani med-ya nes-ya
 so. (127. 4. 1-2)

(7) anupama-pūrvak sarva-bhāva adbhūta pratyayam bhavanti
 aketa - sarvāṇā, dīśa-ya bhāva - cad nggu - med-yaḥ' luo
 onon - ma - akeṣa - ya gis te, ma - byiri - ta luo ngeyen
 nggu kigiri-talo. S' - 一切性体無生、無種因縁

生無因身。W' - 一切法本來不生、以本無故
 依因縁有而無因果。T' - 計一切法本來不生
 未有諸縁而先有体、不從因起。

「五二」三性論(二)

このことに関してつぎのように説かれる。

心は対象に束縛され、^① 智は計度において

たらしき、そして、般若は無相の対象におい

てはたらく。(一八二)

（存在は）妄分別の自性として存在するが、

依他において^②は存しない。妄分別されるも

のは、迷誤によつて（実体として）把握さ

れるが、依他のものは妄分別されない。（

一八三)

種種の支分の生ずることによつても、幻は

(実体として)成り立たない^③ように、種種

の相が妄分別されても、(実体としては)

成立しない。(一八四)

相は虚妄より成るものであり、束縛するも

のであり、心から生ずるものである。^③(そ

れは)無知のものたちによつて虚妄分別さ

れたものであり、依他によつて妄分別され

る。^③(一八五)

この妄分別された存在、それがすなわち依
 他にはかならない。(三) 妄分別はさまざ
 まにあらわれ、依他において妄分別があ
 りなれる。(一八六)

世俗諦と第一義諦がある。もし第三のものが
 あるとすれば、無を因とするものとなる
 であろう。^⑤ 妄分別は世俗にあると説かれ、

それを断ちきるこ^⑥とによつて聖(知目)の境

界を(うる)のである。(一八七)

たとえは、修行者には一つものが種種なも

のとしてあらわれ、
 まゝたくないうに、
 ある。(一八八)
 たとえば、眼に翳のあるものたちは、ま
 るな形のものがあらわれていると妄分別す
 るが、その翳は形のあつてもなく、形
 のないものでもないように、
 同じように依他を（理解する）。(一八九)
 たとえば、金が清浄であり、水が濁りをは
 なれ、空に雲がないように、妄分別も清浄

となる。⑪

(一九〇)

妄分別された存在は(⑫) 実には) 存しないが、

依他として存在する。(このように知れば)

妄分別してゐるものの建立と誹謗は消滅す

る。⑬

(一九一)

もし、依他の自性があった、妄分別がない

とすれば、存在なくして存在があり、また

存在は無より生ずるようになるであらう。

(一九二)

妄分別に依存して、依他が得られる。相・

名と結合することによって、妄分別が生ずる。(一九三)

妄分別は、ひっきよう内成実ではなく、それ以外の) 他から生じたものではない。(14)

(三) そのとき、第一義の自性の清浄であることが知られる。(一九四)

妄分別は十種⁽¹⁵⁾であり、依他は六種である。

真如は自内に証知されるべきものであり、

それゆえに、無差別である。(一九五)

五法は真実である。(16) また、自性は三つ⁽¹⁷⁾であ

る。修行者はこのことを知れば、真如をは

なれないで⁽¹⁸⁾あらう。⁽¹⁹⁾（一九六）

相は依他であり、⁽²⁰⁾名はすべて妄分別である。⁽²¹⁾

そして妄分別の相は依他より生ずる。――

九七）

慧⁽²²⁾によつて観察すれば、依他もなく、妄分

別もなく、ただ円成してゐるのであつて、

（それ以外のありかたの）存在はない。そ

のと、とうして慧によつて妄分別されよ

うか。⁽²³⁾（一九八）

有・無をはなれ、円成してゐる存在がある

とき、有・無を離脱したものに⁽²³⁾、⁽²²⁾いうしてか

の二つの自性があるうか。(一九九)

妄分別の自性があるとき、二つの自性⁽²²⁾が成

立する。妄分別は種種にあらわれ、また、

(それを)清淨とすれば、聖(智)の境界を

(うる)。(二〇〇)

妄分別は、実に、種種なものとしてあらわ

れ、依他によつて妄分別される。もし、

のようにはなく分別すれば、外学者の主

張に依るゝとになるであらう。(=0-)

妄分別は(さらに)妄分別されると説かれ

(それによつて、自らの相を)見るから、

因より生ずるものである。(25) もし二つの妄分

別をはなれるならば、(26) それとそれが、まさに

因成である。(=0-)

〔註〕

① 心は対象に束縛されるとは、アーラヤ識

(*turn-gahi-mam-par-heo-pa*) 9: と 2 あ

2 身体・資財・住処と(2) あらわれ2 い

3 ヌ 9 は 依 他 2 ある。 (Vitti. 128. 1. 7-8)

(2) 原 文 paratantra na vidyate 3 Til. 11 ghaṇa gya'

again vi' med-ka = paratantra na vidyate 3 15 20.

Vitti. ヌ 10 い。 52. T. 15 縁 起 則 無 3 3. 15

縁 起 法 則 無 3 2 原 文 10 い 2 ある。 11

2 17 Sugrivi: According to the false imagination,

↳ self-substance 』 is, but from the point of view of

relativity it is not (p. 112) 3 15 照 1 20.

(3) 四 17 種 種 の 類 の 支 分 2 支 分 2 ヌ 1 ヌ の

と い ； 支 体 (dhyaṇa) 3 1 2 分 別 1 ヌ 2 ヌ

外的な存在のよゝに成立しない。これは、

たゞそのようにあるわけに、たゞの

(de anani - taam) だが、ある。 (

Vitti. 128. 2.8 - 3.1) だが、Vitti は、この三

性を述べる部分に、ついで、かなり詳細な註

を行なっている。

原文

dans: thulya - mayam は註 17 に記された T

本 maya 333。T. 8. 9. 11 - 12. 13. 14. 15 =

dans: thulya - shara. S. 彼相則是過。W. 彼

想則是過。T. 彼相則是過。 - Vitti. mahan -

phyi - nel dai ndan (danya) la aap - yaki' nai - tsolin.
 de tem - tu ntap mi - nes shun - ya namu tsyio ghan
 syio dbai (paratantra) gaal - tsaki' gags nu nani -
 ba la ntay - ka (nitya) dai phyi - nel (tsilya) dai
 ndan la - aap - pa - ntay - ka (128. 3. 4 - 5).

(8) tityam nāti - tsutseam, raga las aap - ya gam
 du med. 5. m. 7. 8. 三無因生。石女の

3 6 7 5 2 當・我・松・微・支・分・の・美・体・(

danya) 5 3 2 5 5 別 5 3 12 17 の 2 2 2 2

m 9 (Vitti: 128. 4. 4 - 5)

⑤ 四 修行者にとつては、無相あり、第一義

不二・正知の實體は妄分されない。その定

より立つて、有相の定 (samarīta dharīḥ ca) -

prāṇīti - nie - riddhi) に入ったものは、種種

なるのは一實體としてあらわれる (ana-

śloka ni dhīra - ro gīg - tu amā - nie) 。 ⑥ (Vittā

128. 5. 1 - 2)

⑦ 原文

tālāṇḍhalāṇḍha 漢訳諸本は tālāṇḍha, ala =

dhalāṇḍha 不眞・無智・下・不

3 3 1 2 1 3 か Tāl. は de - riddhi mādā - ra

と し せ の 原本 2-12 12th 18 2nd 12

11 12 2 と 示 し 2 おり 12th 2-12 12th 12

12 12 同様 に 智者 (mudra-pa) は 円成 義 の 自

性 (yoni-mu-grub-pa) nani-nobin, nani-mi-pama-

avatha ora) に おい 2 眼 12 翳 の ある も の に

12 11 3 3 色 の よう な 依 他 は 厚 し な い と 知る

(128. 5. 6-7) と し 2 11 3 2 12 12th.

12th 11 2 3 鈴木博士 は 漢記 に よる 2

by the underwriting ones (p. 113) と 記 し 2 おり 4

2

① の場合の原之 *virealpa* に (1) 2、鈴木博士

は、*virealpa* の正は否定であるから、妄

別を減したという意味であること註記され、

detached from the false imagination と記してある

はるが (*Sugawara p. 113*)、この経典の *virealpa*

の用例からすれば、この解釈は無理である、

妄想淨如然。下、妄想淨如是、とし、

註の二つの中の十二解するところから、

同博士の説と異なる。曰同じように、妄

分別と依他の自性を離れれば (*ma-glyog-kan*)

adha payitva) 清淨 2- 阿 3 2 考 2 3 小 2 安

5 1 4 3 3 1 1 意 味 2- 阿 3 2 (Vithi. 129, 1.1-2)

(12) 原文 tralp ito sh arak 3 Tih. 12 antag - pa la m

dhias - vo = nalp ite sh arak 3 6 3 0

(13) 原文 nam āropa - aparādham hi vikalp ante vimalayati

Tih. agro - ataga - ra dāi dhara - pa dāi nam -

par - ataga na rāgig - kar - kiggar. 52 建 2 及

非 意 由 2 4 想 壤。 T. 建 立 及 非 謗 斯 由 分 別 境

2 1 2 建 立 2 非 謗 3 は 妄 分 別 可 3 2 消

減 4 3 1 9 意 12 解 1 2 1 3 0 2 3 2 3 1 1

これは内容的に理解しがたい。金
木博士は、一九〇〇年の場合と同じく、の

vicariously when one is free from the imagination
(p. 113) と訳しておられる。しかし、の

うようなコンパニンの解釈には無理がある

の 2. 2. は
vicariously を 属格に

語を namāropa - aparāda に かかると 解し

た。

(14) Vitti: antag - pa ni ntag - patti ntag gñi la-roga -

patti agga - apam gñi agga gñam las khyani - ta

ma gain ao. (129. 2. 2-3)

今漢記は三本と有十二とす。七。十二

梵文と同じ。Vitt. 所引の經文は「十」

「relag - pa mi' bupod - pa la - nong - pa'i' mnam -

par - ntag - pa'i' gwis bupis antag - pa mnam - pa

ber - gwis par relag - par antag go (Vitt. 129. 2. 2-3)

と
記
し
2
1
3

(16) 五法とは名・相・分別・正智・真如也

あ、これのみが真実であり (de - dag mid

gan - dag - pa - mid de) 諸法の自性 (chos

mans taji rai - kokin) 2. ある . と い う 意味 2.

あ 3. 0 (Vitti. 129, 7-8)

① 目 自性 3 は 1. 妄 分 別 3. 他 と 円 成 と 2. ある . 0

(Vitti. 129, 2.8)

② 目 (真如 3) 離 水 有 . と は 1. 真 如 に 入 る に

2. (de - kshin - and la bying - ra) 2. 1. ある . 0

(Vitti. 129, 3.1)

③ 目 相 3 は 1. 青 色 と 2. あり 水 色 智 (

de - ra) 2. あり . 依 他 2. あり . 0 (Vitti.

129, 3.1)

S. W. 彼諸妄想相。T. 彼諸妄計相。

(22) buddhi, etc. Vitti. ves - rat = prajñā. S. 眞。
W. 眞定智。T. 智慧。

(23) 原文 shāra - alhāra - vīraṃśato 12 Til. yod - ra

dan med las grof - ba nyi 11 7 3 0

(24) □ = つ 3 は、
分別の自性 12 つ い 2 い う の

22 あり、(また) = つ 3 11、有る無しとの事

分別 22 あり。□ (Vitti. 129. 4. 8)

(25) darṣanād dhṛta - samsthāsam, mūlāni - tālu' phye

na nṛpaṇa las tṣugai S. W. 因見和合生。T.

以諸妄見故。

二二二

Vitthi. ntag - na mi ngyin

agzo - i. dzo - na ntag go. deo na ale - ntag

dees - oya ate, de god - na na ngyi ngyi

mtahan - mid mthori - tahi' phyei na ngye la

Rgyun nie (Vitthi. 129. 5. 7 - 8)

26 能取之所取との(二)種のありかたの事

分別と離れをあらはし、空・成就・不可思議

無相・不二義・不二を正しく知る。と(

Vitthi. 129. 5. 8 - 130. 1. 1)

〔五三〕一乗と三乗について

また、マハーマテイはいった。

― 世尊よ、私に、自内証の聖智の領域の

相と、一乗とを^こお説きください。世尊よ、そ

の自内証（智）と一乗の境界の相によって、

私と他の諸菩薩・摩訶薩は、自内証の聖智と

一乗とをよく知り、諸仏の法のなかにおいて、

他にみちびかれるくとなないものとなるであ

りましよう。

世尊はくたえた。

— マハーマテイよ、それならばよく聞き

なさい。よく聞いて、こころにとめなさい。

私はあなたのために説くであろう。

— かしこまりました。世尊よ。

と言つて、菩薩・摩訶薩 マハーマテイは、世

尊のくしに耳をかたむけた。

世尊はくたえた。

— マハーマテイよ、菩薩・摩訶薩は一人

で静寂なところに行き、量と聖教についてのみ

妄分別のなにより自内証智によつて簡
 括し、他のものに導かれず、邪見と妄分別を
 はなれ、順次に上の如來地に入つて努力する
 マハーマテイよ、これが自内証の聖智の領域
 の相である。

このうちで、一乗の境界の相とはなにか。

すなわち、一乗の道を証得し、覺知するから、

一乗であるとは私は説く。一乗の道を証得し、

覺知するとはどういふところか。すなわち、

所取と能取の妄分別を（完全に知つて）如實

に住することによつて妄分別が生じないとき
 一乗は覺知されるのである。マハーマテイよ、
 この一乗の覺知は、私をのぞいて、他の外學
 者・聲聞・緣覺・バウモンによつてはかつて
 得られなかつたものである。それゆえに、マ
 ハーマテイよ、この理由によつて、一乗とい
 われるのである。

マハーマテイはいつた。

— どうして、世尊は三乗を説いて、一乗

をお説きにならなないのですか。

世尊はこたえた。

——マハーマテ、よ、すべての声聞・縁覚

のものたちは、自ら般涅槃する法をもたない

のであるから、^⑤かれらにたいしては、私は一

衆を説かない。なぜかというところ、マハーマテ

よ、すべての声聞・縁覚たちは、如来の調

伏と寂靜の修行との教えによつて解脱するの

であつて、自分自身でするのではないからで

ある。

また、マハーマテ、よ、すべての声聞・縁

寛のものたちは、所知障と業の習氣をすてず、
 法無我を覺知するごとくなく、また、不可思議
 な變易の死を得ていないから、声聞たちには
 いしては、私は一衆を説かず、三衆を説く
 のである。マハーマテ、よ、もしかれらがす
 べての過誤の習氣をすて、法無我を覺知する
 ならば、そのときには、習氣の過失と三昧に
 酔うことがなくなるから、^運無漏の界において
 覺悟するであろう。そして、さらに、出世間
 の無漏の界をうる諸資料を完全に充たし、不

可思議な法身の自在力をうるであらう。

このことに関してつぎのように説かれる。

天衆・梵衆・声聞衆、および（二〇二）如來衆、

縁覺衆、これらの衆を私は説く。（二〇三）

心が活動しているかぎり、諸衆には究竟は

ない。しかし、心が滅すれば、衆もなく、

また、衆に属するひともない。（二〇四）

諸衆の確立は（眞實には）まったくないが、

凡夫たちを啓発するため、私は衆の區別

を説く。すなわち、（眞實には）ただ一衆

を私は説くのである。

(二〇五)

三種の解脱③と法無我と平等性の智・煩惱が

あり、それらは解脱によつてすてられる。③

(二〇六)

たとえは、海のなかで、木片が波によつて

たまたまよつていゝるやうに、愚かな声聞は相に

よつてゆれたたよつていゝる。(二〇七)

現起していゝる(煩惱)をはなれたのである

が、かれら(声聞たち)は、煩惱の習氣に

しばられ、三昧に酔つて無漏の界のなかに

たゞ安住してゐるのみである。(二〇八)
 そゝには究極的な境地もないし、また、
 はや退くゝともない。三昧の身を得て、劫
 のおわりとなつても(三昧より)さめるゝ
 とはない。(二〇九)
 たゞえば、酔つたひとが酔いがなくなつて
 目ざめるように、かれらは、私の仏の法と
 いう身をもつてある。(二一〇)
 以上、入楞伽(經)中、三万六千に一切法

を集成する、と名づける第二章。

〔註〕

(1) pratyātma - āṅgārīṇa - gati - katejanam eka-gānam

tipkag - pa so - so nani gi ye - hee ntag - pa dāri

they - pa gāg - nāli' antān - mid. s' 自覺聖相

及一衆。W. 自身内証聖智修行相及一衆法。

T. 自証智行相及一衆行相。

(2) pāṇāṇa - aptopadā - vīralpa - aśānāt, tādā-

ma dāri yid antan - nāli' lani la pāṇa - pa - ntag -

pa med - pa s' 則聖所知轉相伝授。T. 依

諸聖教無有分別。

(3)

ekā - gāna - mārga - adbhigama - avasthāt, bhag-
va gacchati lam nigacchati bhagavān - du - chand - pao. 5'
得一乘道竟。W. 如美竟知一乘道。T. 得

証知一乘道。

能取之所取の各分別を如美に之入王に知る

二 (gani - dug - pa gi - lta - ba rohin - du gani -

na - na - pa) に 4, 2, 1 分別は 4 1 1 1。

4 1 1 1, 2 無我を完全に知るからである。

(Vitti. 130. 1. 6-7)

(5)

atayam aparinirana - dhamitrat, edag - mid
 yōrio - an mya - nian - lev - mi - fidan - pati' chet - can
 yin - kas na. S. 不自般涅槃故。W. 不能
 自知証於涅槃。T. 無自般涅槃故。

(6)

vāṇa - dāda - āmāddi - mada - abhārat, ag -
 ch op tēgi nēs - pa dāi tiri - nīe - fidāi gyo myas -
 na med - par - opun na. S. 一切起煩惱過習
 氣斷。三昧著非性。W. 離於諸過。三昧
 無漏。醉法竟已。T. 能除一切過習竟法無
 我。是時及離三昧所醉。

① 心が活動していきかきりとは、アライヤ

識が、身体・資財・住処として顕現して

るかきり、といいうことである。それが滅す

れば、二つの相によつて空である。衆と衆

に属するところという妄分別はない。それゆ

えに、二はたのちにあるから、衆といふ

一衆（*saṃsāra - napaṇa kyaḥ - a gāḥ*）と、衆

は護くある。（*Vitti. 130. 3. 8 - 4. 2*）

② の偈文の正確な意味は理解しなかったが、

③ 註の二はつきのようになり、釈して、二、三、四、下

中 . 上 の 股 若 の 区 別 に よ っ て (*res - rat*)

sepi. talyad - ran gyio) 三 葉 か ある 。 同 い よ

う 12 . 三 つ の 解 脱 と は 一 煙 悩 る 尽 す 相 (

mon - morio - ra gad - raki mubam - mid) を 援 ず

る か ら 22 ある 。 (*V. th. 130. 4. 4 - 5*)

② 平 等 性 の 智 と は 無 二 (*mi - gwi - radio*)

22 ある 。 煙 悩 と は 一 煙 悩 の 無 智 (*mon - morio -*

raki mi - res - ra) 22 ある 。 4 の 解 脱 11 よ

2 (*celi. grol - ra gani yin - ra deo*) 一 一 4 5

9 声 聞 と 縁 意 の 解 脱 か ら 22 4 3 と 一 一 5 5

味と考之しれり。そは、つてのようには
 かれり。能取と所取の無い平等性の智の
 所知の障とす。解脱にふつて、れらの
 声聞と縁意の煩惱（より）の解脱はす。
 くれり。 (Vitti. 130. 4.8-5.2)

(c) iti Loka-natāre ad-thinhat-akārore sara-
 dhārma-samuccayo nāma dhotigāhi pavāntak, Loka-
 tēva ghega gāma-sēhi-dug dōri-ra loka-klam-
 cad-bodhu-ra dōs-sya-tāhi Loka-ete, gāma-rāho.
 是・ナ・ニ・ウ・是・ナ・四・一・是・ナ・三。
 一

[illegible]

「五四」三種の意生身について

(136) そのとき、また、世尊は、菩薩・摩

訶薩マハーマテ、に、つぎのようになつた。

― マハーマテ、よ、意生身の領域の種種な

相^②を私は説く。それをよく聞きなさい。よ

く聞いて、くくろにとめなさい。私はあなたの

ために説くであらう。

― かしこまりました、世尊よ。

と、いって、菩薩・摩訶薩マハーマテは、世

尊のゝとばに耳をかたむけた。

世尊はつぎのようになつた。

——マハーマテ、よ、意生の身は三種であ

る。三種とはなにか。すなわち、(一)三昧の樂

に等しく入るゝとによる意生(身)と、^(二)法

の自性を覺知するゝとによる意生(身)と、^(三)

(三) (衆生の)種類とともに生ずる行の作用を

もつ意生(身)であり、諸修行者は、順次に

上地の相を完全に知るゝとによつて、これら

を証得するのである。

ののうちで、マハーマテ、よ、三味の樂に
 ひとしく入るゝとによる竟生身とはなにか。
 すなわち、三・四・五の（菩薩）地において
 自らの種種の心の寂靜に住するゝとによつて
 心の海のなかで活動する識という波の相の樂
 にひとしく入つた意は生ずるゝとなく、自心
 所現である対象たる存在は無であるゝとを完
 全に知るののであるから、竟生の身といわれる
 のである。

(137)

ののうちで、法の自性を覺知するゝ

とによる意生の身とはなにか。すなわち、第
 八地において、幻など（のように）法は無相
 である。と観察し、覺知する。これによつて心の所
 依を転じたものは、如幻三昧をえ、それによ
 つてその他の諸三昧門を獲得し、多くの相と
 自在と神通の花がひらき、意の迅速であるこ
 とと相似し、幻・夢・影のやうに大種によつ
 てつくられたものではないが、大種によつて
 つくられたもののやうに、すべての色のさま
 ざまな支分を完備してすべての仏国の集りの

なかにある身が、法の自性に通達したことに
よる意生（身）といわれるのである。

このうちで、（衆生の）種類とともに生ず

る行の作用をもつ意生の身とはなにか。すな

わち、仏陀の一切諸法を自内証する、とによ

る樂の相を覺知するから、種類とともに生ず

る行の作用をもつ意生（身）といわれるので

ある。マハーマテ、よ、あなたは、この三つ

の（意生）身の相を觀察し覺知する、とを修

すべきである。

このことについて、つぎのように説かれる。
 私の大乘は衆ではなく、音声でもなく、と
 ばでもない。真実でもないし、解脱でもな
 くまた、無相の境界でもない。(一)
 しかも、大乘は衆であり、三昧の自在力を
 もち、種種の竟生の身は自在の花でかざら
 れている。(二)

〔註〕

①

mamomaya - kāya - gati - pradhāda - mayā - lakṣaṇa ,

gīd - tasya - loka - atapa - var - nat - tu - atyeta - tasya - antaḥ - śānti

S. 意生身分別通相。W. 意生身修行差別。
T. 意成身差別相。

(2) sam'adhi - nikkha - samāpatti - manomaya, tin - ā -
hiddin' ggi - dda - la la sammā - par - iyya - pati' yid
tegi' luo (... teya) S. 三昧樂正受意生身。
W. 得三昧樂三摩跋提意生身。T. 入三昧
樂意成身。

(3) dhārma - āvāthāra - āvāthāra - manomaya, chas
tegi' nio - to - āid nāp - pa khori - du - dand - pati' yid
tegi' luo. S. 覺現自性性意生身。W. 如妄覺

知 諸 法 相 意 生 身。 T. 覺 法 自 性 意 成 身。

(4)

nirāṅga - aśaṅga - aśaṅkāra - teṁgā - manomaya,

nig an ānam - sig aṅge - paṇi ādu - byed teṁgā -

śaṇi nyid teṁgā luv.

二 〇 三

aśaṅkāra

漢

訳 は 一 ず れ 七

aśaṅkāra

一

二

三

Tib.

Latā は 原 之 と 同 じ。

S.

種 類 但 生

無 行 作 意

生 身。

W.

種 類

生 無

行 意

生 身。

T.

種 類

類

俱 生 無 行 意 成 身。

(5)

avacitta - niriddha - niratā - nirāṅga, naṇi gi

śeṇa naṇa - paṇa naṇi - so āṇa - paṇa aṅge - paṇa

二 〇

う、ち、
 寂靜、
 讀む。種々自心寂靜安住。自心
 寂靜行種種行。離種種心寂然不動。

原文

śāśvata - dhīra - viśaya - bhāva (instead of

adharā) - adharā - paripūrṇa ānanda 12 Tā.

raṇi gi saṃ - anā - bali' yud dhīra - ya yod - pa dāi

dhīra - ya med - pa yod - an - ān - pa.

現量境界性非性。以見自心境界故、如

實知有無相。境心現皆無所有、

る。

一切知者は、有相の定に入り (manī - ba

don't see - pali' tti - nie - Adami la abhaya te) 象

生の利益を行なうときは、意生の身であ

る。これゆゑに、大衆は、意の迅速である

定のようにな、広くすべきものの中にある

(Thams - cad du nigro - ba) という意味であ

る。自在とは、すべきの障をすくはるとに

よつて、障がなくなた一切知者は、ま

たにく煩悩の習氣をすくたのこあるから、一

切諸法に証得す
3 (chaos thorns - cad - lily - nu -

cloud-pa) 0 2- 2 3 0 0 (Vitt: 132.38 - 4.2) 70

お
Unterschied
は
、
、
、
、
で
に
、
地
と
三
味
と
の
差

別
に
よ
り
て
上
々
に
意
生
身
か
分
別
せ
ら
る
る
こ

acclari - nic - ladori
gr

tekyad - kor gyo' gori - mar gori - du yid teyi' shen

mean - par - phage - ta epy od - ra clari - radio) 3 6 3

〔五五〕 五無間業について

そのとき、また、菩薩・摩訶薩マハーマテ
は、世尊につきのように言った。

― 世尊は五つの無間（業）^①をお説きにな
りました。世尊よ、もし善男子、あるいは善
女人がこれを行なえば地獄におち入る、こ
れらの五無間（業）とは、どのようなもので
すか。

世尊はくたえた。

— それならば、マハ—マテイよ、よく聞

きなさい。よく聞いてくくろにとめなさい。

私はあなたのために説くであらう。

— かしこまりました。世尊よ。

— いて、菩薩・摩訶薩マハ—マテイは、世

尊のいとはに耳をかたむけた。

世尊はつぎのようにな言つた。

— このうちで、マハ—マテイよ、五つ

無間(業)とはなにかという、(一)女と、(二)

父と、(三)阿羅漢を殺すことと、(四)サンガを破

るゝとと、(五)如來の身において惡心によつて
 血を出すゝと^(三)である。
 ゝのうちで、マハイマテイよ、諸衆生の母
 とはなにか。すなわち、それは渴愛であり、
 再有をうけ、歡喜と貪^(三)とにもなわれて母た
 るものとして存在する。^(三)無明は處の聚落を生
 めさせるために父として存する。^(三)ゝの母・父
 の兩者の根本をひきようして切断するから
 母・父を殺すゝとというのである。ゝのうち
 で、ねすみの毒のやうに激しい性質をもつ、

敵 (a-ri) のような諸隨眼を、ひっきょうして

断つから、阿羅漢 (ara-hant) を殺すことと

うのである。このうちで、サンガを破ることは

とはどういうことか。すなわち、相互に異つ

ている相をもつ蘊の集りをひっきょうして根

本から破るのであるから、サンガを破るとい

われるのである。マハーマテ、自心所現

のみであることのほか、自相・共相がある

知る (139) 八識の身を、三解脱と無漏の要分

別によつてひっきょうして滅すから、識⑤ 仏⑥に

ついで要心によつて血を出すというのであり、
 それゆゑに、無間業といわれるのである。マ
 ハーマテ、よ、これらは、内的な五つの無間
 (業)であつて、もし善男子、あるいは、善
 女人が、これらを行なうならば、無間の法を現
 証した³ものとなるであらう。

また、マハーマテ、よ、私はあなたに、外
 的な無間(業)を説くであらう。それらを説

けば、あなたと他の諸菩薩は未来の世におい

て疑惑をおこさないであらう。このうちで、

それらの（外的な無間業）とはなにか・すな
 わち、それは經典のなかにのべられた無間（
 業）^{（8）}であり、もし、それらを行なえば、（仏
 の）変化の威神力によつて現証するものを除
 いて、三解脱（門）のいずれによつても現証
 するゝとはないであらう・マハーマテイよ、
 （仏の）変化の威神力による声聞は、菩薩の
 威神力、あるいは如来の威神力によつて、他
 の無間業をつくるものの悪業があるとき、そ
 のものの悪業をのかかせ、重荷をすてて悪業

の邪見を無とするために、さらに努力するで
 ある。そしてこのようにしておわってから、
 (仏の) 変化の威神力によつて現証する、と
 私は説くのである。マハーマテイよ、(悉)
 自心所現^③のみであることを覺知し、身体・資
 具・住処の領域を妄分別して我・我として取
 ることの止滅を見、いつでもどんなときに
 も、善友に遇い、他の趣の相續のなかにあつ
 て、自らの妄分別の誤をはなれているものを
 のぞいて、ただ一途に無間業を行なうものは

まゝたく現証しない。

このことに關してつぎのように説かれる。

渴愛が母であると言はれる。無明が、また

同いく父である。対象を覚知するくによ

つて、識が陀であると言はれる。(三)

隨眼が阿羅漢であり、五つの蘊の集りが偈

伽である。(これらは無間に断じられる

ものであるから、無間の業である。(四)

①

pañca - anantaryāmi, muktānam med-ya bha - po.

五無間業。

②

mātr - pita - anāh - vadhā - sam gha - bhedak

tath āg atate āge duṣṭa - muddhira - utpādātī ca,

phā dai na dai dya - ecom - pa god - pa dai

dye - kadam - pa dai de - bōkin - gheg - pa la

gmod sems rgyis tshag - gyani - paḥo.

五殺父

母及害難漢

破壞象僧

惡心出仙身血

W.

一者殺母

二者殺父

三者殺阿難漢

四者

破

和合僧

五者惡心出仙身血

。

丁

殺

母

殺

父 殺 阿 羅 漢 破 和 合 僧 懷 惡 心 出 身 血

③ 原文

m. a. l. t. u. e. n. a. u. t. i. o. t. h. a. t. e

T. i. l. i. s. m. a. -

l. t. a. - b. u. n. g. u. a. s. n. o. 3. 3. 3. 5. 3. 如 緣 母 立。

T. 如 母 養育。

④

p. i. t. t. u. e. n. a

T. i. l. i. s. 1. 1. 1. 1. 1.

p. l. a. l. t. a. - b. u. n. a. t. e

3. 3. 3. 0.

⑤

1. 1. 1. 2. 1. 2.

敵

a. n. i.

3. 殺

3. 4. 5.

a. n. a. - t. a. n. t. 2.

あ 3. 3. 1. 1. 言語 源 的 説 明 如 左 1. 4. 2. 1. 3.

⑥

n. i. j. i. a. n. a. - b. u. d. d. h. a. , m. a. m. - p. a. r. i. s. - t. e. s. - n. a. l. i. ' s. a. n. i. s. -

r. e. p. a. a. s. 5. 1. 2. 種 識 仙。 1. 1. 八 種 識 仙。 T.

八 識 身 仙。

(c) anantarya - teān - thavaty asthānita -

dharmak, antahams - med - ra lina - ro de - day

tyas na anion - var day - rahi' chas - can

nyin te . 5 . 無 間 業 。 3 . 各 証 如 一 証 法 。

T . 得 現 証 法 。

(8) desana - pāthe , anuavavānīlany anantaryam,

lotan - ra dayat - ra las mthams - med - ra means .

T . 余 教 中 所 說 無 間 。

9) 原 文 中 の thavāna は 除 く 。

〔五六〕 諸仏の仏性について

また、マハーマテイは言った。

― 世尊よ、私に、諸仏の仏性をお説きく

ださい。世尊よ、どうして諸仏に仏性がある

のですか。

世尊は、たえた。

― マハーマテイよ、人・法の無我を寛知

し、二つの障を完全に知り、寛知し、二つの

死を証得し、二つの煩惱をすてたから、諸仏

世尊には仏性があるのである。マハーマテ
よ、これらの同じ諸法を証得するから、声聞
縁覚の仏性がある。それゆえに、マハーマテ
は、私は一衆を説くのである。

このことに關してつぎのように説かれる。

二無我と諸煩惱と二障と不可思議變易の死
を得たものであるから、如来といわれる。

五)

〔註〕

2 原文

buddha'mam shagouratam 17 saris - nyyas manas

haryi saris - nyyas - ka - mid 1: 2 ' buddha'mam

buddha'tam 3 3 . 5 . 14 之 知 意 . W . 諸 40

来 知 意 之 相 . T . 諸 仁 体 性 .

3 4 へ へ ト 記 12 : : 2 2 3 3 5 11 12 (tam - no

hria - ka) と 3 3 .

「五七」四種の平等について

(五) そのとき、また、菩薩・摩訶薩マハ

ーマテ、は、世尊につぎのようになつた。

―世尊は集會のなかにあつて、いかなる

ゝとを密意して、^①（つぎのようにな）言葉を

説きになつたのである。―私は過去一切諸

仏にあり。また、私は、すまじまの本生^{ジャリカ}、す

なわち、これ、これのとき、マインダートリ王

象・鸚鵡・インドラ・ウイヤーサ・スネート

ラであつた。なにと、世尊は百千の本生をお説きになりました。

世尊はいった。

— マハーマテ、よ、四種の平等性を密意

して、諸如来・阿羅漢・正等覺者は集会のな

かにあつて、つきのような言葉をのべた。す

なわち「私は、それ、これのとき、に、クラクツ

チャンダ・カナカムニ・カーシユヤパであつ

た。と、四種の平等性を密意してとはとうい

う、こゝか。すなわち、(一)文字の平等であるこ

と、(二)言葉の平等であること、(三)法の平等で
 あること、(四)身体の平等であること、である。
 マハーマテイよ、これらの四種の平等性を密
 意して、諸如来・阿羅漢・正等覺者は、集會
 のなかにあつて、この言葉を説いたのである。
 このうちで、文字の平等であることとはど
 ういうことか。すなわち、新の名称は文字に
 よつて *ka-u-d-d-na* といわれるが、これらの同じ
 文字によつて、かれら諸仏世尊も(よばれる)
 マハーマテイよ、これらの文字は、文字の自

性として區別のないものである。^⑤ マハーマテ

イよ、これが文字の平等であることである。

このうちで、マハーマテ、よ、諸如来・阿

羅漢・正等覺者の言葉の平等であることとは

どういふことか。^⑥（一七）すなわち、私にも六

十四種の梵の音声・音調・音響の言葉の妄分

別^⑦があり、また、マハーマテ、よ、かの諸如

来・阿羅漢・正等覺者にもまったく同じく六

十四種の梵の音声・音調・音響の言葉の妄分

別^⑧があり、（それらは）カラウグン^⑨がと梵の

別	相	い	て	教	諸	で		不	音
で	・	る	そ	道	如	あ	、	増	声
あ	（	ゝ	れ	す	来	る	の	・	・
る	ハ	と	そ	る	・	ゝ	う	不	音
。	十	を	れ	カ	阿	と	ち	滅	調
	種	の	の	に	羅	と	で	で	・
	の	そ	と	操	漢	は	、	あ	音
	）	い	ゝ	り	・	な	マ	リ	響
	随	て	ろ	衆	正	に	ハ	、	を
	好	、	に	生	等	か	一	無	自
	相	法	い	の	覚	。	マ	差	性
	は	身	ま	趣	智	す	テ	別	と
	平	と	ま	の	は	な	イ	で	す
	等	（	な	区	、	わ	よ	あ	る
	で	三	形	別	た	ち	、	る	こ
	あ	十	を	に	だ	、	身	。	と
	り	二	示	し	諸	私	体		に
	、	の	し	た	如	と	の		よ
	無	）	て	が	来	か	平		っ
	差	色		フ	が	の	等		て

このうちで、マハーマティよ、法の平等で
あることはなにか。すなわち、かれら（諸
如来と）私とは三十七の菩提分の諸法を証得
するにとである。

マハーマティよ、これらの四種の平等性を
密意して、諸如来・阿羅漢・正等覺者は、集
会のなかにあつて（先のような）言葉を説い
たのである。

このことに關してつぎのようにな説かれる。

私はカーシユヤパであり、クラクチュンダ

7. あ り 、 カ ナ カ ム ニ デ ある と 、 平等性 に も
と づ け 我 々 は 諸 仙 子 の た め に 説 く 。 (六)

【 言 語 】

1) samakāya, dgaris. 密意而。

2) catur - vidhāni samatāni, mātubhis - pa mām - na
kahi. 四 種 平等。 1. 四 種 平等。

(3) 1) akāra - samatā, 2) vāde - samatā, 3) dhama -

samatā, 4) tēya - samatā. 7th. 1) vi - ge mātubhis - pa,

2) gauri mātubhis - pa, 3) chas mātubhis - pa, 4) apa -

mātubhis - pa. 2. 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.

(四) 身等
W
U
字等
二
語等
E
語等

等、
(四) 身平等。
丁、
(一) 字平等。
(二) 三〇平等、

(四) 正平篆。

(7) brahma - anta - ghaia - nāg - vikalpa,

option of man - her - stop - he again man - he drug -

to see
like
motorists - pain
eyes ahead
tears
obvious.

S、
 梵音言語相生。
 W、
 微妙梵聲言語從茲。

丁、
林
音
声
注。

〔五八〕一字不説について―不立文字(五)―

また、マハーマテは言つた。

―世尊は「如来が正覺した夜から涅槃に

入るまでのあいだ、如来はただの一字をも説

かなかつたし、また、説かないであらう。(

三) 言葉で説かないというところが仏の言葉で

ある。とお説きになりました。いかなる」と

を密意して、如来・阿羅漢・正等覺者は「言

葉で説かないという」とが仏の言葉である。

とお説きになつたの、すか。

世尊は、たえた。

— マハーマテ、よ、私は二つの法を密意

してこのことを説いた。二つの法とはなにか。

すなわち、自内証の法性、^③本住の法たる性^③で

ある。マハーマテ、よ、この二つの法を密意

して、私はこのことを説いたのである。この

うちで、自内証の法性を密意するとはどうい

うことであらうか。それは、かの諸如來が証

得し、私もまた証得した、増すこともなく減

るゝともなく、言葉の妄分別をはなれ、文字
 と二つの領域をはなれた自内証の境界である
 のうち、本住の法性とはなにか。すなわ
 ち、マハーマテ、よ、この本住の法性の道は、
 金・銀を産出する鉱山のごとくである。マハ
 ーマテ、よ、法界は常住なものであり、諸如
 来が出世しても、あるいは出世しないとして
 も、これらの諸法の法性・法の常住性・法の
 決定性は、マハーマテ、よ、ふるい町の道
 のよ
 うに存するのである。たとえは、マハーマテ

ー よ、ある人が荒野のなかをすまよっていて、
 完全な道がなかに通いている町を見てその町
 に入り、その町に入つて住み、町の仕事と楽
 とをうけるごくである。(三六) マハーマテ
 ー よ、あなたはどのようになかえるか。その町
 へ通いている道とすまよな町とは、その(一
 荒野をすまよっていた(二)ひとによつて作られ
 たものであるか。
 (マハーマテ) は(三)ゝたえた。
 ー いいえ、そうではありません。世尊よ

世尊は言つた。

—— まつたく同じように、マハーマテ、よ、

私とかの諸如来の証得したのはまさにこの常

住である法性であり、法の常住性であり、法

の決定性であり、真如であり、実性であり、

真実性である。それゆえに、マハーマテ、よ、

この理由によつて、私は如来が正覺した所

から涅槃に入るまでのあいだ、如来はただの

一字をも説かなかつたし、また、説かないで

あろうと説いたのである。

このいゝに關してつぎのうに説かれる。
 正覺した夜から涅槃に入るまで、そのあい
 だに、私の説いたいゝとはなにもない。(七)
 自内証の法の常住性を密意して私は説く。
 諸仏と私とはどんな差別もない。(八)

〔譯〕

(一) anācāraṇī buddha - vacanāni, taking - med - pa ni
 āraṇī - nayaṇaṇi teṇi taking go. 5. T. 不説是仏説。
 W. 仏言非言。

(2) paṭyātana - dharmatā, se - se nani teṇi chao - nīd. 5.

緣自得法。 W. 自身內証法。 T. 自証法。

(3) pausana - dharma, ariya gyi lung tsyi chos - rid.

S. W. T. 本住法。

(4) akhara - gati - dhvaya - vishva mukham, yī - ge dhar

gyi tsyi gul las nam - par - grol - pa. W. 離字 =

趣。 W. 離 = 種字。 T. 離名字相。

(5) anapadyātma - gati - garāha, so - so nai gis rig - pañ

apad - gul. S. 緣自得法究竟境界。 W. 自身

內証諸境界行。 T. 証智所行。

(6) 原文

dharmatāname 12 Til. chos tsyi lam tidi m.

あゝいふ 古先聖通。W 本行路によつて

dharma + vartana 3 1 2 読む。鈴木博士も

ancient road of reality (p. 124) と同様 12 読む

2. あらゆる。泉記の本来わかりの法性三有

あゝ (ハニキー)。

(2) Til. 16 sam 3 dā 3 2 dharma nam 3 2

2 1 3 。

(3) dharmānām dharmata dharmā - sthita dharmā -

niṣṭhata, dhas + nid dai dhas teṣi graṣ - nid dai

chos mi - tgyur - ta. 12 法界常住。W 法

性法界法住法相法証常住。
丁、法住法位、

〔五九〕一切諸法の有無の相について

そのとき、また、菩薩・摩訶薩マハーマテ

は世尊に請うた。

―世尊よ、私に、一切諸法の無と有との

相をお説きください。それによって、私と他

の諸菩薩・摩訶薩は無と有とをはなれ、すみ

やかに無上の正等覺をうるでありますよう。

(へん) 世尊はうたえた。

―それならば、マハーマテ、よく聞

きなさい。よく聞いて、くくろにとめなさい。

私はあなたに説くであらう。

―かしこまりました。世尊よ。

といって、菩薩・摩訶薩マハーマテイは世尊

(の言葉)に耳をかたむけた。

世尊はつぎのうに言った。

―マハーマテイよ、この世間は二つのも

のに依存している。すなわち、有に依存し、

また、無に依存して、有と無とについて欲

見におちいり、解脱していないのに解脱して

いると考へる。

このうち、マハーテイ、よ、どのようにし

て世間は有に依存してゐるのであらうか。す

なわち、世間は現存してゐる諸因・縁によつ

て生ずるのであつて、現存してゐない（諸因

縁）によつてではなく、現存して生いつつあ

るものが生ずるのであつて、現存してゐない

もののが（生ずる）のてはないとするにとあ

る。マハーテイ、よ、かれは、このように、諸

存在は有の因・縁をもつもののであるといふの

であるが、これは世間の有因を説くもので
 ある。
 このうちで、マハーマテ、よ、どのように
 して無に依存するのかわち、貧・瞋・
 癡を認めて、さらに貪・瞋・癡の存在は無で
 あると妄分別する。マハーマテ、よ、存在の
 相は寂靜であることによつて、諸存在の有で
 あることを認めず、また、存在の相は寂靜で
 あることによつて、仏と声聞と縁覺には貪・
 瞋・癡は認められない（とし、それらの貪・

瞋・癡は）存在しない（とするのである）。

このうちで、マハーマテイよ、消滅するも

の²とはなにか。

マハーマテイは、たえた。

―世尊よ、貧・瞋・癡を認め、しかも

知らないものが、かの（消滅するもの）です。

（¹）世尊はいつた。

―よろしい、よろしい、マハーマテイよ。

あなたはそのようにいうことは正しい。マハ

―マテイよ、貧・瞋・癡の有・無によつて消

滅するものとなるのみならず、仏・声聞・縁
覓もまた（消滅するもの）である。どうして
であらうか。諸煩惱は内的にも外的にも不可
得であり、また、異であつて異でないものだ
からである。マハーマテ、よ、実に、貪・瞋
癡は実体性のないものであるから、内的にも
外的にも不可得である。マハーマテ、よ、貪
瞋・癡の存在は不可得であるから、仏・声聞・
縁覓もまた消滅するものである。かの仏・声
聞・縁覓は、束縛されるもの、束縛するもの

とかないのであるから、自性として解脱して
 いる。⑤ マハーマテ、よ、もし束縛されるべき
 ものがあるとすれば、束縛するものと束縛の
 因とがあることにならう。マハーマテ
 'よ、もしこのようにいふならば、消滅す
 るものとなるであらう。マハーマテ、よ、こ
 れが無と有の相である。そこでマハーマテ、
 よ、このことを密意して、私は「無と有とに
 ついての増上慢のもの、空見よりも、スベ
 ル山の大きな我見の方がましである。⑥」と説

いたのである。マハーマテイ、無と有とに
 ついて増上慢をもつものは、まさに消滅す
 るものである。(か)れは()そのく、ろが自相
 共相の見におちいて、自心所現のみで
 あることを^⑤知らず、^⑤知らないく、よって外
 的な存在は常である^⑤と見、それゆゑに、^⑤蕚・
 界・如は、刹那に相互に異なつたものとなり、
 分別と文字とはなれたものであるが、^⑤相統
 して生いては滅する^⑩のであると(き)妄分別
 するから、消滅するものののである。

このことに関してつぎのように説かれる。
 心の領域があるかぎり、無と有との二辺が
 あり、（この）領域が滅すれば、心は正し
 く滅する。（九）
 対象を取ることがないのであるから、滅と
 はなにもないということではなく、
 の境界のように、真如の実事があることとで
 ある。（一〇）
 もと無であって生じ、生じあわってまた滅
 し、諸縁によつて有と無があるとするもの

たち、かれらは私の教えのなかにあるものの
 ではない。(――)
 存在が成立するのは、諸外道によつてで
 なく、諸仏によつてでもなく、私によつて
 でもなく、いかなるひとによつてでもなく
 て、ただ諸縁によつてである。どうして無
 となることがあろうか。(――三)
 諸縁によつて無があるとするところのたれ
 によつて、有が成立するのかわ。生を説く要
 見によつて無いであり、有であるとき妄分別さ

れるのである。

(一三)

もし、なにもものも生ずることなく、また、
 なにもものも生じないとするものがあれば、
 そのものにとつて、有と無は不可得であり、
 世界は寂靜である^⑬と見るからである。(一

四)

(註]

(i) *māty - astita - lakṣaṇam āvṛta - ākṣaṇa -*

śāśa bhāva - ead teṣaṁ yad - ya dani med - paṇi' atāṣam - vid.

一切法有無有相。W. T. 一切法有無

相。

(2) *vaiṇāṣika*, *mam - par - iṅg - par tṛṣṭ - ra*. S. T.

壞者。W. 墮於無見。

(3) 原文 - *mahābhāṣanāṃ* は林本一四六八一の註

8 T 11 2 1 *māhā - bhāṣanāṃ* とする。Tib.

gṛ - mṛg gṛ dīśa - ra mām.

(4) *prāpiti - vīṃśatā*, *vai - bhūm gṛh mām - par - gṛ - ta*.

S. 自性解脱。T. 本性解脱。

(5) 原文 *vaiṇāṣika bhāṣati* 3 Tib. は *mām - par - iṅg -*

par tṛṣṭ - ra *ma gṛh no* 3 とする。S. 如是說壞者。

W. 名滅諸法。T. 為壞者。

(2) *nam sel du numen - mātā pudgala - dhātva na*

tu eva nāty - aśīta - aśīmānīka ya sūnya-dhātā,

gani - gag du lta - ta ni - rat - taam gani lta yi yod - pa

dani med - pañi rgyal - can gyi stori - pa - mīd du lta - ta

ni ma gyan. s. 寧取人見如須彌山、不起無

所有增上慢空見。W. 寧起我見如須彌山、

而起憍慢、不言諸法是空無也。T. 寧起我

見如須彌山、不起空見懷增上慢。二の經云

は、曰大空積經。大正一一・六三四・上

い 3 か 二 二 2 12

Til. ... atog - ra dari - yi - ge med -

ra la rgyud tseyi rgyur gyis . お 2 二 5 陰 界

入 相 続 流 注 變 滅 離 文 字 相 妄 想 11 2 3 。

⑩ 原文

vinividyā vinivāntante 12 Til. rgying cini dlog.

ト 相 続 流 轉 起 已 還 滅 11 2 2

pravīṭya

vinivāntante 3 1 2 読 む 。

⑪

miokha na ca nāsti ca, tīgag - ra med - ra ma yin.

ś 滅 非 無 所 有 。

W 滅 非 有 非 無 。

滅 無 所 有 。

⑫

vidyate tattatā - vāstu, de - bhūmī - mīd tseyi gwa yed

do. S. 有事悉如如。 W. 如真如本有。 T.

有真如妙物。

13) V. 12. 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.

縛 解脱 対 伺 察 二 (解 脱)

gami - pa las yod - pa dari med - pa dari tchiu - sa

dari nam - pa - yod - sa ophyad - pa gwi so, 1234.

2) 3 4 5

「六〇」宗通と説通について(一)

そのとき、菩薩・摩訶薩マハーマテは、
また世尊につきのように請うた。

― 世尊よ、スガタよ、如来・阿羅漢・正

等覺者よ、諸説者中の最上のお方よ、私に

(あゝ) 宗通の相をお説きください。その宗通の

相をよく知れば、私と他の諸菩薩・摩訶薩は、

宗通の相に通達し、すみやかに無上の正等覺

をえ、すべからず分別論者・外學者たちによつ

て道されることの無いものとなるであります
よう。

世尊はうたえた。

— それならば、マハーマテ、よく聞

きなさい。よく聞いて、よく聞きなさい。

私はあなたのために説くであらう。

— かしこまりました。世尊よ。

といて、
菩薩・摩訶薩マハーマテ、は、世

尊のうたへに耳をかたむけた。

世尊はつぎのようにつづけた。

― マハーマテ^イよ、すべての声聞・縁学
 仏・菩薩の宗通の相には二種がある。すなわ
 ち、宗通と説通⁽²⁾である。

このうち、マハーマテ^イよ、宗通とは、自

内証のすぐれた相をもつものであり、言葉の

妄分別と文字をはなれ⁽³⁾、無漏の界をえたものの

であり、自内証の領域たる地を自らの相とし、

すべての外学者・マハー^イをはなれたものであ

る。これによれば、かの外学者とマハー^イ

を破って自内証の領域がかか^イやき出すマハー

一 マテイよ、これが宗通の相である。

このうち、説通とはなにか。すなわち、

それは、九分教の種種な教説であつて、異不

異・有無の偏見をはなれ、たゞみな方便にも

とづいて諸衆生を教之のなかに入れ、もしそ

れを信解するものがあれば、たゞにたいても、

それが説かれるであらう。マハーマテイよ、

これが説通の相である。くのゝとについて、

マハーマテイよ、あなたと他の諸菩薩・摩訶

薩は修行を行なうべきである。

(149) このことに関してつぎのように説か
れる。

宗と通とは自内証の教説であるとい、よく
知るものは、分別論におちいることはい

(一五)

凡またちによつて妄分別されるような真実

の存在が存しないとき、どうして、無によ

つて解脱があることを、分別論者たちは求

めないのであるうか。(一六)

有為を観察すれば生・滅に束縛されてい

が、（かれら分別論者たちは）二見を助長
 させて、（そのことを）見ない。（かれら
 は）顛倒してゐるからである。（一七）
 世間は芭蕉・夢・幻のやうに妄分別された
 ものであると見れば、ただ一つのみの眞実、
 すなわち意をはなれた涅槃があるであらう。
 （一八）
 貪もなく、瞋も癡もなく、プドガラムなく、
 諸蘊は渴愛から生じて、夢のやうなものと
 して存在する。（一九）
 （八）

〔註〕

〔一〕
 si dda anta - maya - kaccāna, gubb - pañi mthālin'
 tthul pi mthān - mid. S. 宗通相。W. 建立
 修行正法相。T. 宗趣之相。

〔二〕
 niddhānta - mayas ca deṇāna - mayas ca, gubb -
 pañi mthālin' tthul dai sād - pañi tthul. S. 宗
 通及說通。W. 一者建立正法相。二者說建
 立正法相。T. 宗趣法相。言說法相。

〔三〕
 vāg - vīdāya - ākāra - mātitaṃ, tathā gi nān -
 pañ - ntag - pa dai pi - ge med - pa. S. 遠離言說文

妄想。W、離文字語言章句。T、離於文字

語言分別。

(4) pratyakṣa - gati viṇīṣate, so'no nani gīṇig - ya

manam - na - mades so. S、緣自覺趣光明晦察。

W、顯示自身內証之法如實修行。T、生智

慧光。

(5) mana - āṅga - kāṁsa - vicita - upadeśa, katan - naḥ

yan - laḡ dḡṇa sma - tḡḡṇaṇ m āśad - ya. S、W、

T、九部種種教法。口あ3とのには九分2

あり、jāḡḡḡḡ, āśadāna, mīḡḡḡḡ は現在過去

の標識を、理解するからある。
と、12は、+ = 今經へを説く。すなわち、

nītra, geyā, vyākaraṇa, gāthā, adāna, nidāna,
avādāna, (ことばの道から道から
ことばの道から) 普通は

de - lta - na kyūi - tahi' ade = itingata ことばの道
ことばの道) jātaka, vaipulya, abhuta,

dharmas - de'ana ことばの道 (Vitti. 133. 1-3)

(2) ²⁵ ₁₂ akadali - akadla - māyā ことばの道
akadla - vāpna

māyā ことばの道 cf. Sugatei. p. 129, n. 1.

⑦ ニのハ個全体の読み方は *Yoku*. による。

⑧ *Yoku* は . : : マニヨ *ヨ* 三品中、成文竟相

分別 (*niddu anta mayanithaga*) に関する同察

クニヨ (*leim qum - pa las quut - paio' mthalaio' tokul*

mum - pa - tityed - pa dpyad - pa qum - paio . 135. 1.4)

とす。

「六一」虚妄分別と唯心について

そのとき、菩薩・摩訶薩マハーマテは、

また、世尊に請うた。

― 世尊よ、私にお説きください。スガタ

よ、私に虚妄分別の相^①をお説きください。世

尊よ、どうして、どのような、だれによって、

だれに、虚妄分別が生じて活動し、虚妄分別

が虚妄分別といわれるのでしようか。世尊よ、

いかなる法に虚妄分別という名称があるので

すか。あるいは、いかなるものを妄分別する
から、妄分別なのでしょうか。(150)

世尊は、うたえた。

— よろしい、よろしい、マハーマテ、よ、

よろしい。マハーマテ、よ、あなたは、多く

の衆生を利益するため、多くの衆生の樂の

ため、世間をあわれむため、大きな衆生のあ

つまりのため、また、諸天と諸人の利益と樂

のため、うにあって、うの問うべきこと

を考えた。それならば、マハーマテ、よ、よ

人々は所取と能取に執著し慧によつて（この
 が生じて活動するのである。マハーマテイよ
 七種種に虚妄分別して執著するから、妄分別
 一マハーマテイよ、種種な対象にたいし
 世尊はつぎのようにつづつた。
 のことばに耳をかたむけた。
 といつて、菩薩・摩訶薩マハーマテイは世尊
 一かしこまりました。世尊よ。
 一。私はあなたのために説くであらう。
 一。聞きなさい。よく聞いて、よく聞
 いて、よく聞

一切は、自心所現のみであることを確証する

ことなく、有・無の見解におちいり、外学者

の見の妄分別の習気が増長して、外的な種種

の対象を（実在として）とって執着し、我・

我所に執着するから、妄分別といわれる心・

心所の群が現起し活動するのである。

マハーマテは言つた。

――世尊よ、もしそうであれば、種種な対

象にたいして種種に虚妄分別して執着する、

とによつて、人々の妄分別は生じて活動し、

有・無の見解におちいつて所取・能取と外学
 者の見の妄分別の習気が増長し、^(五) 外的な
 種種の対象をとつて執着し、自心所現のみで
 あることを覺知することなく、有・無の種種
 の存在に執着するから、妄分別といわれる心
 心所の群が現起して活動するでありましよう
 世尊よ、たとえば、外的な対象の種種な相は
 有・無の見解におちいつた相であるが、有と
 無をはなれ、邪見の相を滅したものであるよ
 うに、まったく同じように、世尊よ、第一義

は量・根・支分・喻・因の相をはなれたもの^⑤
 であるとし、世尊よ、どうして、あるところ
 では、虚妄の種種な対象を有・無^③として執着
 し妄分別するから種種の妄分別が生ずるとし、
 しかも、第一義の相に執着し妄分別しても妄
 分別は生じない、とするのですか。一方では
 生ずるといい、他方では生じないというなら
 ば、あなたには不正の因を説く、とになつてし
 まうでしやう。有・無の見解に依存し執着し
 て、虚妄の妄分別見が生ずるといふならば、

種種の幻を支分とする種種の人をつくつて一
 つの形態のものとするようにな、妄分別によつ
 て種種の相をもつ存在・非存在をそれそれ妄
 分別しつゝ、しかも妄分別が滅するといふこ
 とになるでしよう。したがつて、このよう
 であれば、世尊の説は「ローカーヤタのあや
 まつた主張におちいつてしまふではありませ
 んか。」

世尊はくたえた。

— マハーマティよ、
 実に、妄分別は生じ

もし、ないし、滅しもしない。どうしてある
 うか。するわち、マハーマテイよ、妄分別は
 有・無より生ずることにはなく、
 され、いる存在は無であり、
 あることを覺知することによつて、
 別は生じもしないし、滅しもしないのである
 た、たし、マハーマテイよ、凡夫たちにはないし
 ては、自心の種種な妄分別によつて妄分別し、
 種種な存在の相に執着することによつて、果
 し生ずることにもとづく妄分別が生ずる、
 (10)

と私は説くのである。マハーマテイよ、それ
 によつて、^⑤凡夫・異生のものたちは、自心所
 現のみであることを覺知し、我・我所の見を
 滅し、果と因と縁の誤を滅し、自心のみであ
 ることを覺知して心の所依を転じ、すべての
 地に通達し、五法・（三）自性・事・見・妄
 分別を滅した如來の自内証の境界を^⑥うるであ
 る。それゆえに、マハーマテイよ、この理
 由によつて、私は「妄分別は、虚妄である種
 種な対象に執著する」とによつて生じ、自ら

の種種な妄分別の対象について如実に知る、
 とによつて解脱すると説くのである。(3)

このことに関してつぎのようにな説かれる。

世間は諸因と諸縁によつて生ずるとして、

四辺に執着してゐるものたちは、
 我らの教え

を知らない。(ニ〇)

世間は、どこにおいても、凡夫たちが諸因

縁によつて妄分別するようにな、有としてモ、

有としてモ、有であつて無であるものとし

ても生じない。(ニ一)

世間は有でもなく、無でもなく、有であつ
 て無であるものでないとき、(15)
 心は止滅して、⁽¹⁶⁾無我が証得される。(= =)
 すべての存在は、^縁から生ずるものである
 から、不生である。⁽¹⁵⁾すべての縁は果であり
 果より存在は生じない。⁽¹⁶⁾(= =)
 果より果が生ずるゝとはない。(もし生ず
 るとすれば)果に二つがあるゝとにな
 るであらう。⁽¹³⁾二つがあるゝとは誤りであ
 るから、
 果より存在はえられな^い。(二四)

有為のものは能縁と所縁をはなれていると

見るとき、無心の心のみであり、(これを)

私は唯心と説くのである。(=五)

唯 (mañā) とは自性處であり、諸縁と存在を

はなれた、⁽¹⁹⁾ 究竟的な存在であり、最高の梵

である。⁽²⁰⁾ これを、私は唯というのである。

(二六)

アートマンは実に仮設の真実としてあるの

であって、⁽²¹⁾ 実体としてあるのではない。同

じように、諸蘊の蘊たる性は仮設によつて

あるのであつて、
 実体としてではた
 い。(21) (ニ

七)

諸修行者には四種の平等性がある。
 相と因

と器世間と⁽²³⁾第四は無我の平等性である。(

二八)

すべての見を滅し、
 所分別と能分別とをば

なれ、得ることなく、
 生ずることもない、

と、それを私は唯心を説く。
 (ニ九)

有でもなく、
 無でもなく、有であつて無で

あるものはなれ、
 同じように⁽²⁴⁾心⁽²⁵⁾をはな

れたもの、それを私は唯心と説く。(三〇)

(一五) 真如・空性・(実) 際・涅槃・法界

種種の意生身と、私は唯心と説く。(三一)

妄分別と習気に縛られた種種なもの、心

から生ずるが、人々には外的なものとして

あらわれる。これは世間的な唯心である。(三二)

(三三)

外的にあらわされてゐるものは(実には)

存しない。心は種種にあらわれるのである

る。身体・資具・住処は唯心である。私は

説く。(三三)

「言」

(1) abhūta - kavīṇaḥ paśyaḥ kṛteḥ anām, nyan - dag - pa ma -

nyin - paḥ yorin - an - dag - paḥi mṛtaḥ - mid. m' 不

妄想想相。m' 不妄想想心。T. 虛妄分別相。

(2)

artha - nirvīḍa - vicīṭa - abhūta - kavīṇaḥ pa - abhūta -

minvīṭ, der nam - paḥa - dad - pa ma - teḥ paḥi nyan -

dag - pa ma nyan - paḥi nam - antag - paḥa anīṇ - paḥi -

pas. s' 種種義種種不妄想想計著。m' 種

種虛妄法生。T. 於種種境不能了達自心所

現。

(3) avacittacharya - anava dhārita - mati, nani gi nemi

anani - ta - nam du ma - ntag - pali' slo - cam. 不

知自心現量。W. 入自心見生虛妄想。T.

不能了達自心所現。

(4) citta - caitta - realāpo vikalpa - samāśrīta, nam -

par - ntag - ka nes - agraś - pa nemi dai nemi - las - tyani -

ta nani - po. 心 心 數 妄 想 心。W. 虛 妄 心 心 數

法。T. 心 心 所 法 相 想。

(5) Tā. 20 - 20 - nam - par - ntag - pali' tag - charys 二 七

2 vāṇa 3 oḥaṇa

(3)

paramārtha - paramāra - indriya - asyava - dīpānta -

rota - lakṣaṇa - vīṇīṇīṭṭāḥ, don-dam-ra nari tādā-

ma dari dari-ro dari cha - las dari dpe dari ngyuṇa

mtāṇa - and las mām - pa - bylog - pa. S' 才一義亦

如是 離量 限分 譬喻 因相。 W. 才一義諦亦 廣

如是。 遠離 阿含 聖所 說法。 遠離 諸根。 遠離

建立 三種 之法 譬喻 因相。 T. 才一義諦亦 後

如是。 離諸 根量 宗因 譬喻。

(2)

Tā. dīpa-ro nyal - pa dari med - pa. 1: 2 2 2

S. 事業在前種種妄想。 W. 分別種種隨先

心。

(11) 原文

saetham, ji-thar na 12, yena, or yathā の意

味 12 解 了 入 付 2 了 了。

(12)

tathāgata - anapadyātma - galigotaram pañca - dhama -

avahāra - vata - dhiti - vikalpa - viviviviti, de-bhāva-

gāya - pa - day gi - so - so vani gi nig - pala' apyod - gul

chaos bina dani vani - kakin dani dived - po dani lta - ta

dani nam - par - itag - pa ltag - pa. S. 空 意 明 解 一

切 如 來 自 覺 境 界, 離 五 法 自 性 事 見 妄 想 心。 W.

善知諸仏自身所行内証境界。轉五法体見分
相入如來地。丁、入仏境界、捨五法自性諸
分別見。

⑬ *√ nta* は、二二五二五 四 虚妄分別無の義を

伺察す 了 四 〇 (*nyai-deg-ra ma yin-ra abes*

nyoi-ra nlog-ra madoi' (med-paki?) don du dpyad-

pa adhi-kalo. 136. 3. 6) 了 了。

⑭ *nyāvantate cittam, sams tayan nam-nlog.* 心・丁、

心 轉 W は 轉 於 虚ニ 心 と する。

⑮ *anulpanna, ma- dpyed-ra.* 不生。

(16) □ それらの縁から生ずるもの、それらは

生じあり、夢・幻などのようなものである。

すべし縁は果であり、果より存在は生

じないしとは、夢と因と果の存在の相續す

るに、ある。□ (Vitti. 136, 5. 1-2)

(17) □ もし、果より果が生ずるならば、同時に

あるという誤り (ekam-ig-palī apyā) となる

であらう。□ (Vitti. 136, 5. 3)

(18) 原文 miscitam citta - mātaram 12 Tib. sems - med -

pa mi sems - taam ste, Vitti. sems med - palī sems - taam

ste. \$, 無心之心量による。2 無心の心の

み ✓ と 読む。原語は、おとく miscellane 2.

あ 3 i 2 推定され3。T は決定唯是心とし

2 梵文に同じ。

19 原文

pratyagair bhava - varjitam は Tib. ngeyen dani

dias - ye aprais - ya ste. \$, 縁性 = 俱離。M. 縁

縁及諸法。T. 縁法 = 俱離による。2

pratyaya -

phāsa - varjitam とする。

(20) mistha - svarāḥ parama bhāva, mitha - bhūg dias -

ye tathā - yāni mady. \$, 性究竟妙淨。M. 究竟

竟有真淨。ト、究竟妙淨事。曰、のうちで、

フ、フ、マンとは、不二の自性をしつ不二の

(1) (gnis - an med - pañi' rai - ldon mi - gnis - pañi'

sems) という意味である。 (V. 139. 2-3)

ニ、ア、四、言、の、解釈、に、よ、る、漢訳諸本にお

い、二、フ、ラ、フ、マン、を、真淨、と、妙淨、と、訳、し

た、は、二、元、論、的、見、解、が、清淨、と、な、る、状、態

と、解、し、た、こ、の、理、解、さ、れ、る、。

(2) prapñciti - satyato hy atma, lden - pañ - dag mi

satya - pañ - ste. 5. 施設世諦我。 W. 俗名世

諦我。T、施設仮名我。

是曰我は仮説としてあるのである。

しゝあるのではない。同様に、諸蘊のサ體に

る本性も仮説としてあるのである、
實體

は無である、
というのはい、一である、異で

あり、常である、
偏在することと自性とす

る微細なアートマンというのか妄分別され

たアートマンであり、
（それは）認められ

ない。凡夫・異生のものは、
ただ心の相續

をアートマンとして妄分別する。
諸サ體もまた

た夢・幻・眼翳・幻視・色像をこのように
所取と能取の存在は生じないのである。

(Vitti. 137. 2. 3-5)

②原文 *Ekavā-jā* 3 Tel. 17 そのまま *drives - no*

has again 3 詠 1 5 7 性 生 1 2 1 3

か 1 1 2 は Vitti 所引 の 経 文 に *A mud = bhayāna*

と あ り Vitti は 日 器 世 間 と は 種 種 な 世 間

9 1 2 2 あ る 0 (137. 2. 7) 3 4 2 2 3 11

2 3 鈴木博士は 草之の *bhāyāna* 3 = coming

into existence " と 詠 1 2 あ ら 3 か (p. 133) "

sems - tram. 是世俗心量。Vatti. sems - tram

de m. sems - pa - nlog - pa (138.1.2) (一の唯心

は辛分別である)

28) Vatti は二にまをて 三品に於て、虚妄分

別を伺察する中の標偈を釈するに當り、識

論の中(通)を決定するに五の(138.5.1)

と 12 いる。Vatti. 2. 4 の偈文のみを取

り上げ 2 一 12 と 12 釈して 12 12 は、

山口益博七、前掲論文、一三三ページ参照。

1920

ハ六ニ」菩薩は義にしたがうべきである、

とについて――不立文字(六)――

そのとき、菩薩・摩訶薩マハーマテイは世

尊につきのように言った。

――世尊はまた、――諸菩薩・摩訶薩、およ

びその他のものは、言葉によつて義をとつて

はならない^レとお説きになりました。そこで、

世尊よ、どうして菩薩・摩訶薩は言葉によつ

て義をとつてはならないのでしようか。なに

なにか。すなわち言語と文字とに結合した妄
 分別^③であり、鼻・頸・口蓋・舌・唇・口腔か
 ら生ずる相互の談話であつて、妄分別の習氣
 を因とするものが、言葉といわれるのである。
 このうち、マハーマテイよ、義とはなにか。
 すなわち、(154) 菩薩・摩訶薩は、ひとりで
 静かなところにある、聞・思・修より成る般
 若によつて涅槃の道におもむき、みずからの
 慧によつて習氣の所依を転捨し、自内証の境
 地である地のなかにあつてすぐれた義の相の

領域を行ずるとき、義に通達したものとなるのである。

また、マハーマテイよ、言葉の義に通達し

た菩薩・摩訶薩は、「言葉は義と異なるもの

であり、異なるものではない」と観察し、

また、「義は言葉と異なるものであり、異

ならないものである」と観察する。

た、マハーマテイよ、もし、義が言葉と異なる

ならば、言葉は義をあらわす因ではない。

とになるであろう。しかし、義は言葉によつ

て理解されるのである。あたかも、灯によつ
 て賤宝が（明らかにされる）ように、
 えは、マハイマテイよ、あるひとが、灯をとり、
 賤宝を見て、「これは私の賤宝だ。これらのも
 のが、このところにある。」というように、マハ
 イマテイよ、言語の妄分別のことは、という灯
 によつて、諸菩薩、摩訶薩は言語の妄分別を
 はなれ、自内証の聖なる境界に入るのである。
 また、マハイマテイよ、不滅・不生・自性
 涅槃・三乗・一乗・五法・心・（三）自性な

どについて、言葉によつて義をとるゝとに執
 著するならば、そのものは、建立と誹謗の見
 におちいるであらう。建立したものをあやま
 つて妄分別するゝとによつて、幻より種種の
 ものがあらわれてゐるゝと妄分別するゝとく
 である。たとへば、マハイマテ、よ、(156)
 凡夫たちは、幻によつて種種のものがあらわ
 されてゐると、あやまつて妄分別するが、諸
 聖者は、そうではなゝいゝとくである。
 ゝのゝとに誤してつぎのやうに説かれる。

言葉にしたが、て妄分別し、法性を建立す
 るものがあれば、かれらは、まさに、その
 建立のゆえに地獄におちるであらう。(三
 四)
 諸蘊によつてアートマンがあるのではなく、
 また、アートマンのなかに諸蘊があるのだ
 もない。それらは、妄分別される通りにあ
 るのではなく、また、それらは存在しない
 のでもない。(三五)
 すべての存在に存在性があると、凡夫たち

は妄分別する。もし、かれら（凡夫）が見
 るとありであるとするれば、すべてのものが
 眞実を見るものとなるであらう。⁽⁸⁾（三六）
 一切諸法は無であるうとによつて、煩惱も
 清淨も存しない。それはかれら（凡夫たち）
 が見るとありではなく、また、それらは存
 しないのである。⁽⁹⁾（三五）

【註】

(1)

nyāṭhā - nūta - artha - prakāraṇi na santatyam, āga

śālini āgi don du āgāni - sar mi - āgale .

5

水 10/10

語義。w. 莫著音聲言語之義。T. 不依
語而其義。

(2) rag - aśvāra - saṃyoga - vikalpa, taking dari ṛi -
ger phrad - pati' nam - ra - nāg - pa. s. 言字妄想和
合。w. 言語名字和合分別。T. 語者所謂
分別習氣。

(3) anta - anta - aśvāra - vikalpa, dan gad - van
tyed - pati' rgyur rgya ma ṣṣi mo. s. 不因語并義
w. 不依因彼言語聲。T. 不依因語而顯於
義。

④ vāg - vīdya - nūta - pradiṣa, taking the nam - par -

stog - paṭi - āgāh - mar - me. W. 依言。声。T.

因言。灯。

⑤ : の 部 合 は S の 7 欠 い 2 い 3 。 内 容 的 に

⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

解 釈 L t = ㉖ の 2 あ , 2 , S の 原 本 に は 存 在

な か , た と 推 定 され 3 。

⑧ T id. ches lina. W. T. 五 法 に よ っ て

dhama 3 8 5 4 う 。

⑨ Vitti : de dices - pe dāi ches - pa med - pa

de - kshin na mi, thams - sad tshis yam - dng - ra

authori - tra gia mo (142.2.5)

8
口
一
切
三去
と
は
色
等
21
あ
り
,
能
取
と
所
取
の
た

12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530
 531
 532
 533
 534

6)

9
 1
 12
 1
 2
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40

く
に
義
を
思
惟
す
る
こ
と
の
同
察
す
る
こ
と

gam - pa la agra yi - kabin - pa li' don la do si -

na opod drug go: (42. 3. 5) 3 4 3 0

〔六三〕 智と識について

また、マハーマテイよ、私はあなたに智と

識の相を説かう。その智と識の相をよく明確

に知れば、あなたと、他の諸菩薩・摩訶薩は

智と識の相に通達し、すみやかに無上の正等

覺をうるであらう。

このうち、マハーマテイよ、智に三種があ

る。(一) 世間的な(智)と、(二) 出世的な(智)

と、(三) 出世間の最上の(智)である。

(159) このうちで、生じ滅するものが識であ
 り、生じ滅しないものが智である。また、マ
 ハーマテイよ、相・無相にあちいり、無・有
 のさまざまな相を因とするものが識であり、
 相・無相をまつたく、えた相をもつものが智
 である。また、マハーマテイよ、集積するこ
 とを相とするものが識であり、集積すること
 を相としないものが^智智である。このうちで、
 智には三種があり、(一)自相・共相を確証する
 ものと、(二)生・滅を確証するものと、(三)不生・

不滅を確証するものである。

このうちで、世間的な智とは、有・無の見

解に執着したすべての外学者と凡夫・異生た

ちに属するものである。このうち、出世間の

智とは、そのくくろが自相・共相におちい

て執着しているすべての声聞と縁覚に属する

ものである。このうち、出世間の最上の智と

は、諸仏・諸菩薩に属するものであり、無相

の法を簡扼し、不滅であり不生であるとする

ことによつて、有・無の見解をはなれ、如来

地において無我を証得するにとよつて生ずるものである。

また、マハーマテ、よ、貪著しないことを

相とするものが智であり、種種の対象に貪著

することを相とするものが識である。また、

マハーマテ、よ、三和合の所作の生ずるにと

と相應することを相とするものが識であり、

貪著しないことを相とするのが智である。ま

た、マハーマテ、よ、智は得られないという

ことを相とし、自内証の聖智の境界であつて、

入るゝとなく、出るゝともないものであるか

ら、水中の月のいとくである。

ゝのゝとにいつてつぎのうに説かれる。

業は心によつて集積されるが、智によつて

は集積されない。(ひとは)般若によつて無

相と自在力を証得する。(三八)

心は対象に束縛され、智は推求において生

じ、般若は無相とすぐれた状態において生

ずる。(三九)

心と意と識は、想と妄分別をはなれている。

妄分別の法性をうるものは声聞であつて
 子ではない。(四〇)

如來の智は清淨であつて、寂靜と忍のすぐ
 れた状態にあり、すぐれた義を生じ、諸行
 をはなれてゐる。(四一)

私には三種の般若がある。(四二) それによつて諸
 聖者は(眞實を)明らかにし、それによつ

て相が分別され、そして、それが諸存在を

つつみこむ。(四三)

般若は二乗をはなれ、相をはなれてゐる。(四四)

声聞たちの（智は）実有に執着するゝとに
 よつて生ずる。如來の般若は唯心に入るゝ
 とによつて清淨である。⁽²⁾（四三）

〔註〕

(1) pa'ana - vi'pāna - kapa'ana, ye - hee dani meam - pa -
 hee - pa'hi' mōham - vid. s. w. T. 智識相。

(2) laubhikaṃ loṣṭṭa'ami ca loṣṭṭa'atamaṃ ca, tīgī -
 nten - pa dani tīgī - nten las tīdas - pa dani tīgī - nten
 las tīdas - pa'hi' mōham. s. 世間・出世間・出

世間 上 上 智。 w. 一 者 世 間 智。 二 者 出 世 間

智。三者出世間上上智。T. 世間智。出世

間智。出世間上上智。

③ 原文

apacaya, anī - ta は、W. 子集諸法。T.

無積集相

に、2

anupacaya

と、2 読む。

5 文。

④

ニ、の、ハ、ラ、カ、ラ、フ、ハ、5. T. 2. は、一、コ、の、パ

ラ、カ、ラ、フ、と、入れかわ、2 い、る。

(cf. Sanghatai.)

Trans. p. 135. n. 3.)

⑤ 原文

anī - sangati - seaya - utpāda - yoga - lokaana

Tib. gnam b'dun - pañi' nya - ta abye - ta dai

dan - pañi' mōhan - mid. 5. 4. 2. Vitti. ma - nig - pa
dan a'ed - pa len - pa gaam fidus te, dya - ta mēye -
ta mi' fidus - tañi' mōhan - mid teyi' maam - pañi' -
20 (無明) 受 取 の 三 一 集 . 2 . 所 作 か
生 ず る 如 輪 廻 と 相 と ず る 識 2 あ る) (

144. 4. 5 - 6)

② 草 文 は jñānena ca dīyate. 3 1. 10. 1. 1. Tā.

ye - hes teyia an ni' las maams aaga. W . 智 能 了
分別 . T . 觀 察 法 為 智 と 可 3 か . 5 は 不 採

集 為 智 と 1 . Vitti の 3 1 の 經 文 2 は ye - hes

tegi ni aogi dani kural (智いよゝゝ集めるゝゝ
を離れる) とす (144.5.4-5) 。 11 まは

後者にレたかつた。

⑤ 心とは、身体・資財・位知としてあらわ

れゝいゝアーヤ識とある。 (Vitti. 145.1.2)

⑥ 智は推求におゝて生ずるとは、轉識 (

kiyig - kalin' mnam-par - het-pa, pravitti - vijnana) の

なかから意識 (nyid tegi mnam-par - het-pa, mnam-

vijnana) かゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ (Vitti.

145.1.2-3)

⑨ 思 扱 して 対象 を 縁 じ ない (*ni - dūyā - ka*)

と き 、 無 相 の あ り 、 不 可 思 議 ・ 第一義諦 ・

不 二 の 、 す い ね た 状 態 に お い て 般 若 が 生 ず

る 。 (*Vitti. 145.1.2-4*)

⑩ *Vitti. ams ni tum - gahi - mam - he te* (*145.1.4*)

⑪ 原 文 *vikaḥpa - dharmatām prāpta sūnatā na*

jina - atmagāhi は ' *Tib. mam - pa - rlog - paḥi chas*

thos - pa nam - thos mams te nyag - ras min. W.

声 聞 分 別 法 非 是 諸 仏 、 と 、 *Vitti* と 同 い

で ある が 、 S は 得 無 思 想 法 一 仏 子 非 声 聞 ・ T

は得無分別法仙子非声聞とし2内容的に逆

に記出し2いる。鈴木博士は疑問とすれ2

いるか (Sugawara, Trans. p. 126, n. 3) 、これは意

味の上がりは同じ、2述へ2、3の2、あ

り、その算えか、चित्तकथा - dharmatam pāpā

jīmatrayā na sārākaḥ 3 25 2 25 6 2

は2、2、あ3う。

(2) Vitti. abhi-ba dani byed - kaku' rkyad - kar (= tsañti -

riese) ni aa goi - na goi - du (= tsañottana - eluāni)

steq - kaku' rkyad - kar (gati - riese) no. (143. 1.6 - 7)

思
修
に
よ
3
9
27
あ
3
。
B
(
Ints.
145. 2.2
)

(5) gasa thāvan nīnōth, dīas-ro mēam dāi gāi fīlād-
pāle. 5. 悲 慟 受 性。 W. 能 聞 於 有 無。 T.

開
示
一
切
法
。

有、
丁、
離
於
境
界
と
し
て
the
an-
nals
と
讀
ん

7 ill. Vatti. mai-ta mem-

non amis.
丁、
離
言者
本相
に
し
て
か
う
。

(12)

citta - mātṛa - avatāra, sam - taam la m tīng -

pad ma. S. 超度諸心量。W. 能入唯是心。

T. 了達唯心故。

(18)

原文 mala Tills. dhi - ma med. S. 清淨。W.

T. 無垢による。2 amala 3 了。W. はに

いふを云ふに三品の註中、智の差別の同義。

トコ (leku gsum gyi dāad - pa las nye - kes tse)

tskyad - par dpyad - pa ldum - paio. (45. 2. 8) 3 了

3。

〔六四〕九種の転変について

また、マハーマテイよ、転変を説く外学者
たちの転変論には九種がある。すなわち、(一)

形態の転変、(二)相の(159)転変、(三)因の転変

(四)道理の転変、(五)見の転変、(六)生の転変、(七)

存在の転変、(八)縁顕現の転変、(九)作用顕現の

転変である。マハーマテイよ、これらが九つ

の転変論であり、これにもとづいてすべて

外学者は有・無の見解を生ずる転変論を説く

ので、ある。
 このうち、マ
 ハー・マ
 テイ・よ、
 形態の転変と
 は、すなわち、
 たとえば金
 がさまざまな
 装飾
 につくりかえ
 られるのか見
 られるように、
 形態の変化が
 認められるか
 らである。た
 とえば、
 マハー・マ
 テイ・よ、金
 が腕環・首環・
 卍字など
 につくりかえ
 られて、さ
 まざまな形に
 変化し
 ているのが見
 られるが、金
 それ自身は変
 化し
 ないように、
 マハー・マ
 テイ・よ、同
 いように、
 すべての存
 在の転変が外
 学者たち、あ
 よび他

のものたちによつて因からおゝると妄分別さ
 れるが、それらはそのようではなく、その他
 のようでもない。虚妄の分別にもとづいて、
 たとはば酪・乳・酒・果実が熟するようにな
 虚妄の分別にもとづいて、のようになすべ
 の転変の區別があると思ふべきである。たと
 えば、マハーマテ、よ、くのうに酪・乳・
 酒・果実などの、一つ一つの變化が外學者た
 ちによつて妄分別されるが、しかし、そに
 はいかなる變化も存しない。有・無は自心所

現であつて外的存在は存しないからである。

まゝたく同じように、マハーマテ、よ、凡夫

異生のものたちの自心の妄分別によつて修習

の生ずるゝとが見られるが、(160)しかし、

マハーマテ、よ、たとえは幻・夢のなかに色

像の生ずるのが見られるように、どのような

法も生ずるゝとはなく、また滅するゝともな

い。たとえは、マハーマテ、よ、石女の子の

生・死のやうに、夢のなかで(なにかのもの

の)生じたり滅じたりするゝとのあるごとく

である。

このことについてつぎのように説かれる。

大種・存在・根において、時間・形態の転

変があつて、中有をも含めると妄分別する

ものたちは、智をもつものではない。(四四)

諸仏は、世間は縁起したものであると分別

しない。しかし、この世間は縁そのもので

あり、たとへば、カンダルウアの町のどと

くである。(四五)

「註」

(一) 1) *raṇa bhāna - paṇināma*, 2) *leśana - paṇināma*, 3)

ketu - paṇināma, 4) *yukti - paṇināma*, 5) *dr̥ṣṭi - paṇināma*,

6) *utpāda - paṇināma*, 7) *bhāva - paṇināma*, 8) *pratyaya -*

asthiṅgati - paṇināma, 9) *tenigā - asthiṅgati - paṇināma*.

Tib. 1) *debyids kiyur - ta*, 2) *mtshan - 'mid kiyur - ta*, 3)

nyu kiyur - ta, 4) *rig - ka kiyur - ta*, 5) *lta - ta kiyur - ta*,

6) *stege - ta kiyur - ta* *dan*, 7) *dhias - po kiyur - ta*,

8) *nyen raṇi - ta* *byed - ka* *kiyur - ta*, 9) *bya - ta*

raṇi - ta *byed - ka* *kiyur - ta*.

ca. 1-1) 开急转变

(二) 相转变 (三) 因转变 (四) 成转变 (五) 见转变

<p>丁 本 a yap yap z z z 。</p>	<p>三 原 之 yap yap 以 替 本 一 五 九 ペ ー ジ 、 註 二 に 記 可</p>	<p>以 縁 月 了 轉 變 、 (九) 所 作 明 了 轉 變 。</p>	<p>底 轉 變 、 (五) 見 轉 變 、 (六) 生 轉 變 、 (七) 物 轉 變 、</p>	<p>丁 、 一 形 轉 變 、 (二) 相 轉 變 、 (三) 因 轉 變 、 (四) 相</p>	<p>變 、 以 八 者 作 法 了 別 轉 變 、 (九) 九 者 生 轉 變 。</p>	<p>者 見 轉 變 、 (六) 六 者 物 轉 變 、 (七) 七 者 縁 了 別 轉</p>	<p>變 、 (三) 三 者 因 轉 變 、 (四) 四 者 相 底 轉 變 、 (五) 五</p>	<p>(九) 事 轉 變 。 W 、 一 者 形 相 轉 變 、 (二) 二 者 轉</p>	<p>(六) 性 轉 變 、 (七) 縁 分 明 轉 變 、 (八) 所 作 分 明 轉 變 、</p>
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

「六五」一切諸法の相続にたいする執著に

ついて

そのとき、菩薩・摩訶薩マハーマテは、

また、世尊に一切諸法の相続の義と解脱の義^こ

を請うた。

― 世尊・如來・阿羅漢・正等覺者は、私

に、一切諸法の相続の相と不相続の相をお説

きください。その相続・不相続の相をよく分

析して知れば、私と他の諸菩薩・摩訶薩は、

すべてこの相續・不相續の方便に通達し、言葉
 の通りに義に執著する相續のなかにおち入る
 ることなく、^{（こゝ）}一切諸法の相續・不相續に通達し
 て慧によつて言葉・文字の妄分別をすて、^{（こゝ）}す
 べての仏国の集会のなかに入つて力と自在と
 神通（をえ）^{（こゝ）}がーラニ一の印にしるしづけら
 れ、^{（こゝ）}さまざまな變化（身）の老によつて（^{（こゝ）}）
 十の無尽の誓ひ^{（こゝ）}によくその慧をとどめ、月・
 日・マニ宝・大種の行境のようは無功用であ
 り、
 すべてこの地において自らの妄分別の見を

滅し、一切諸法を夢・幻のごとくであると見
 ることによつて、心地の所依に入り、所依にし
 たが、つて法を説くことによつてすべての衆生
 界を啓発し、夢・幻などの（ような）一切諸
 法についての有・無の見解をすて生・滅の妄
 分別をはなれて、異なる言葉の所依を転じて
 （かの諸衆生を）確立させるでありますよう。
 世尊は、たえた。
 ーよろしい。よろしい。マハーマテ、よ
 それなら、ば、よく聞きなさい。よく聞
 いて、よく

くくくろにとめなさい。私にはあなたに説くであらう。

―かしこまりました。世尊よ。

といて、菩薩・摩訶薩マハーマテイは、世

尊のことばに耳をかたむけた。

世尊はつぎのようにつづけた。

―マハーマテイよ、一切諸法の言葉にし

たがって義に執着する相続は量り知れない。

（すなわち、たとえば）相に執着する相続、

縁に執着する相続・存在と非存在に執着する

相續・生と不生に執著する相續・滅と不滅に
 執著し妄分別する相續・衆と衆ではないもの
 に執著して妄分別する相續・有為と無為を妄
 分別し執著する相續・地と地ではないものの
 自相を妄分別し執著する相續・自らの妄分別
 の現觀を妄分別する相續・有と無の偏見をも
 つ外學者の所依を妄分別する相續・三衆と一
 衆の現觀を妄分別する相續である。マハーマ
 テ、よ、これらと、他の凡夫・異生のもつた
 ちの（162）自らの妄分別の相續があり、この

相續にもとづいて、凡夫・異生のものたちは

有と無の相續の相に執著して、妄分別し、蚕

のようにな、自らの妄分別の見る相續という糸

によつて、自らと他のものたちをおおいかく

すのである。^②しかし、マハーマテイよ、くこ

には、どのような相續も相續の相もない。一

切諸法は寂靜であることが認められるからで

ある。マハーマテイよ、妄分別が生じないの

で、あるから、菩薩・摩訶薩は一切諸法のなか

に寂靜の見るをもつて住しているのである。

うしてであらうか。するわち、一切諸法につ
 つて束縛と解脱とが知られるのみである。ど
 るものもない。ただ虚妄におちいつた智によ
 かなる束縛されるものもないし、解き放たれ
 り相^そもない。マハーマテイよ、くくには、い
 見るならば、一切諸法の相続もなく、非相続
 存在についての妄分別の相続は寂靜であると
 無相・唯心にしたがい、有と無とのすべての
 せず、自心所現の相のみであることを覺知し
 また、マハーマテイよ、外的な存在は存在

いての、有・無の相続は得られないからであ
 る。
 また、マハーマテ、よ、凡夫・異生のもの
 たちには三つの相続がある。すなわち、貪と
 瞋と癡であり、歡喜と貪をともなつた再有を
 ひく渴愛であつて、これにもとづいて、一凡
 夫・異生のもののたちの、^諸道の相続が生ず
 るのである。このうちで、諸衆生の相続とい
 うのは五道というくどであり、マハーマテ、
 よ、（その）相続を断ち切れれば、（163）相続

も非相續の相も知られない。

また、マハーマテ^イよ、三和合の縁と所作

と相應に執著するく^②によつて、諸識の相續

がたえるく^②となぐ存し、生・相応として執著

するく^②によつて存在の相續が存する。諸識

について三和合の縁をはなれ、三解脱を見る

ならば、すべてのの相續は生じないであらう。

くのく^②によつてつぎのよう^②に説かれる。

虚妄の分別が、まさに、相續の相であると

いわれる。それを如実に知るく^②によつて、

相
続
の
土
壌
は
き
よ
め
ら
れ
る
。

四
 $\frac{1}{1}$

凡夫たちには、存社を言葉によつて知り取る
のであるから、あたかも蚕のようになら
の妾分別によつて縛られ、相続について無
知である。(四七)

7. 訂正

(1) sansa - sansa - alla - parimotana - allam,

chas thans - cad tays' antahans - abyer - bali' don yoria

analog - bin player $\left(\frac{10}{\text{FR}} \right)$ 6 asthma 2 player

2
 記
 2
 2
 3
 5
 1
 切
 2
 相
 統
 義
 解
 脫
 義
 我

W. 一切諸法相續不相續相。T. 解脫於一

切法深密義及解義相。

3) gatha-ranta - anta - abhiniveśa - samudhau va pra-

vatayuk, apra - yī - bhūti yī den la chags - pañi mātams -

abgar - tar mi - bhūti - ra. 不隨上所說義計

著相結。W. 不隨執著諸法相續不相結相。

T. 不隨如言取義深密執著。

3) vāg - abhava - pratisaṃkhyānam viśiṣṭa buddhā,

śākyāni yī - ge la so - so - nam - pa - stog - pa namo

śākyāni raṣ - tu tsem ste. 自言說文字相見。

W. 離一切法相續不相續言說文字等想。T.

離文字語言虛妄分別。原文中の Buddhyā の 説

ヲ分ル。Tib. ni l tka u.

E dāśa - nistha - pada, mīlān - thung - pali' gras ges.

S. + 無尽句。W. + 尽句。T. + 無尽願。

原文 yathā nhad Tib. si - nigs - par. S. W.

随其所住 12 l tka u. yathā yagam 3 T 2。

泉記 阿羅漢の如く (p. 92)

原文 nūta - anyathā - paṇḍita - vīṭṭi - āśrayataya 17

Tib. 2. sgra gphan gyi mnam - grais la bying - pali'

gnas , そのまま訳し得るが、異言説

義其自身、轉勝、下、不著言説令轉所依により

- kaa' vithy - as' naya' taya' 2 讀む。

(5) 原文 ravarika' tya - ch'it'i - sam'dhi' - sutra - notanatalaya'

ran' q' m' m' - yan - itog - k'it'i' ita - ta' m' t' h' a' m' a' -

aan' i' d' ad - k'it'i' p'hyin' 12. 5. 12 愚妄想心如蚕

繭繭以妄想年自纏纏他。有無相統計著に

ルハ。

(8) T'it. 12 m' t' a' h' a' m' - a' b' y' a' - b' a' k' i' m' t' a' h' a' m' - a' i' d' = a' a' m' d' h' i' -

l' a' b' s' a' n' a' 3 読む。

(9)

hai - namgati - patyaya - senya - yaya - adhi nirvāṇa,
 gaur - vidus - vadi' neyan dui tya - ba abyan - ba la
 mion - var - chag - vadi' phya.

S. 三 和合縁 . 14.

方便計著。丁、若有執著三和合縁。

(10)

Vithi は . . . まゝと 曰 相續 の 伺察 才九 心 と

すべきであるが、實際は一六四ページの本文

の 解説 の おわったところと九品の終りと

し 2 いる。山口益博士、前掲論文、一三四

ページ参照。

